

史跡和歌山城 第19次発掘調査概報

1999

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

前回発送の第22集『史跡和歌山城 第19次発掘調査概報』の6ヶ所に誤植があります。
お手数ですが訂正方お願いいたします。

《正 誤 表》

P 1	第1図のスケール	(誤) 100m	(正) 200m
P 6	第4図のX軸座標値 上から	(誤) X=-19740m X=-19700m X=-19660m	(正) X=-196440m X=-196480m X=-196520m
P 9・10	第6図のX軸座標値 右から	(誤) X=-196480m X=-196464m	(正) X=-196460m X=-196452m
P 9・10	第6図のY軸座標値 上から	(誤) Y=-75880m Y=-75800m	(正) Y=-75866m Y=-75874m
P41	19行	(誤) 120・121はいわゆる「古寛永」、122・123は「新寛永」 (正) 121・122はいわゆる「古寛永」、120・123は「新寛永」	

図版58下段写真 121と123が番号逆

序 文

和歌山城の立地する和歌山市は、和歌山県の北部に位置し、奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域であります。その和歌山平野の中心部に和歌山城は位置します。和歌山城は天正13（1585）年に豊臣秀吉が築城を命じて以来、関ヶ原の戦い後の慶長5（1600）年からの浅野氏を経て、元和5（1619）年に徳川頼宣が城主となり、その後紀州は徳川家の領有となります。現在は国史跡の和歌山城として和歌山市民の憩いの場となっております。

このたび、史跡整備のため、和歌山城二の丸の北側櫓台部分を発掘調査いたしました。調査の結果、二の丸に建てられたとされる月見櫓、物見櫓、駿河櫓などの礎石がみつき、その基礎構造が確認されました。また、火災や地震の痕跡なども新たにみつき、和歌山城のたどってきた歴史の一端を明らかにすることができました。

調査は当財団が平成11年7月から12月までの期間で行い、ここに概要報告書をまとめたものです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

本書出版に際して、発掘調査に御協力をいただいた関係機関等及び地元の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成11年3月31日

財団法人 和歌山市文化体育振興事業団

理事長 北 氏 武

例 言

1. 本書は、和歌山市が一番丁3番地に所在する和歌山城二の丸跡に計画した史跡整備事業に先立つ発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約1000 m²を1998年7月17日から12月25日までの期間で実施した。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会

教育長 山口喜一郎

文化振興課長 久保隆司

文化財班長 小松埴甫

学芸員 前田敬彦

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長 北氏 武

総務課長 川寄健治

事務員 奥野勝啓（調査庶務担当）

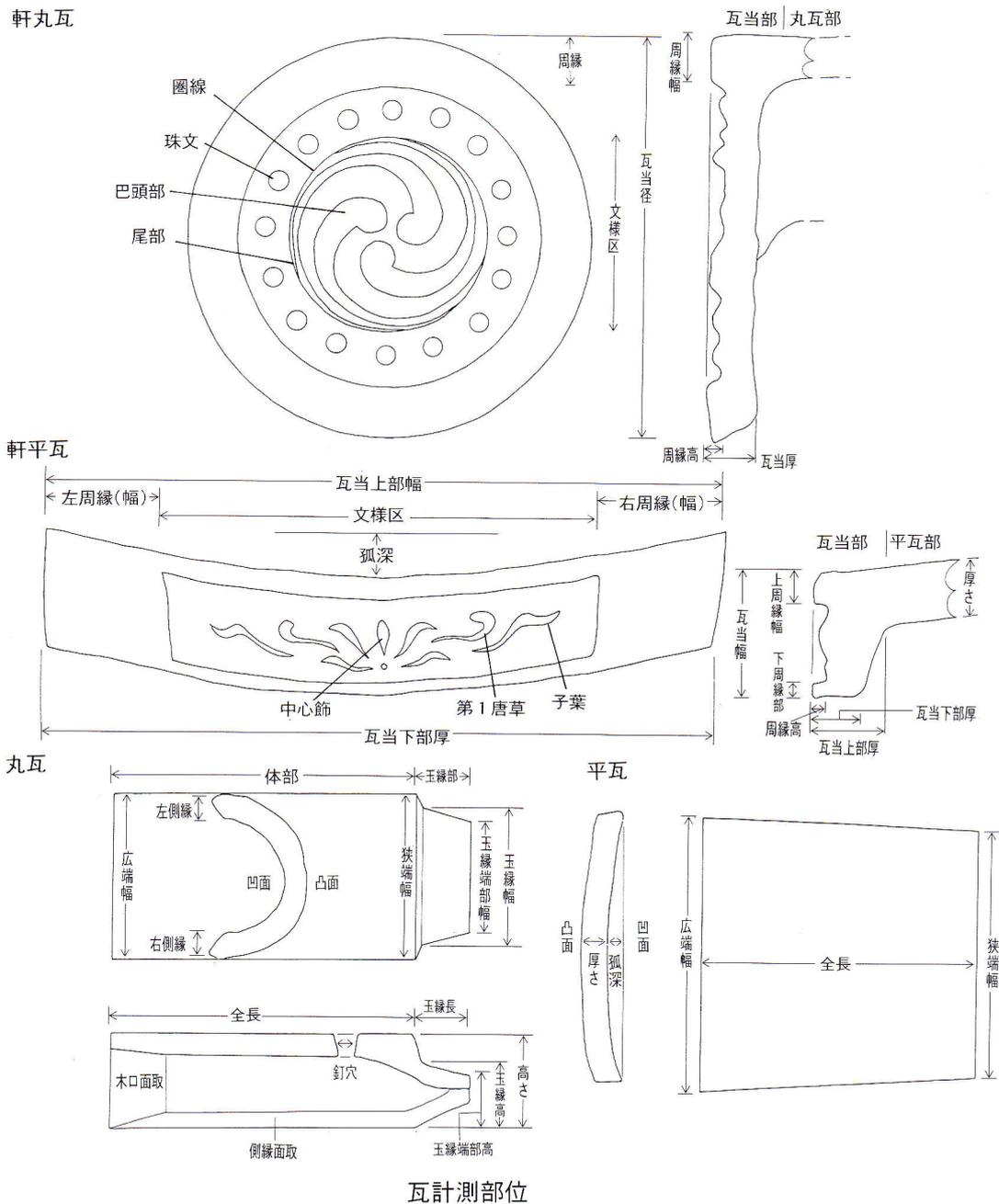
学芸員 北野隆亮（発掘調査担当）

学芸員 奥村 薫（ ” ）

4. 遺跡・遺構及び本概報掲載の遺物写真撮影は北野、奥村のほか同財団学芸員藤藪勝則が分担して行った。
5. 本書の執筆は発掘調査担当の北野・奥村のほか同財団学芸員藤藪勝則が分担し、編集は北野が行った。なお、「3. 既往の調査」については前田敬彦（和歌山市教育委員会）が執筆した。各執筆分担の文責は目次に示した。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
7. 本書に用いた石垣立面図のうち、堀に面する石垣部分は和歌山市産業部和歌山城管理事務所から提供を受けたものである。また、和歌山県立図書館の許可を得て『和歌山御城内惣御絵図』（同図書館蔵）の一部を本書に掲載させていただいた。ご配慮に感謝の意を表します。
8. 埴に記された文字の判読について、和歌山市立博物館館長三尾功氏、同副館長寺西貞弘氏に御教示を受けた。記して感謝申し上げます。
9. 概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

瓦 凡 例

- 瓦の文様は家紋の場合を「紋」、それ以外の三巴文・唐草文などの文様の場合は「文」を用いた。
- 巴文の巻きは、巴頭部を始点に尾部の端へ向かう巻きの方で「右巻き」・「左巻き」と表現した。
- 丸瓦凹面に残る粘土塊を切断する痕跡は、糸切りによる場合放物線を、鉄線切りによる場合平行線を描くことが多い。これを森田克行氏の提唱（『摂津高槻城』高槻市教育委員会 1984年）に従って、前者を「コビキA」後者を「コビキB」と呼ぶ。
- 軒丸瓦の珠文数、瓦の計測値は復元したものを含む。
- 瓦の名称及び計測部位は下記の通りである。



本文目次

1. 調査の契機と経過	(北野隆亮)	1
2. 位置と環境	(奥村 薫)	2
3. 既往の調査	(前田敬彦)	4
4. 調査の方法と経過		
(1) 調査の方法	(北野)	6
(2) 調査の概要	(")	6
5. 遺構		
(1) A区の遺構	(奥村)	8
(2) B区の遺構	(")	16
6. 遺物		
(1) 古墳～奈良時代の土器	(藤藪勝則)	28
(2) 江戸時代の土器・陶磁器	(北野・藤藪)	28
(3) 瓦	(藤藪)	32
(4) 金属製品	(北野)	41
(5) 石製品	(")	41
7. まとめ		
(1) 櫓台上面遺構について	(北野)	42
(2) 二の丸櫓台石垣構築の特徴	(")	45
(3) 「駿河櫓」 附属建物跡検出の「塼敷」 遺構について	(奥村)	49
(4) 石垣面にみられる刻印について	(")	51
報告書抄録		54

図版目次

- 図版 1 調査地周辺航空写真（北から）、調査地近景（北西から）
- 図版 2 A区 調査前の状況（南から）、A区 調査前の状況（南東から）
- 図版 3 A区 全景（南から）、A区 全景（西から）
- 図版 4 A区 「月見櫓」（南から）、A区 「多聞櫓」（北から）
- 図版 5 A区 調査区西端部（東から）、A区 調査区南端部（北から）
- 図版 6 A区 「月見櫓」礎石1・2・3（東から）、A区 「多聞櫓」礎石4（北から）
- 図版 7 A区 石垣沈下状況（西から）、A区 集石（南から）
- 図版 8 A区 櫓台石垣（北西から）、A区 SV-3 立面（南から）
- 図版 9 A区 SV-4 立面（南から）、A区 SV-5・6 立面（南西から）
- 図版 10 A区 サブトレンチ1 全景（東から）、A区 サブトレンチ2 全景（西から）
- 図版 11 A区 サブトレンチ2 全景（東から）、A区 「月見櫓」石列立面（南から）
- 図版 12 A区 サブトレンチ3 全景（西から）、A区 サブトレンチ3 全景（東から）
- 図版 13 A区 サブトレンチ3 土層堆積状況（北から）、A区 サブトレンチ3 SV-4 石垣基底部（西から）
- 図版 14 A区 サブトレンチ4 全景（西から）、A区 サブトレンチ4 全景（東から）
- 図版 15 A区 サブトレンチ4 東側土層堆積状況（北西から）、A区 サブトレンチ4 西側土層堆積状況（北から）
- 図版 16 A区 埋設石積（北から）、A区 サブトレンチ5 SV-4 石垣基底部（西から）
- 図版 17 A区 刻印1、刻印2、刻印3、刻印5、刻印7、刻印8、刻印9、刻印10・11・12
- 図版 18 A区 刻印13、刻印14、刻印15、刻印17、刻印18、刻印19、刻印20、刻印21
- 図版 19 A区 刻印22、刻印23、刻印24、刻印25、刻印26、刻印27、刻印28、刻印29
- 図版 20 B区 調査前の状況（南西から）、B区 調査前の状況（東から）
- 図版 21 B区 全景（東から）、B区 全景（西から）
- 図版 22 B区 「御小納戸蔵」全景（西から）、B区 「御小納戸蔵」南面石垣（南から）
- 図版 23 B-4区 全景（西から）、B-4区 北面石垣上面裏込状況（南から）
- 図版 24 B-4区 「物見櫓」西側石列（北から）、B-4区 「物見櫓」西側石列（南から）
- 図版 25 B-3区 南面石垣（南から）、B-3区 南面石垣（南から）
- 図版 26 B-3区 全景（東から）、B-3区 全景（西から）
- 図版 27 B-3区 階段2 東側石列（南から）、B-3区 階段2 西側石列（南から）
- 図版 28 B-3区 階段5 東側石列（南から）、B-3区 土層堆積状況（北から）
- 図版 29 B-3区 礎石列（東から）、B-3区 礎石列（西から）
- 図版 30 B-3区 北面石垣上面裏込状況（南から）、B-3区 南面石垣上面裏込状況（北から）

- 図版 31 B-3区 階段3 (南から)、B-3区 階段3 (東から)
- 図版 32 B-3区 階段4 (南から)、B-3区 階段4 (東から)
- 図版 33 B-3区 南面石垣 (南から)、B-3区 南面石垣 (南から)
- 図版 34 B-1・2区 全景 (東から)、B-1・2区 全景 (西から)
- 図版 35 B-1区 全景 (北から)、B-1区 全景 (南から)
- 図版 36 B-2区 「塙敷」全景 (西から)、B-2区 「L字状」瓦列 (南から)
- 図版 37 B-2区 土層堆積状況 (北から)、B-2区 南面石垣 (南から)
- 図版 38 B-2区「塙敷」下層「駿河橋」東側礎石列 (南西から)、B-1区 東面石垣 (東から)
- 図版 39 B区 サブトレンチ1全景 (南から)、B区 サブトレンチ2全景 (南から)
- 図版 40 B区 サブトレンチ3全景 (南から)、B区 サブトレンチ3「物見櫓」礎石7 (東から)
- 図版 41 B区 サブトレンチ4全景 (南から)、B区 サブトレンチ4「物見櫓」西側石列立面
(西から)
- 図版 42 B区 サブトレンチ5全景 (南から)、B区 サブトレンチ5全景 (西から)
- 図版 43 B区 サブトレンチ6全景 (南から)、B区 サブトレンチ6礎石8 (東から)
- 図版 44 B区 サブトレンチ6 焼土検出状況 (東から)、B区 サブトレンチ6 礫層検出状況
(東から)
- 図版 45 B区 サブトレンチ7全景 (南から)、B区 サブトレンチ7全景 (西から)
- 図版 46 B区 サブトレンチ8全景 (西から)、B区 サブトレンチ8土層堆積状況 (北から)
- 図版 47 B区 サブトレンチ9全景 (東から)、B区 「駿河橋」東側礎石列 (北から)
- 図版 48 B区 サブトレンチ11全景 (南から)、B区 サブトレンチ11石垣・階段5基底部
(南から)
- 図版 49 B区サブトレンチ11 西壁土層堆積状況 (東から)、B区サブトレンチ11 東壁土層堆積状況
(西から)
- 図版 50 土師器、瀬戸・美濃系陶器、志野、肥前系陶器、備前焼、近在窯系陶器
- 図版 51 肥前系陶器、肥前系磁器染付
- 図版 52 染付、瀬戸・美濃系磁器染付、白磁、中国製染付
- 図版 53 軒丸瓦
- 図版 54 軒平瓦
- 図版 55 丸瓦、平瓦
- 図版 56 鬼瓦、棟込瓦、面戸瓦
- 図版 57 烏伏間瓦、隅軒平瓦、掛瓦、塙
- 図版 58 塙、「L字状」瓦、金属製品

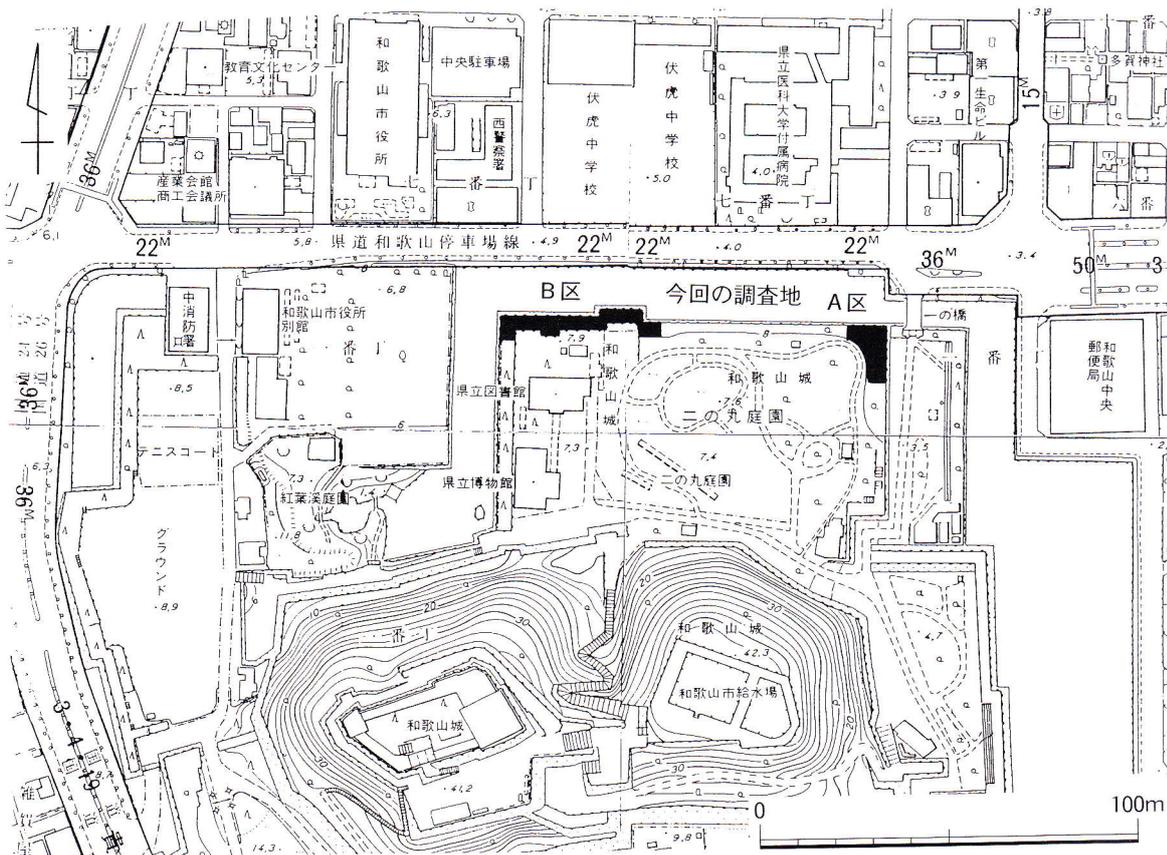
1. 調査の契機と経過

和歌山市が国指定史跡和歌山城の二の丸跡整備事業を計画し、整備計画に基づき櫓等の復原資料を得るための事前確認調査として埋蔵文化財発掘調査を行うこととなった。調査は和歌山市教育委員会の指導のもとに、同市から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施したものである。

調査地は、和歌山城の北側部分にあたる二の丸跡の北東端部に位置する「月見櫓」周辺約300m²をA区、また二の丸跡北西端部に位置する「駿河櫓」周辺から北側櫓台上を西に約75mの範囲までの約700m²をB区と設定し、調査を実施した。

調査地の周辺調査について、本調査A区の北東に位置する一の橋大手門再建工事に伴う調査が市教育委員会によって第1次調査として1981年に行われ、2時期の門の礎石を伴う遺構面が確認された。また、一の橋架換工事に伴う調査が同教育委員会により第3次調査として1982年に行われ、堀内で柱列痕と柱抜き跡を検出し、過去に2度橋の架換を行っていることが明らかにされている。二の丸内部についての調査は本財団が1993年に第12次調査のA区として幅約1.3mのトレンチ調査を行っている。調査の結果、二の丸生活面の当初の標高は約6.6mであることや二の丸の生活空間の南限を区画すると考えられる石垣、礎石の根石遺構など多数の遺構を検出し、現在においても二の丸内部に江戸時代の遺構が遺存していることを明らかにした。

今回の調査は1998年7月17日から同年12月25日までの期間、合わせて約5ヶ月間で実施したものである。



第1図 調査位置図

2. 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する全長約 136km の紀の川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注ぎ、河口部において和歌山平野を形成している。紀の川は、古代には海岸部に磯の浦から和歌山城のある岡山に向かう大規模な海岸砂州を形成し、河口部において市内の北西に位置する現土入川付近で屈曲して南流し、現在の和歌川付近を流れていたとされる。現在の地形形成は、こうした紀の川の流路変化によって運搬された砂礫が堆積したことによるものである。

和歌山城は、紀の川河口南岸の和歌山平野の北西から南東へ走る吹上砂丘の北端にあたる標高約 48.9 m の独立丘陵である岡山に築かれており、周囲を一望することができる。この城は丘陵上に本丸と天守曲輪が双立し、その麓に二の丸、西の丸、南の丸、砂の丸などを配した典型的な平山城で、別名を竹垣城または虎伏城とも呼ばれる。

天正 13(1585)年に紀州を平定した豊臣秀吉は、弟である秀長に領有させ、自ら縄張りを行い、築城には藤堂高虎を初めとする普請奉行が当たったとされる。秀長は大和郡山城に居城していた為、城代として桑山重晴を 3 万石で入国させた。しかし、創建時の史料はほとんど知られておらず、城の構造を初めとする詳細については不明である。

その後、慶長 5 (1600)年の関ヶ原合戦に勝利した徳川家康が紀州を領有した。家康は大坂城の豊臣氏を牽制するため、戦功のあった浅野幸長を 37 万石で入国させた。城主となった幸長は、城内の拡張、城下町の形成に着手したほか、法令の発布や領内一斉の検地などを行ったことが知られる。これらは、浅野家の編年記録「済美録」や「諸事覚書」などの史料からうかがい知ることができる。

元和 5 (1619)年に浅野家は広島へ転封され、徳川頼宣が 55 万 5000 石に加増された紀州の城主となった。この頃の和歌山城は、城内の作事（建築工事）は続いていたことが「済美録」などから窺える。入国後の頼宣は、元和 7 (1621)年から城郭及び城下町の拡張・整備に着手し、頼宣の藩主期にはほぼ幕末にみられる形に整っていたようである。その後、5 代藩主である吉宗の時代には花崗岩を用いて、南の丸櫓台石垣などが構築された。また、幾度かの改修や地震や火災などで倒壊、焼失した建物の再建が繰り返された。特に、弘化 3 (1846)年の天守閣への落雷による火災の様子は史料からうかがい知ることができ、天守閣を始め、櫓などの建物を焼き尽くしたことが記録されている。城の再建は江戸時代中期以降、容易には許可されなかったが、御三家という家格のためか、火災から 5 ヶ月後には幕府から異例の再建許可を受け、嘉永 3 (1850)年に天守閣は他の焼失建物とともに完成している。

このように、初代城主徳川頼宣から 14 代茂承に至った紀州藩であったが、政局が慶応 3 (1867)年の大政奉還によって徳川幕府から明治政府に移った。明治 4 (1871)年の廃藩置県で紀州藩籍を政府に返納したことにより、約 250 年間に渡った紀州徳川家の治世も終焉を迎え、この法令によって、和歌山藩は和歌山県と改称された。明治時代以降の和歌山城は、昭和 6 (1931)年に文部省から史蹟に指定され、さらに昭和 10(1935)年に天守閣などが国宝建造物に指定された。しかし、昭和

20(1945)年の第2次世界大戦による大空襲で天守閣は消失し、城下町とともに壊滅的な被害を受けた。現在みられる天守閣は、昭和33(1958)年に外観のみ原形を伝える復興天守閣として完成したものである。また、江戸期城郭の一部である建物・石垣の修復、復原、整備も行われ、史跡公園として一般に広く活用されている。

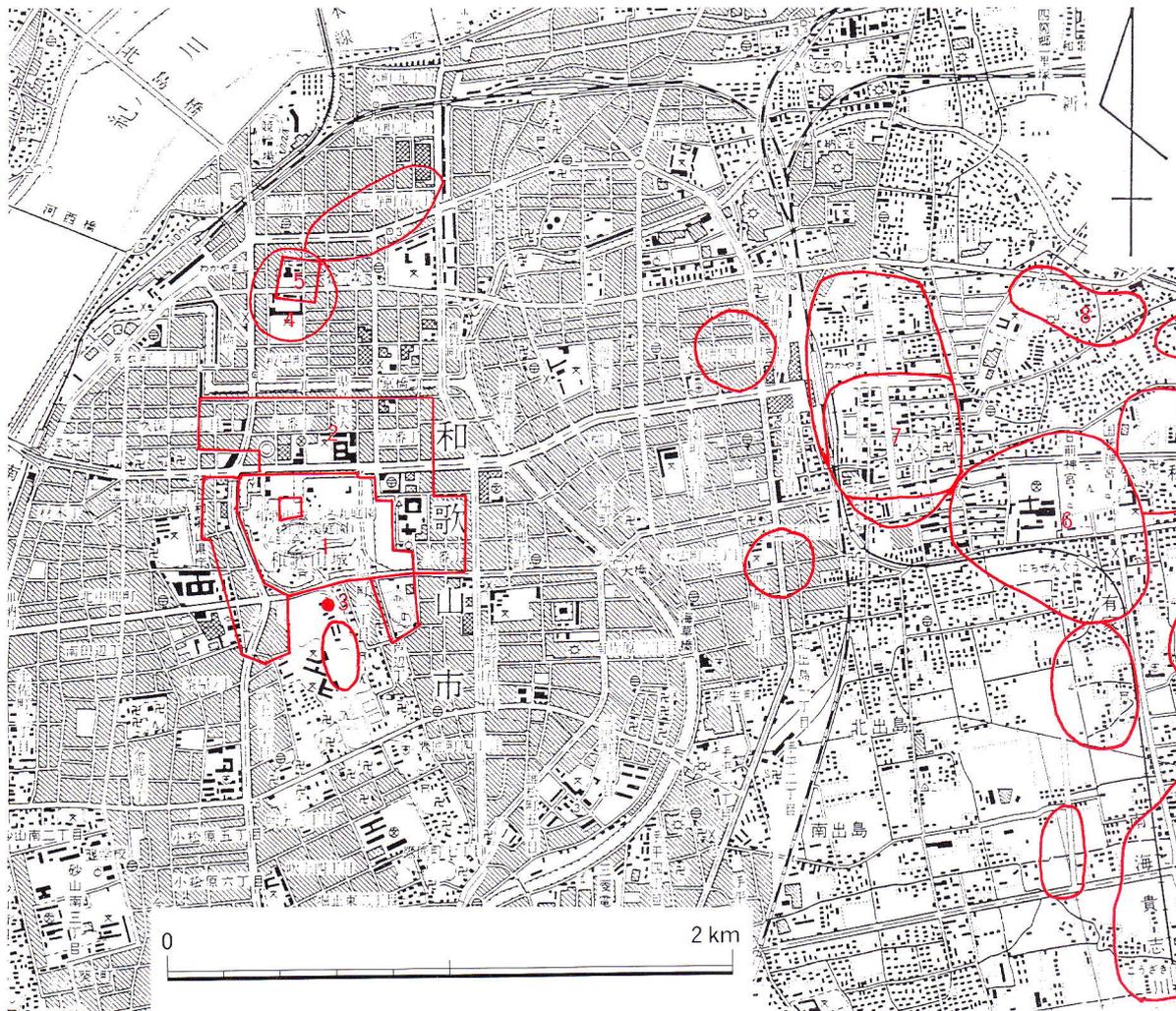
【参考文献】

『和歌山市史』第1巻 和歌山市 1991年

『和歌山市史』第2巻 和歌山市 1989年

『近世都市和歌山の研究』三尾功 1994年

『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団 1994年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	和歌山城	近世	5	本願寺跡	中世～近世
2	和歌山城跡	近世	6	秋月遺跡	弥生～近世
3	岡山の時鐘堂	近世	7	太田城跡	中世
4	鷺の森遺跡	弥生～近世	8	太田城水攻め堤防	中世

第2図 和歌山城周辺の遺跡分布図

3. 既往の調査

史跡和歌山城の第1次～第11次調査の概要は、『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』（財和歌山市文化体育振興事業団 1994）に記載しているため、以下では、第13次～第18次調査の概要を記述する。なお特に記述のないものは、財和歌山市文化体育振興事業団による調査である。

第13次調査^(註1)（1994年度）表坂入り口付近の石垣改修工事に伴い長さ約25mの石垣部分の調査を実施した。調査対象は石垣基底部分と石垣の上面で、調査面積は100m²である。石垣基底部分の大半は結晶片岩の岩盤上に設置されているが、岩盤のない所では緑色片岩の小割石を含む黄褐色弱粘質土の整地層上に設置されている。石垣内部では、上面から40cmの淡黄褐色弱粘質土系の堆積土に漆喰片や瓦片、土器が含まれていた。さらに下層では山土による整地と整地層を切り込む緑色片岩の小割石による裏込めが確認された。石垣の一部には後世の補修箇所が認められたが、大部分は築城当初の石垣と推定された。基底部分の調査により表坂の登り口付近はスロープであったことも判明した。出土遺物には、土器類（伊万里焼染付・備前焼すり鉢・備前焼建水・堺焼すり鉢・瓦質火鉢）、瓦類（巴文軒丸瓦・軒平瓦・滴水瓦）、銭貨（寛永通寶13枚）がある。

第14次調査^(註2)（1995年度）キャブシステム埋設に伴い、中消防署東側で2ヶ所のトレンチ調査が実施された。『和歌山御城内御惣絵図』によると御勘定御門に相当する箇所、調査面積は約30m²である。北側のA区（幅80cm、長さ26m）では、地表下50cmで西外堀の延長線上に該当する石垣を検出した。石垣最上段には幅約70cm、高さ約35cm、奥行き約1mの和泉砂岩の巨石を使用し、下段にも和泉砂岩の石積みを確認された。南側のB区（幅80cm、長さ9.5m）では、地表から約40cmで門柱礎石の一部とみられる2つの礎石が検出され、門から北側に旧地表面が上昇することも確認された。遺物には、滴水瓦・堺焼すり鉢・備前焼すり鉢・褐釉陶器徳利がある。

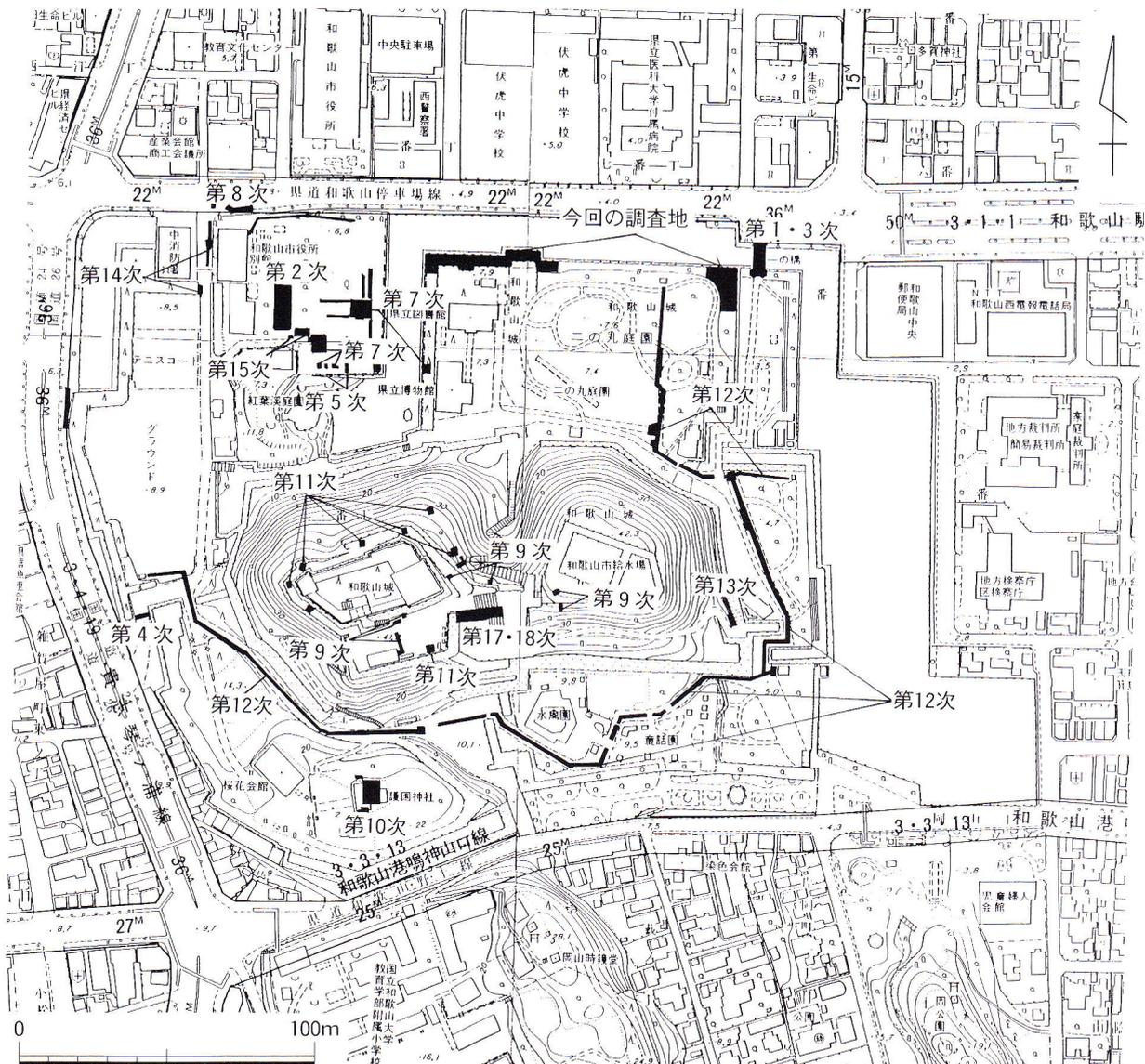
第15次調査（1996年度）西の丸跡内における便所棟建設に伴い、配管部分と便所棟部分の合わせて約80m²の調査が行われた。配管部分では、西の丸跡への進入路建設に伴い撤去された石垣の下部や幅1.25mの瓦敷の通路状遺構が検出された。瓦敷遺構は、南接する紅葉溪庭園内のものと連続していたと復元された。建物部分では、3面の遺構面が確認され、18世紀後半～19世紀中葉とみられる第2遺構面では緑色片岩による暗渠排水施設が3条確認された。また、19世紀中葉以降とみられる第1遺構面では、建物の礎石の基礎とみられる根石を伴う土坑6基が検出された。これらは、江戸時代後期から末期の西の丸内の建物に関連する遺構群として注目される。

第16次調査（1996年度）防災無線ケーブル埋設工事に伴い和歌山市教育委員会が、西の丸跡の北端部を長さ約70mにわたり調査した。調査地の大半は、幅わずか約60cmであり、遺構の全体像は把握しがたいが、石垣遺構や石列遺構、柱の基礎部分とみられる土坑等が検出された。出土遺物と検出面よりみて、大半は江戸時代末以降のものとみられた。出土遺物には、伊万里焼染付・備前焼すり鉢・堺焼すり鉢や瓦類がある。

第17次調査（1996年度）表坂の最上部に位置する御天守一の門櫓台の石垣改修に伴う発掘調査で、調査面積は約180m²である。南面する石垣は、結晶片岩の野面積みにより構築され、一部に石塔・石臼・礎石等が利用されていることから創建期の石垣と推定された。櫓台上面では東端から

約7mの範囲で径約15cmの片岩と砂岩を密に敷き詰めており、上部に構造物があったことが判明した。石垣の北側では、石垣に沿った排水施設と門に伴う礎石が確認され、櫓台上部の基礎構造と合わせて、御天守一の門が櫓門形式であったことが発掘調査の成果からも明らかとなった。遺物の多くは南面石垣途中の平坦面の堆積土から出土しており、瓦類以外は天守台方面から廃棄された遺物群といえる。瓦類のほかに肥前系陶磁器・備前焼陶器・輸入陶磁器・焼塩壺・土人形等がある。第18次調査(1997年度)第17次調査地点の追加調査として、天守一の門櫓台南面石垣の裏込め調査を実施した。調査の結果、上段の石垣は基底石近くまで砂岩の裏込め石が詰められており、平坦面から下部の石垣は上段石垣構築後の設置であることも判明した。第17次調査の成果と合わせて、一の門櫓台全体の構造が明確になった。

註1 栗本美香「史跡和歌山城 第13次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報4』(和歌山市文化体育振興事業団 1997年)
 註2 奥村 薫「史跡和歌山城 第14次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報5』(和歌山市文化体育振興事業団 1998年)



第3図 既往の調査地

4. 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

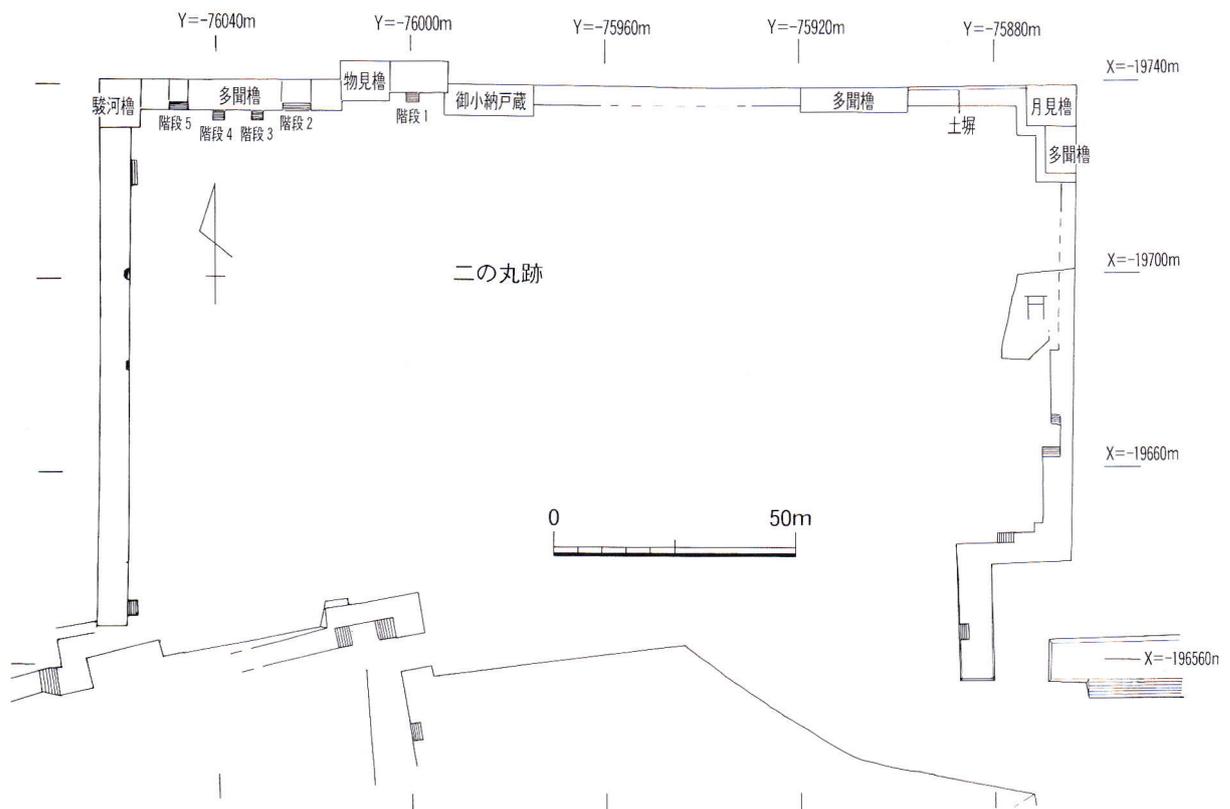
調査は、二の丸跡整備予定範囲内において行ったものであり、調査地は和歌山城二の丸跡内の北側堀に面した石垣上の櫓台部分である。櫓部分は北東隅の「月見櫓」、北西隅の「駿河櫓」、「駿河櫓」から東へ距離約 50 m の櫓台上にある通称「物見櫓」の 3ヶ所であり、「月見櫓」を中心とした約 300 m² を A 区、「駿河櫓」と「物見櫓」をつなぐ櫓台部分を中心とした約 700 m² を B 区と調査区を設定し、合計面積約 1,000 m² を調査した。

A 区は東西約 13 m、南北約 22 m の調査区を設定し、B 区は東西約 68 m、南北約 10 m の範囲を調査区とした。

記録保存の方法として、調査範囲内の平面実測図、石垣立面実測図 (A 区・二の丸側)、石垣断面実測図を縮尺 1/20 で作成した。なお平面実測には国土座標を基準とした値を使用し、遺跡の水準は国家水準点 (T.P. 値) を基準とした。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を用いた。

(2) 調査の概要

基本的な土層の堆積状況 (第 5 図) は、調査地が城郭の櫓台上である点、調査地 A 区の「月見櫓」から B 区の「駿河櫓」までが約 200 m の距離がある点など堆積土層の対応について、部分的にみられる堆積を除外して考えるならば、基本土層として表土である第 1 層 (10YR6/4 に近い黄橙) 粗砂 (細かい礫を含む) が「物見櫓」から「駿河櫓」まで 5 ~ 10 cm の厚さで見られ、第 2 層



第 4 図 調査地区割図

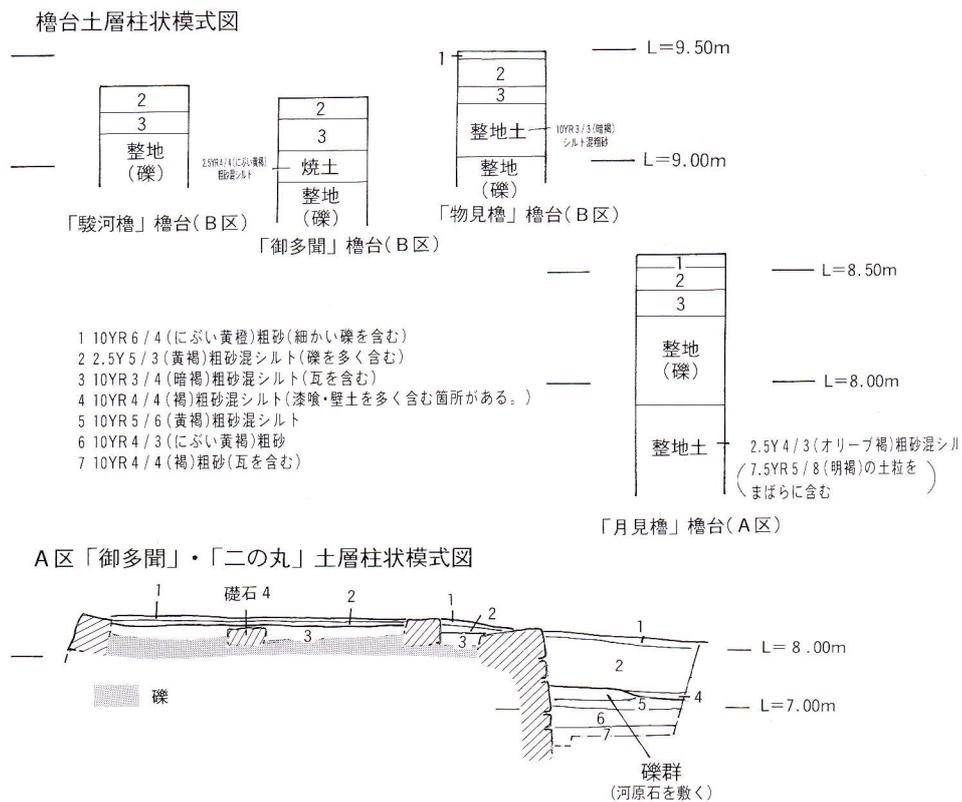
(2.5Y5/3(黄褐)粗砂混シルト(礫を多く含む))が調査区のほぼ全面に約10cmの厚さで堆積する。第3層(10YR3/4(暗褐)粗砂混シルト(瓦・礫を少量含む))についても調査区のほぼ全面に約10~15cmの厚さで堆積するものである。以上の堆積については、櫓台構築後の堆積と考えられる。

なお、第3層下の土層については礫による整地層、あるいは土(2.5Y4/3(オリーブ褐)粗砂混シルト)による整地層がみられ、深掘調査の結果、それぞれ40~50cmの厚みで交互に整地されているものと考えられ、石垣背面側約1mの範囲に裏込石(結晶片岩の割石)がみられた。また、第3層下に焼土(2.5Y4/4(にぶい赤褐)粗砂混シルト)が5~10cmの厚さで堆積する部分がA・B区ともにみられ、焼土直下の整地礫上面に火を受けたと考えられる赤変部分が一部にみられるところも検出した。

調査の結果、櫓台上において多くの礎石を検出し、それぞれの櫓、土塀及び櫓に付属する建物跡などの基礎構造やその規模等を確認した。特に、A区では櫓台内面(二の丸側)の石垣の構造を明らかにすることができ、その石垣に今回の調査で新たに「刻印」を合計30ヶ所確認することができた。また、「月見櫓」を東西に貫く断層状の亀裂を検出した他、櫓台内面(二の丸側)石垣側に埋設石積を1ヶ所検出した。B区については、「駿河櫓」の東側において、塼を敷き詰めた塼敷を検出することができた。

調査は和歌山市教育委員会の指導のもとに同市から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて、平成10年7月17日から12月25日にかけて約5ヶ月の期間で実施したものである。

なお、検出した礎石等の遺構は江戸時代の遺構面である第3層上面において、ほぼ全面に検出したものであり、遺構面保護のため平面的な掘削はその面で止め、下層確認のための深掘調査については、小規模なサブトレンチ調査を行った。なお、B区で検出した塼敷について、原位置を保ったものと考えられる塼は現状保存として、土のう袋等で保護し、現位置での埋戻しを行った。



第5図 調査地柱状模式図

5. 遺構

(1) A区(第6図)

調査対象地は絵図などから「月見櫓」、「多聞櫓」、「土塀」に関連する遺構が検出されることが予測できたが、明治時代以降の土地利用に伴って埋没しており、調査前には石列が部分的に露出している状況であった。調査の結果、「月見櫓」、「多聞櫓」、「土塀」のほか、新たに絵図に描かれていない櫓台内面(二の丸側)の石垣の構造を明らかにすることができ、その石垣に「刻印」を確認することができた。この他、櫓台の構築に伴うと考えられる埋設石積を1ヶ所、また、SV-4西面前の第2層下面において、東西約80cm、南北約55cm、深さ約40cmを測る土坑(SK-3)などを検出した。

櫓台石垣は、砂岩の石材を用いた「打ち込みハギ」・「布目積」、石垣角は「算木積」の技法を用いて築かれていた。石垣上部石材の控えの長さは約60cmを測り、なかには、矢穴痕を確認できるものもある。

また、石垣裏込の上部には結晶片岩の割石を用いていることを確認した。この他、和歌山城の砂岩石材は、和歌山市と徳島間の紀淡海峡に位置する友ヶ島周辺で採石されたとされ、「多聞櫓」の石列石材には海蝕の痕跡のある石材もみられた。

[月見櫓]

「月見櫓」は東西約10.4m、南北約8.4mの規模を測る。櫓のほぼ中央部で砂岩の礎石を3基検出した。礎石1は約80×60cm、礎石2は約70×70cm、礎石3は約100×55cmの規模を測る。このほか櫓南側の石列上面に「㊦」の刻印を1ヶ所、同じ石材南面に「⊙」の刻印を1ヶ所、合計2ヶ所の刻印を確認した。

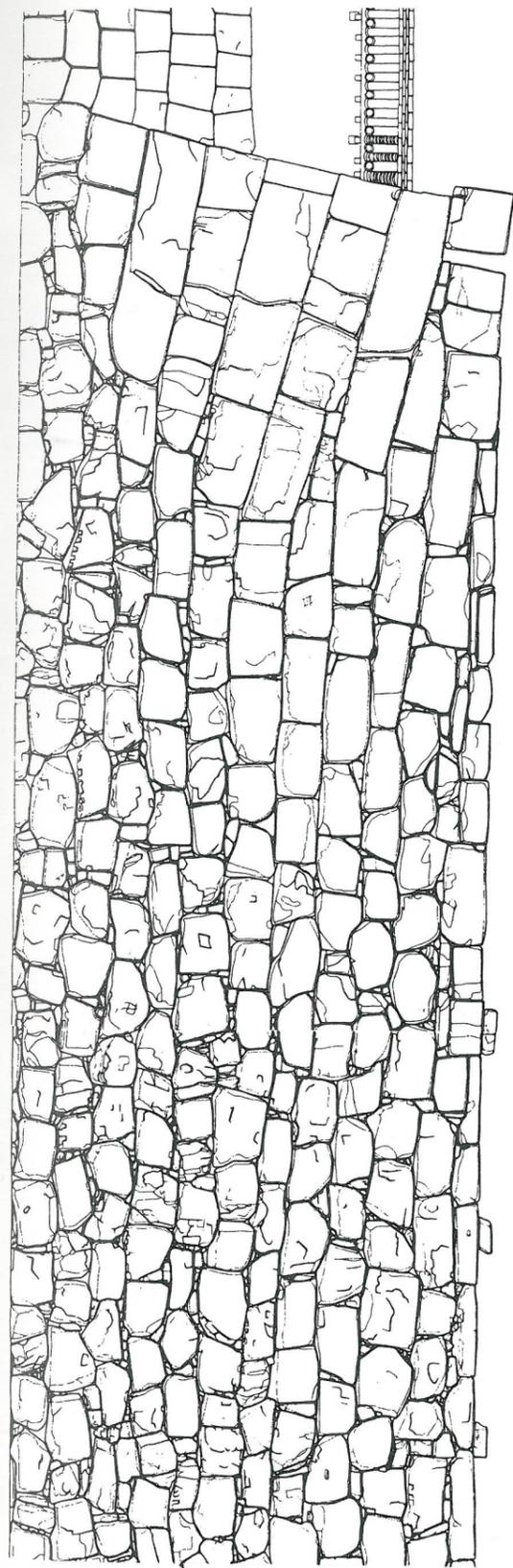
さらに、櫓台上面の南西角において、礎石の可能性のある約70×25cmを測る板状の結晶片岩を標高約8.6mにおいて検出した。また、これを取り囲むように東西約2.3m、南北約1.1mの範囲に同じく結晶片岩の10～30cmを測る石材が集石していた。

またこの櫓を東西に貫く断層状の亀裂を検出し、この亀裂による櫓の中央部礎石1の大きな傾斜や櫓台石垣の陥没を確認した。これは、地震を原因の一つと考えることができるが、このような状況に至れば建物は倒壊すると考えられ、さらに「月見櫓」を明治初年の古写真によって確認できることから、陥没はこれ以降に起こったものと考えられる。

このほか櫓内部の攪乱を利用して土層観察を行った結果、第3層の下層は礫を約35cm、土を約40cm以上の厚さで交互に突き固めて版築状に櫓内部を構築していることが明らかとなった。最上部の礫層上面は赤変し、またその上層に焼土を含むこと、さらに堀側などの石垣天端にも赤変した痕跡が認められることから「月見櫓」は、大規模な火災にあったことを推定することができる。

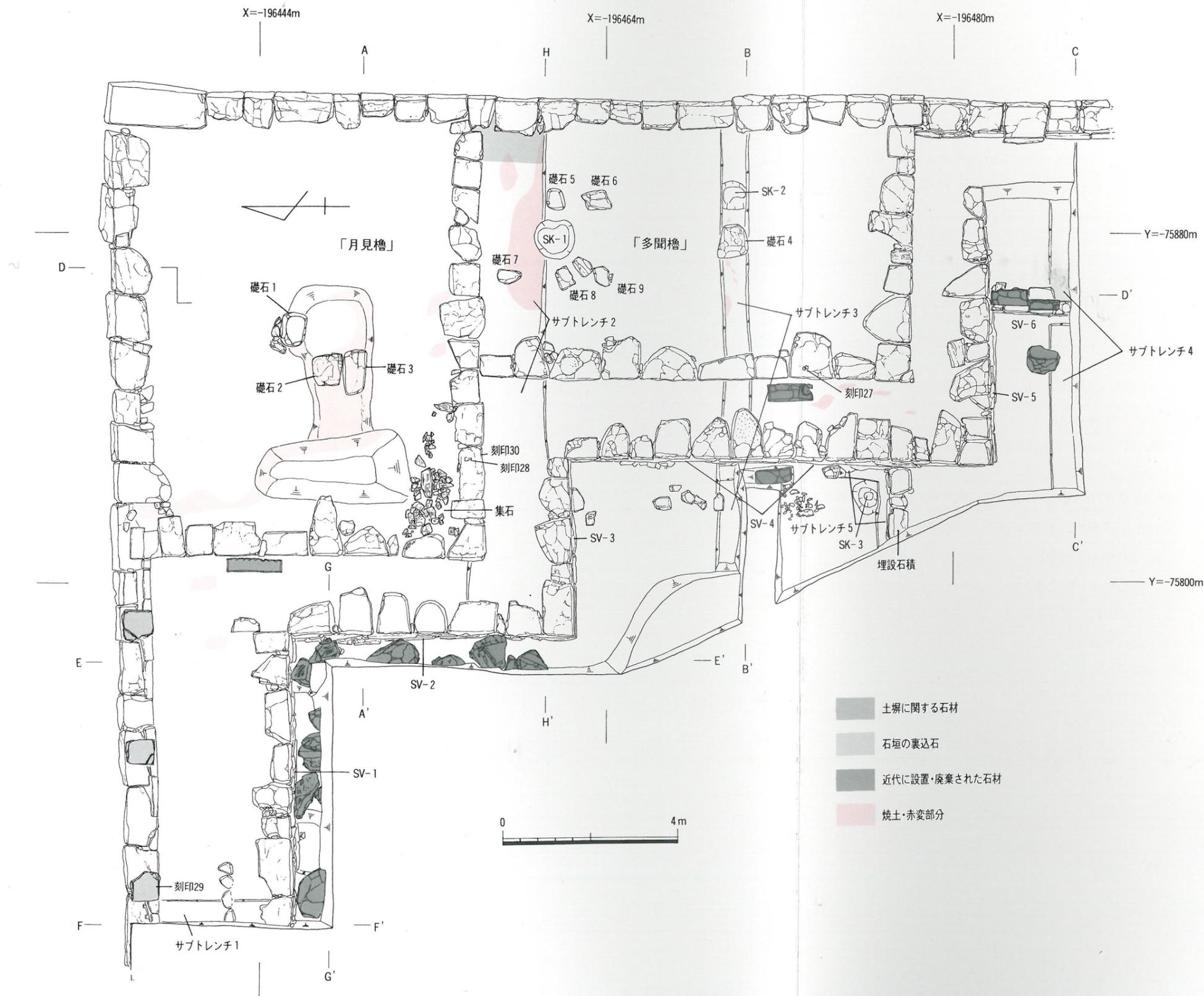
[多聞櫓]

「月見櫓」の南側において確認した「多聞櫓」は東西約6.3m、南北約10.15mの規模を測る。内部構造については、砂岩の礎石を6基とこれらと同様の礎石抜き取り痕とみられる土坑を2基検出した。礎石4は約75×60cm、礎石5は約50×40cm、礎石6は約45×50cm、礎石7は約35×55cmの規模を測る。この礎石は、本来の位置を失ったものとみられる。礎石8は約45×35cm、



1.8.00m

1.8.00m



第6図 A区 遺構全体平面図・北面石垣平面図

礎石9は約45×30cmの規模を測る。礎石5～9の石材は、礎石4と比較すると規模が小さなものである。

礎石抜き取り痕とみられるSK-1は、約85×95cm、深さ約20cmの規模を測り、礎石4と同規模の石材が置かれ、南北に並んでいたとみられる。SK-2は65×55cm以上、深さ40cm以上の規模を測り、大量の瓦が出土した。

また櫓台西側の石列上面において刻印を確認した。刻印の種類は「」の1種類1ヶ所である。

[土 堀]

明治初年の古写真などから「月見櫓」西側の北面石垣と「多聞櫓」南側の東面石垣上には、櫓と櫓を連結する堀が築かれていたことが明確であった。今回の調査によって堀の痕跡を検出し、その基礎構造を明らかにすることができた。

「月見櫓」櫓台の西側に連結する堀は、土層観察から基底部では南北幅約80cmの規模を測るほか、石垣上に木材などを使用せず、直に土壁を構築した後に約5mmの厚みをもつ白漆喰を塗っていたことが窺えた。土堀は石垣に沿って直線的に構築するため、北面石垣の天端石材南側が不揃いな箇所にはそれぞれ、その部分に適した直方体の石材を設置し、端を揃えていた。また、現況から本来延長約295mと推定される土堀の内、約8.35mの範囲を確認することができた。さらに、調査区外の範囲で北面石垣の上端面に約70×65cm、厚さ約35cm、約65×55cm、厚さ約20cm、約65×60cm、厚さ約20cmの方柱状の石材が約3.05mの間隔で3個、調査区外に8個、合わせて11個設置されているのを確認した。

城内の土堀については、昭和35年に重要文化財の岡口門に付属する東側土堀の復原整備が行われている。その際、狭間の周囲が切石で囲まれていたとの報告があることから、この石材は土堀の狭間に伴う可能性が考えられる。また調査区内で検出された石材のうち、西側石材の南側面に「」の刻印を1ヶ所確認した。この刻印は石材の分割面で分断されており、本来的には立方体のものを半裁したものと考えられる。

また「多聞櫓」櫓台の南側に連結する堀は、約4.3mの範囲を検出した。「月見櫓」西側の土堀の基礎構造と比較すると、攪乱などの影響で壁土や漆喰、石垣天端に方柱状の石材を確認できなかったが、西側同様の構造を持つ土堀であったものと考えられる。

[北面石垣]

北面石垣の東側石垣角は、長さ1～1.5mの石材を使用し、中には長さ約3.4mの面をもつ石材を「算木積」で構築している部分もみられる。堀の水深は約80cmを測る。

「月見櫓」櫓台北面石垣のD-D'部分では、11段積み、高さ7.75m以上、水面標高約1.65mを測る。また、石垣は約75度の勾配をもち、天端の標高は約8.7mを測る。

このほか石垣の立面には「」などの刻印が施刻されていることを確認した。

「土堀」櫓台北面石垣のE-E'部分では、16段積み、高さ7.65m以上、水面標高約1.6mを測る。また、石垣は約72度の勾配をもち、天端の標高は約8.4mを測る。

[東面石垣]

「月見櫓」櫓台東面石垣のA-A'部分では、8段積み、現況の高さ約4.5mを測る。また、石垣は約75度の勾配をもち、天端の標高は約8.6mを測る。

「多聞櫓」櫓台東面石垣のB-B'部分では、8段積み、現況の高さ約5.15mを測る。また、石垣は約75度の勾配をもち、天端の標高は約8.75mを測る。

[櫓台内側石垣]

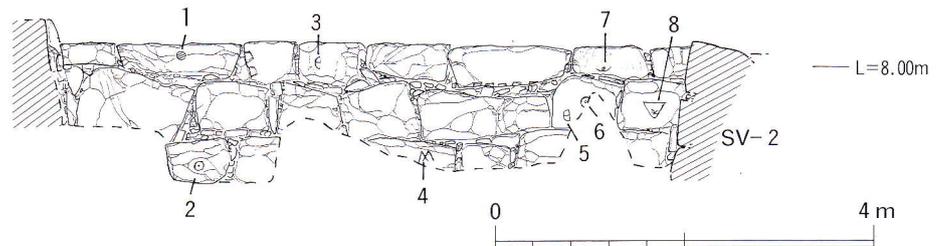
櫓台内側石垣は、SV-1からSV-6までを新たに検出した。この石垣は二の丸跡を取り囲む櫓台にそれぞれ連結するものとみられる。石垣は、まずSV-2からSV-5を積み、その後SV-1、SV-6を積んだものとみられる。SV-1の石材は天端から4段積みで、天端の標高約8.05m、検出規模は長さ約6.65m、高さ約1.5mを測る。SV-2からSV-5は基底部分から天端までの石材は4段積み、天端の標高は約8.4mを測る。基底部分の標高は約6.2mと推測される。

また櫓台上面は、「月見櫓」、「多聞櫓」の基礎石列によって区画され、この石列を囲むように通路状になった部分を検出した。この通路状部分は幅約1.8mを測る。SV-6は、現状においては3段積みであるが、本来の石垣は基底部分から天端までの石材は2段積みである。これらの石垣は砂岩の石材を用い、北・東面石垣と同様「打ち込みハギ」・「布目積み」の技法で築かれている。

[SV-1] (第7図)

この石垣は土堀櫓台の二の丸側の石垣である。天端の標高約8.05m、検出規模は長さ約6.65m、高さ約1.5mを測る。石材の奥行きは天端で40～80cm、高さ約40cm、幅は50～130cmを測る。天端の石材は、約2.15mの間隔で約130cmの石材を置き、その間に50～90cmの石材を配置していた。その下の2段目について、石材の高さは約60cm、幅50～110cmを測る。検出した最下段の石材の高さは約40cmを測る。

また石垣南面において刻印を確認した。刻印の種類は「⊙」、「○」、「⊕」、「⊖」、「①」、「ㄣ」、「▽」の7種類8ヶ所である。

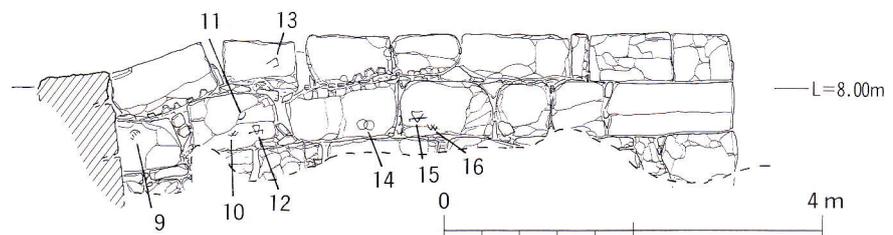


第7図 A区 SV-1 立面図

[SV-2] (第8図)

「月見櫓」櫓台の二の丸側西面であるこの石垣について、天端の標高は約8.45m、長さ約6.6m、検出した高さは約1.6mの規模を測る。石材の奥行きは天端で70～90cm、高さ約50cm、幅は60～120cmを測る。その下段石材の高さは約60cm、幅50～130cmを測る。検出した最下段の石材の幅は10～130cmを測る。

なお、北側の石材が大きく傾いているのは、地盤が陥没したためであるが、



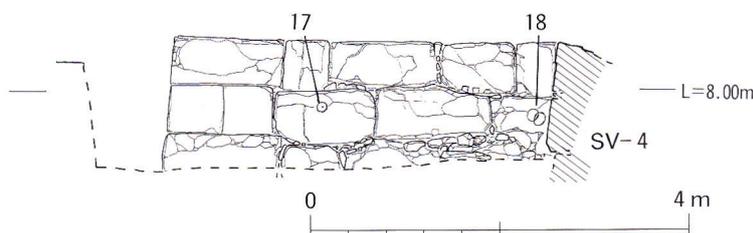
第8図 A区 SV-2 立面図

原因の一つとして地震による影響を考えることができる。

また、石垣西面において刻印を確認した。刻印の種類は「㊦」、「W」、「ノ」、「▽」、「ノ」、「∞」、「▽」の7種類8ヶ所である。

[SV-3] (第9図)

「月見櫓」櫓台の二の丸側南面を区画する石垣は長さ約4mを確認し、西角の石材の天端標高約8.5m、高さ1.4m、その他は約8.3m、高さ1.25mの規模を測る。石材の奥行きは天端で約60cm、高さ約50cm、幅は40～120cmを測る。その下段石材の高さは50～60cm、幅50～120cmを測る。検出した最下段の石材の幅は60～120cmを測る。



第9図 A区 SV-3 立面図

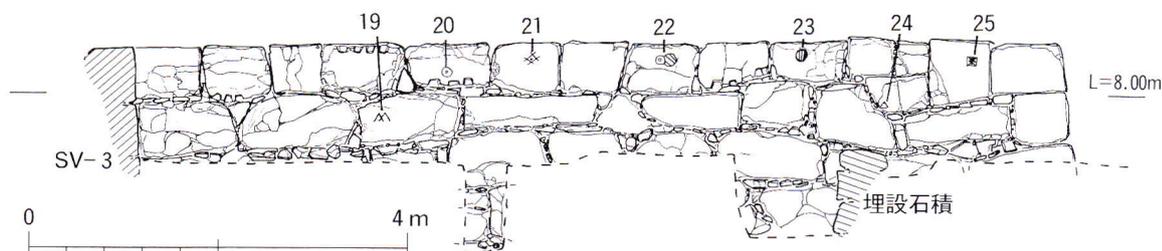
また石垣南面において刻印を確認した。刻印の種類は「○」、「∞」の2種類2ヶ所を確認した。

このほかSV-2・3間は、石垣の石材角を磨き上尺端から約1.2mまで目地を通しており、その下は粗仕上げの状態であった。これは石垣を積んだ後に、地表上に現れる所までの角を整えたものと考えられる。よって、旧地表は標高約7.25mであったと考えられることから、石垣は天端から下へ3石目の半分以上が地表にあったとみられる。

[SV-4] (第10図)

この石垣は「多聞櫓」櫓台の二の丸側西面石垣である。天端の標高約8.45m、長さ約9.85m、高さ約2.15mの規模を測る。基底部の標高は約6.4mと推測される。石材の奥行きは天端で50～100cm、高さ約50cm、幅は30～80cmを測る。その下段石材の高さは30～80cm、幅40～140cmを測る。さらにその下2段の石材の高さは50～60cm、幅80～100cmを測る。

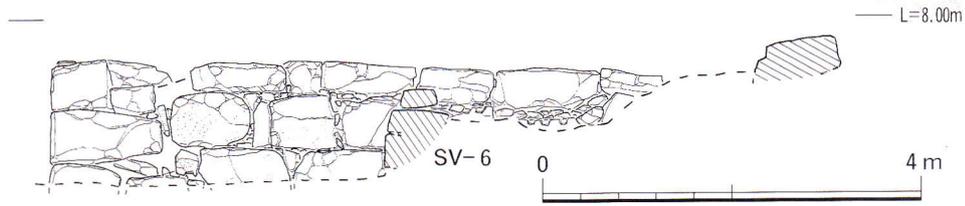
また石垣西面において刻印を確認した。刻印の種類は「㊦」、「◎」、「※」、「⊗」、「⊕」、「◁」、「☒」の7種類7ヶ所である。



第10図 A区 SV-4 立面図

[SV-5] (第11図)

この石垣は「多聞櫓」櫓台の二の丸側南面石垣で、長さ約6.45mを確認した。この石垣の中央部から東側は、緩やかな傾斜を持つものである。西側の天端標高約8.45m、高さ約1.3m、東側の天端標高約8.3m、高さ約1.2mの規模を測る。石材の奥行きは天端で50～90cm、高さ30～50cm、幅は40～110cmを測る。確認できたその下段石材の高さは60～80cm、幅70～110cmを測る。検出した最下段の石材の幅は確認できた範囲で65～90cmを測る。また角石から東へ約



第 11 図 A 区 S V - 5 立面図

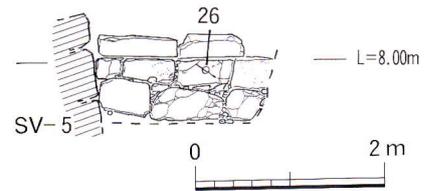
3.5 m の部分で S V - 6 と接続する。

また、S V - 4・5 間は、石垣の石材角を磨き上尺端から約 95cm まで目地を通しており、その下は粗仕上げのままである。これも S V - 2・3 間と同様の構築法といえる。またこのことから旧地表面は、標高約 7.5 m であったと考えられる。

このように石垣の石材角の目地を観察した結果、S V - 2・3 間と S V - 4・5 間の旧地表面の比高差は約 20cm である。このことから石垣構築時の地表面は、スロープになっていた可能性があるといえる。

[S V - 6] (第 12 図)

この石垣は塀の櫓台の二の丸側西面石垣である。この石垣は 2 段積みで、石材は他に比べ規模が小さいものである。基底部の標高は緩やかな傾斜をもつもので、北側が 7.4 ~ 7.5 m、南側が約 7.3 m を測る。石垣天端の標高は約 7.9 m、長さ約 1.9 m 以上、高さ約 65cm の規模を測る。周辺の旧地表面の標高は約 7.5



第 12 図 A 区 S V - 6 立面図

m であると考えられることから、石垣は最下段の半分以上が地表にあったとみられる。石材の奥行きは天端で約 60cm、高さ 20 ~ 30cm、幅は 30 ~ 60cm を測る。その下段石材の高さは約 30cm、幅 40 ~ 80cm を測る。基底部の標高は約 7.3 m である。

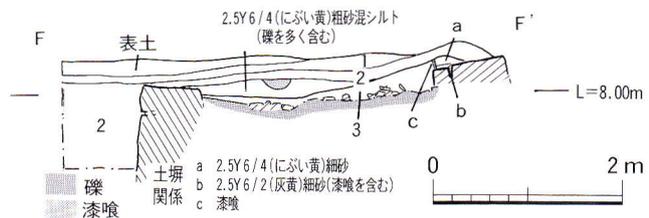
また石垣南面において刻印を確認した。刻印の種類は「ㄨ」の 1 種類 1 ヶ所である。

[サブトレンチ調査]

下層調査のために深掘調査区を 5 ヶ所設けた。櫓台上の第 3 層下面は、結晶片岩礫による整地層であることを確認した。さらに、整地層の礫層上面に赤変部分や直上に焼土層など火災の痕跡を検出した。また櫓台内面(二の丸側)の石垣基底部を検出し、石垣が砂層の上面に構築されている状況を確認した。

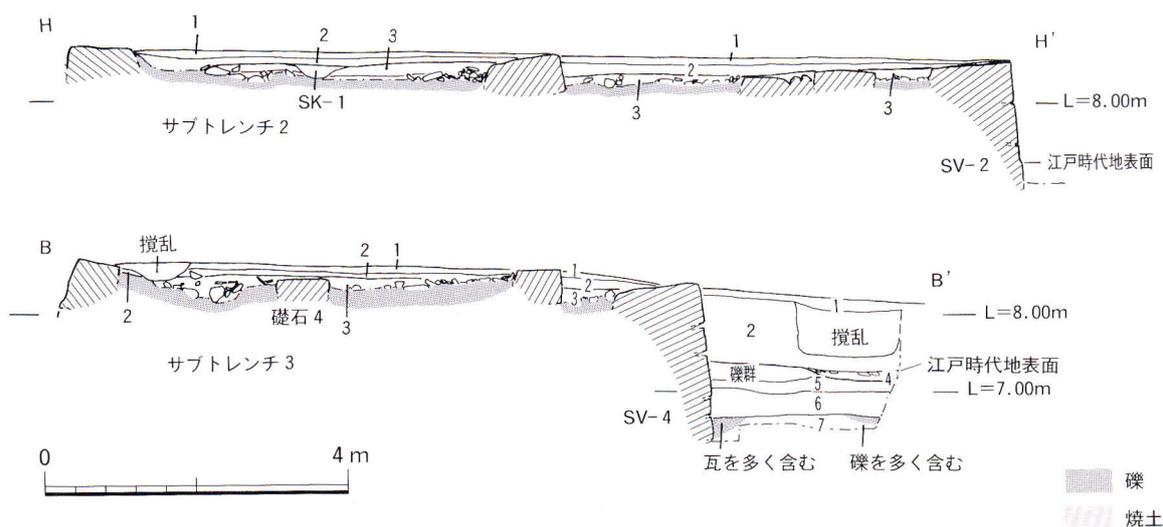
[サブトレンチ 1] (第 13 図)

調査区西端の壁面に沿って南北方向に長さ約 2.3 m、幅約 40cm の調査区を設け、第 3 層下面において、砂岩の石材を東西方向に 4 個並んだ状態で検出した。この石材は、西から 30cm 以上×約 20cm、約 40×20cm 以上、約 30×30cm 以上、約 35×25cm を測る。この石列は、北面石垣の裏込を土留めするためのものと考えられる。



第 13 図 A 区 サブトレンチ 1 土層立面図

土塀の構築方法については、西壁土層堆積状況からみて石垣と直線と並べた石材の隙間を土で埋めて平らにした後に土壁を築き、その後表面に約 2 mm の厚さの漆喰を塗って仕上げたとみられる。土塀は明治 15 (1882) 年以降に破却されたと考えられるが、破却する際に二の丸側へ打ち壊していったと考えられる。また、土塀基礎部の一部を確認することができた。



第 14 図 A区「多聞櫓」周辺の土層断面図

[サブトレンチ 2] (第 14 図)

「月見櫓」と「多聞櫓」を区画する石列南面に沿って、東西約 10.6 m、南北約 1.4 m の調査区を設けた。その結果、整地層の礫層上面に櫓の石列及び礎石 4 が敷設されていることを確認した。

[サブトレンチ 3] (第 14 図)

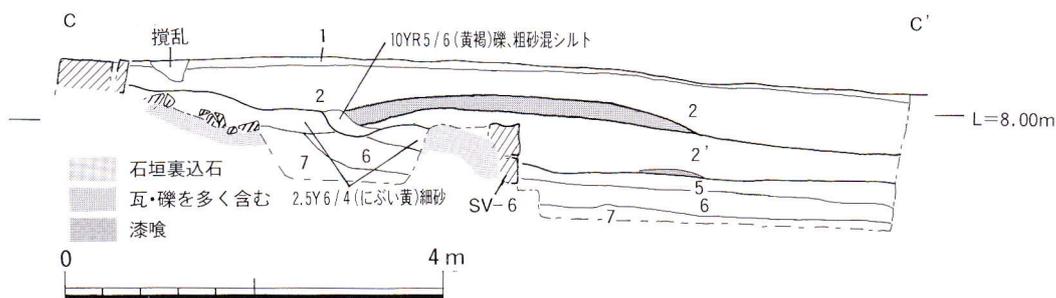
「多聞櫓」の礎石 4 を含め、二の丸側まで東西方向に長さ約 10.4 m、幅約 50cm の調査区を設けた。櫓台第 3 層の下層は、サブトレンチ 2 と同様の構造であった。また二の丸側は、第 2 層下面において、約 50cm の河原石を敷いた礫群を検出した。この礫群は、櫓台の建物の雨落ち部分にあたり、排水の為に敷いたものと考えられる。この下層は、櫓台石垣構築時に伴う整地層と考えられ、瓦片を含む。基底部の標高は約 6.2 m と推測される。

[サブトレンチ 4] (第 15 図)

調査区南端の壁面に沿って、東西方向に長さ約 8 m、幅約 50cm の調査区を設けた。SV-6 は、土層観察と石垣の構築状況から「多聞櫓」内側石垣をほぼ積み終えた後に築かれた石垣であることが明らかとなった。この石垣付近において直方体の石材や礫などがまとまって検出できたこと、石垣の天端が「多聞櫓」櫓台石垣より約 50cm 低い位置にあることなどから、SV-6 は階段の一部であった可能性を指摘できる。

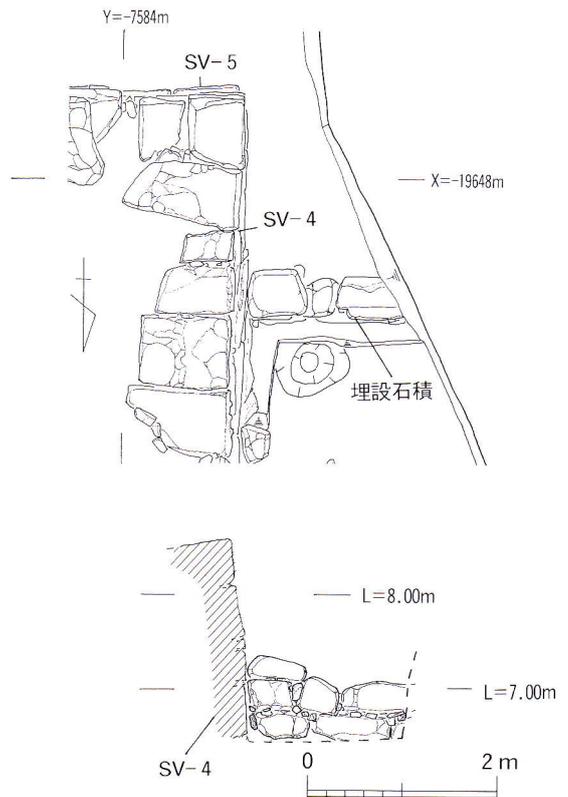
[サブトレンチ 5] (第 16 図)

SV-4 西面に沿って、東西方向に長さ約 1.8 m、南北方向に長さ約 1.2 m、幅約 30cm の調査区を L 字状に設けた。この結果、ほぼ垂直に 3 段積み、北側に面をもち、裏込石を用いない石積



第 15 図 A区 サブトレンチ 4 土層断面図

みを検出した。石積み为天端標高は約 7.2 m、基底部の標高は約 6.3 m と推測でき、検出規模は長さ 1.7 m 以上を測る。天端石材の奥行きは 50 ～ 90cm、高さ約 40cm、幅 50 ～ 130cm を測る。その下段石材の高さは約 60cm、幅 50 ～ 110cm、最下段の石材の高さは約 40cm を測る。SV-4 との間に 2 ～ 20cm 大の結晶片岩を組み込んで隙間を埋めることによって強度を保っていたものと考えられる。この石積みは、江戸時代の地表面下に構築されていることから、石垣の歪みを補強するための埋設石積と考えられ、SV-4 を築いた後に構築されたとみられる。また、石積みは面を北側に持っていることから、石積みの南側を先に整地したものと考えられる。



第 16 図 A 区埋設石積実測図

(2) B 区

調査対象地は、江戸時代末に描かれた絵図から「駿河櫓」、「物見櫓」とこれらの付属建物、「多聞

櫓」などに伴う遺構が検出されることが予測できた。調査の結果、櫓台上において多くの礎石を検出し、それぞれの櫓、土塀及び櫓に付属する建物跡の規模等を確認した。石垣天端の標高は、「駿河櫓」櫓台西面は平均約 9.35 m、「駿河櫓」櫓台から「物見櫓」櫓台にかけての北面は平均約 9.55 m、「物見櫓」櫓台東面は平均約 9.4 m、二の丸側の南面は平均約 9.35 m を測る。このほか「駿河櫓」櫓台北西角の天端は、標高約 9.65 m と約 30cm 高くなっている。「駿河櫓」から「物見櫓」にかけての石垣天端の標高は、それぞれの面において、ほぼ水平であったことを確認した。また、「御小納戸蔵」の石垣天端の平均標高は、西面約 8.75 m、南面約 8.75 m、北面約 8.8 m を測る。

この他、櫓台南側には階段が 5 ヶ所設置されており、石垣に組み込まれたもの 2 例と石垣面前に設置したもの 3 例の 2 種類を確認した。

「駿河櫓」及び「物見櫓」櫓台石垣の裏込は、上部裏込石を追加して補修していた。補修に用いられた石材は、砂岩の河原石と結晶片岩の割石の 2 種類を確認した。

以下、西側の「駿河櫓」から順に「御小納戸蔵」までを 4 区分して記述を行うこととする。

[第 1 区] (第 17 図)

第 1 区では、「駿河櫓」とこの南側に付属する建物の調査を行った。「駿河櫓」櫓台は東西約 8.2 m、南北約 10.2 m の規模を測る。この櫓台第 3 層上面において、南北方向に 3 列に並んだ礎石を 11 基検出した。また、これらの他に東西方向に並ぶ礎石もみられた。その他、原位置から動いたとみられる礎石も確認した。櫓の中心に当たる礎石 1 は約 60 × 50cm、この南側に接する礎石 2 は約 70 × 50cm を測る。建物の区画部分については、「駿河櫓」とその東側の付属建物との間に 3 基の砂岩の礎石を南北に並んだ状態で検出した。礎石 3 は約 90 × 40cm、礎石 4 は約 60 × 40cm、

礎石5は約75×40cmを測る。調査を行った「月見櫓」、「物見櫓」などの建物の区画に相当する部分は、石列で構築されており、ここでは他とは異なったものといえる。なお、南側においても同様に、明瞭な区画石材を検出することはできなかった。

このほか、攪乱の土層断面を観察した結果、櫓台内部の結晶片岩で整地された石材に赤変したものを確認することができ、また「駿河櫓」の西面石垣の天端石材にも赤変した痕跡がみられた。

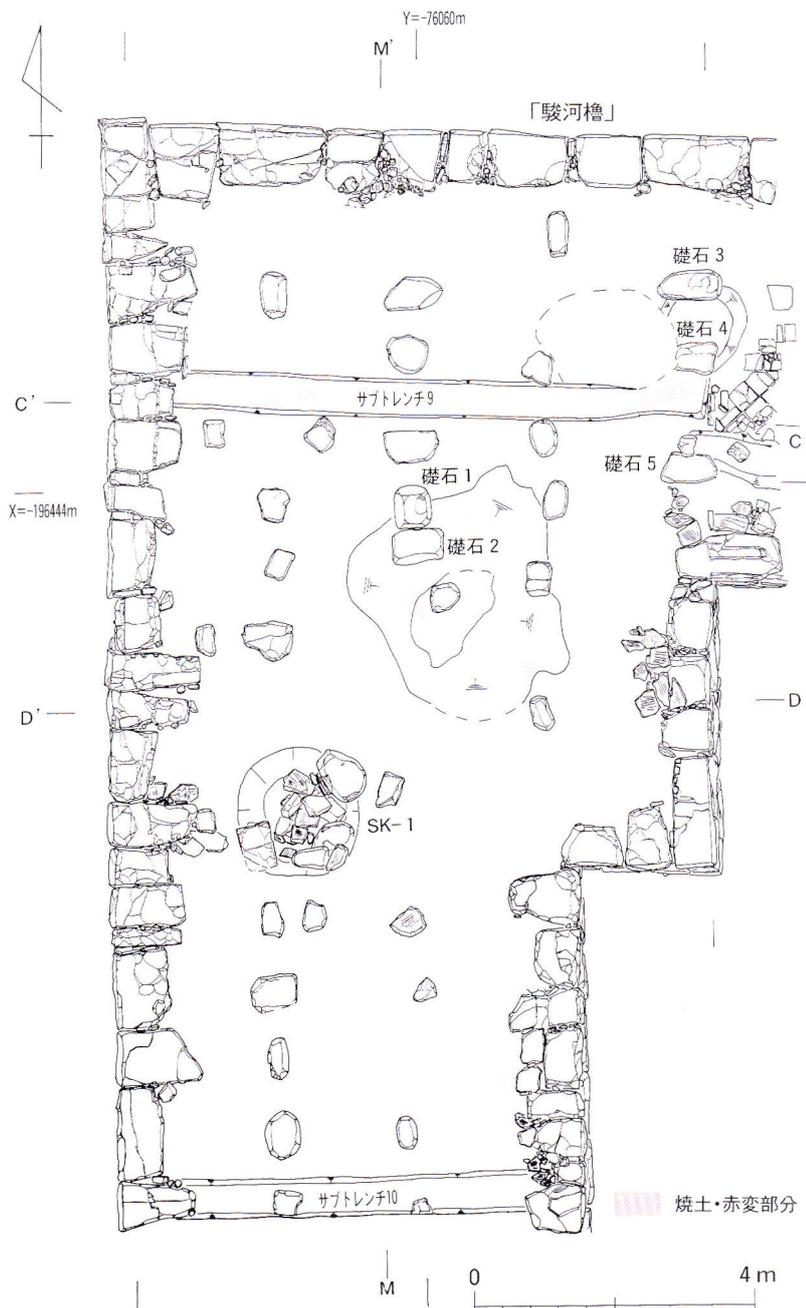
また、この櫓の西南角で東西1.65m以上、南北約1.8m、深さ約15cmの規模を測るSK-1を検出した。SK-1には砂岩製と結晶片岩製の礎石が9基埋められており、このうち火を受けた痕跡のある礎石を3基確認した。このためSK-1は、火災後の整地に伴うものとみられる。

「駿河櫓」南側の附属建物

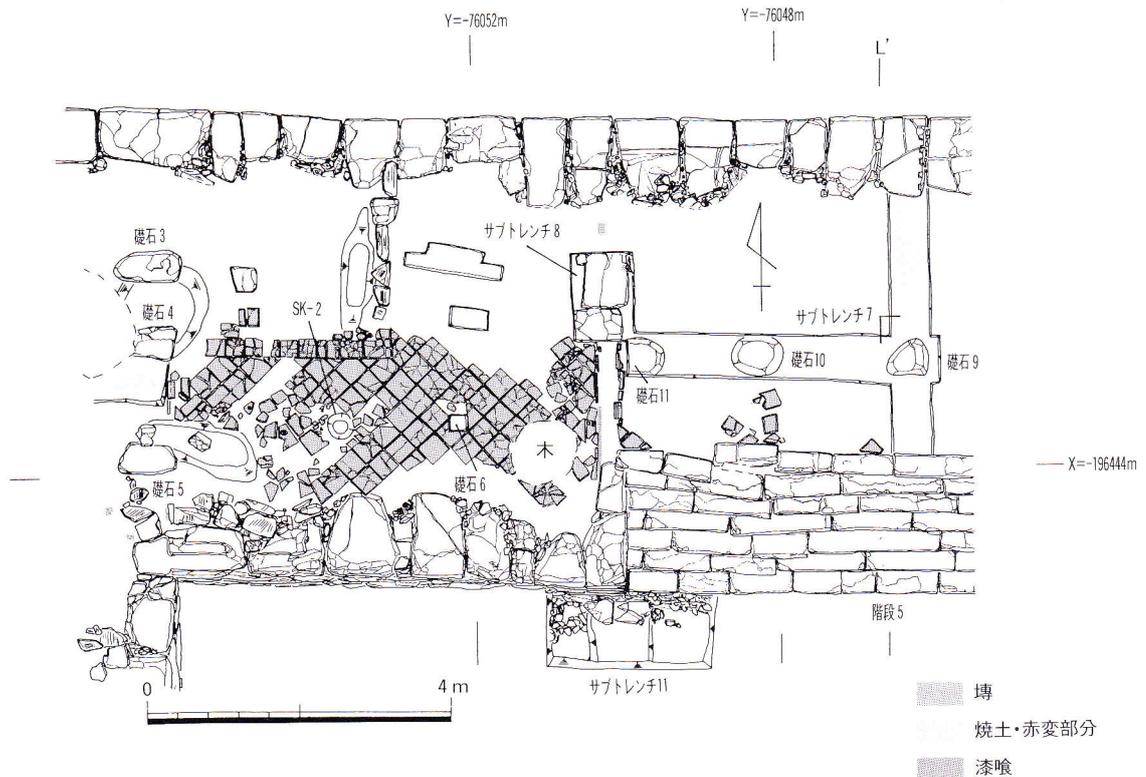
は東西約6.35m、南北4.85m以上の規模を測る。この櫓台上の礎石は、「駿河櫓」櫓台の礎石の軸線延長上に6基、これらの他、東西方向に並ぶものを3基、合わせて9基を検出した。

[第2区] (第18図)

第2区では「駿河櫓」東側の附属建物と階段5及びその櫓台について調査を行った。「駿河櫓」東側の附属建物の規模は、東西約6.15m、南北約6.3mを測り、この櫓台第2層下面において、「埴敷」を検出した。また建物の東西両端は、長さ約20cm、厚さ約3cmを測る「L」字状の瓦によって区画されていた。この「L」字状の瓦に沿って、約5mm幅の漆喰を検出し、この建物の壁が漆喰で整えられていたことが明らかとなった。壁の幅は、西側約50cm、東側約20cmを推定することができ、東西の壁の厚みが異なるのは、西側が「駿河櫓」と接する部分であるためと考えられる。



第17図 B-1区 遺構全体平面図



第 18 図 B-2 区 遺構全体平面図

また、この櫓西南角にあたる石垣天端の石材に幅約 20cm、深さ約 2 cm の「L」字状の溝が彫窪められていた。このことから、南側の壁の厚さは約 20cm を推測することができ、東壁とほぼ同じ厚さであったものと考えられる。

「塼敷」は、東西約 5.4 m、南北約 2.6 m の範囲を確認し、櫓のほぼ中央部に 1 辺約 22cm 四方の塼を直線に並べ塼敷の端部を整えている。使用された塼は 1 辺約 30cm 四方、厚さ 3～4 cm の方形のものや短辺 19.5～22.5cm、長辺 3.1～3.5cm、厚さ 3～4 cm の二等辺三角形のものが多数を占めるが、なかには方形の塼を用途に合わせて部分的に切り込みを入れ組み合わせて敷いている部分もある。原位置を保っていた塼のなかには墨書で「㊦」・「㊧」、ヘラ描きで「㊨」・「㊩」などもみられた。この「塼敷」は、建物の土間にあたる床面を塼で整備したものであると考えられる。

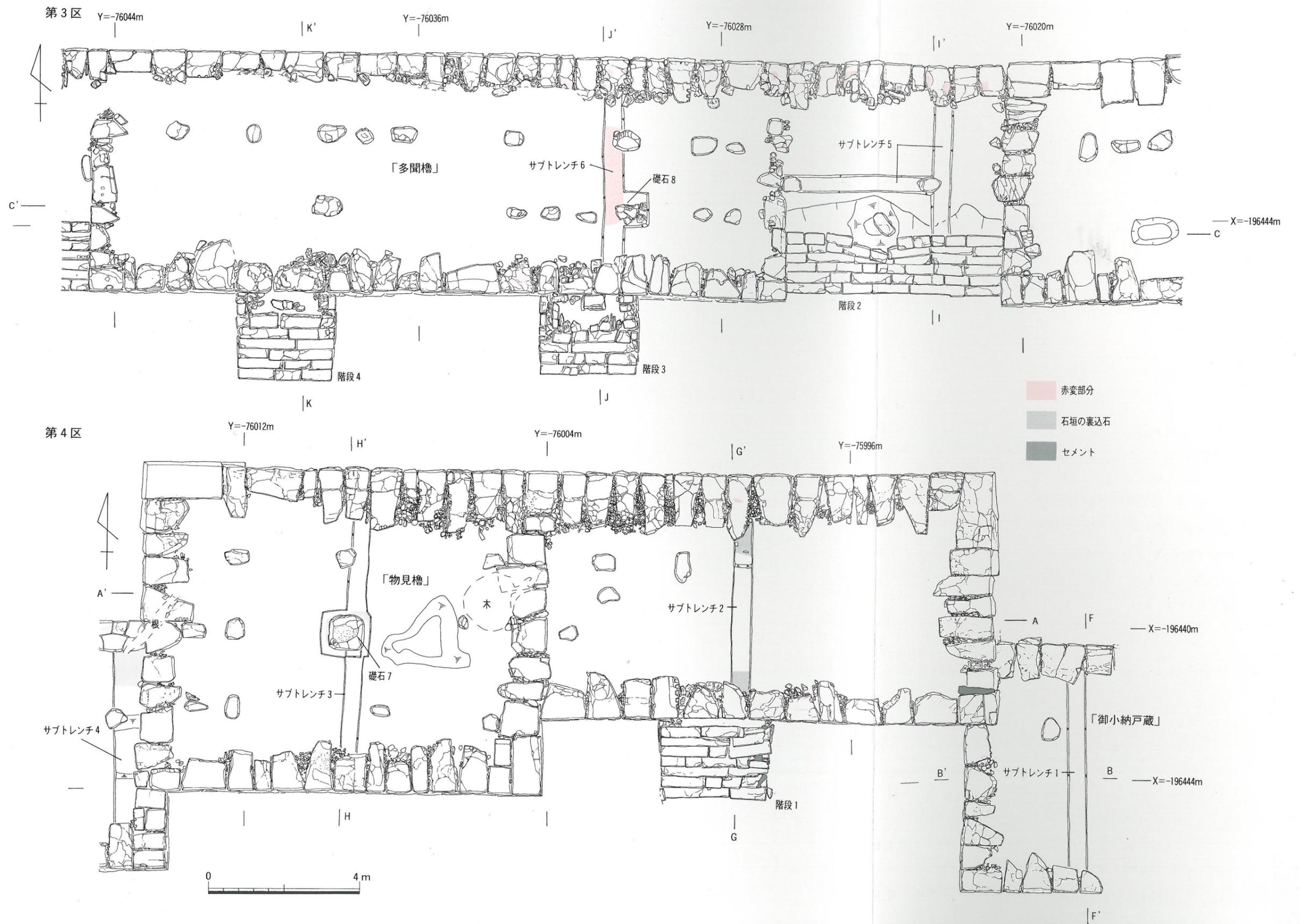
さらに、「塼敷」には約 25cm、厚さ約 10cm を測る方柱状の砂岩の礎石(礎石 6)が組み込まれており、約 1.5 m 西側にはそれと同様の礎石の抜き取り跡とみられる直径約 30cm、深さ約 15cm の SK-2 を検出した。さらに、礎石 5 の北側の攪乱内においても同様の規格の礎石を確認した。これは、攪乱によって原位置を失っているが、礎石 6 と SK-2 は東西方向に並ぶものと考えられる。

また、この建物東側の階段 5 は石垣に組み込まれており、東西約 5.3 m、南北約 1.85 m の規模を測るものである。この階段は長さ 20～150cm、幅約 30cm、高さ約 20cm の規模を測る直方体の砂岩石材を用いて 7 段分積まれていることを確認した。

[第 3 区] (第 19 図)

第 3 区では、「多聞櫓」とその櫓台石垣面前に設置された階段 3・4、「多聞櫓」東側の階段 2、「物見櫓」櫓台西側の付属建物について調査を行った。

階段 5 から階段 2 の間に位置する「多聞櫓」の規模は、東西約 18.15 m、南北約 6.1 m を測る。



第19図 B-3・4区 遺構平面全体図

この櫓台第3層上面において、東西方向に2列に並ぶ砂岩の礎石を14基検出した。この櫓の東西両端は、石列によって区画されている。

また、「物見櫓」櫓台西側の付属建物の規模は東西約6m、南北約6.3mを測る。この櫓台上において、東西方向に並ぶ砂岩の礎石を4基検出した。礎石は、本来はほかの櫓同様、これ以上の数の礎石が設置されていたと考えられるが、城の破却に伴って持ち出されたと考えられる。これらのほか、櫓台上の礎石や石垣天端面の一部に赤変した痕跡を確認した。

「多聞櫓」櫓台南面には、2ヶ所に階段がとりついており、西側を階段4、東側を階段3とした。階段4は、東西約2.65m、南北約2.25mの規模を測る。使用された石材は、東西70～150cm、南北約20cm、高さ約20cmの規模を測り、直方体の砂岩の石材が6段分積まれていた。階段3は、東西約2.65m、南北約2.1mの規模を測る。使用された石材は、東西30～140cm、南北30～40cm、高さ約20cmの規模を測る直方体の砂岩石材が4段分積まれていた。これらの階段は、本来は他の階段と同様7段に積まれていたものと考えられる。階段3・4は、出土した遺物からみて近代に補修されたものと考えられる。

また、階段2は「多聞櫓」と「物見櫓」櫓台西側の付属建物櫓台に組み込まれるもので、東西約5.75m、南北約1.6mの規模を測る。この階段は、東西40～140cm、南北約30cm、高さ約20cmの規模を測る直方体の石材が6段分積まれていた。この階段も、本来は階段5と同様7段に積まれていたものと考えられる。この階段2の北側は、近代の攪乱によって最上段の一部の石材が動いており、この攪乱内には、礎石であったとみられる砂岩の石材が1基埋没していた。階段2の最下段は、全て抜き取られていたことを確認した。

[第4区] (第19図)

第4区では、絵図に記録された「物見櫓」とこの櫓台東側の付属建物、また、本来約18mの東西規模を測る「御小納戸蔵」の西側の一部を調査した。「物見櫓」は東西約9.4m、南北約8.3mの規模を測る。櫓台第3層上面において砂岩の礎石を東西方向に3列検出した。原位置を動いたものも合わせて10基検出し、その中で原位置を保つとみられるものは8基である。「物見櫓」櫓台石垣は、他の北面二の丸櫓台石垣と比較すると、東西両側で約4.5m分が北側の堀に突出するように築かれているものである。

「物見櫓」東側の付属建物は、東西約11.9m、南北約8.05mの規模を測る。この櫓台上において、「物見櫓」櫓台の礎石の軸線延長上に砂岩の礎石を2列に3基、原位置を失ったものと考えられるものを1基、合わせて4基の礎石を検出した。この櫓台石垣南東角石材1個は動かされたと考えられ、石材の北側部分は、セメントで補強されたものである。

この櫓台南面の石垣には東西約2.85m、南北約2.05mの規模を測る階段1がとりついている。この階段は東西長50～180cm、南北幅約30cm、高さ約20cmの規模を測る直方体の石材を用いて7段分積まれていた。階段の東側部分の一部はセメントで補強されていた。

また、「御小納戸蔵」から東側の櫓台は、西側より約70cm石垣が低く積まれていた。「御小納戸蔵」は、南北約6.6mを測り、東西約3.2mの範囲を調査した。蔵跡の北西で約60×50cmの規模を測る礎石を1基検出した。この礎石は、「和歌山御城内惣御絵図」に描かれた柱の位置とほぼ合致するものである。櫓台北面石垣には、裏込上部に砂岩円礫を詰めて補強した痕跡がみられた。

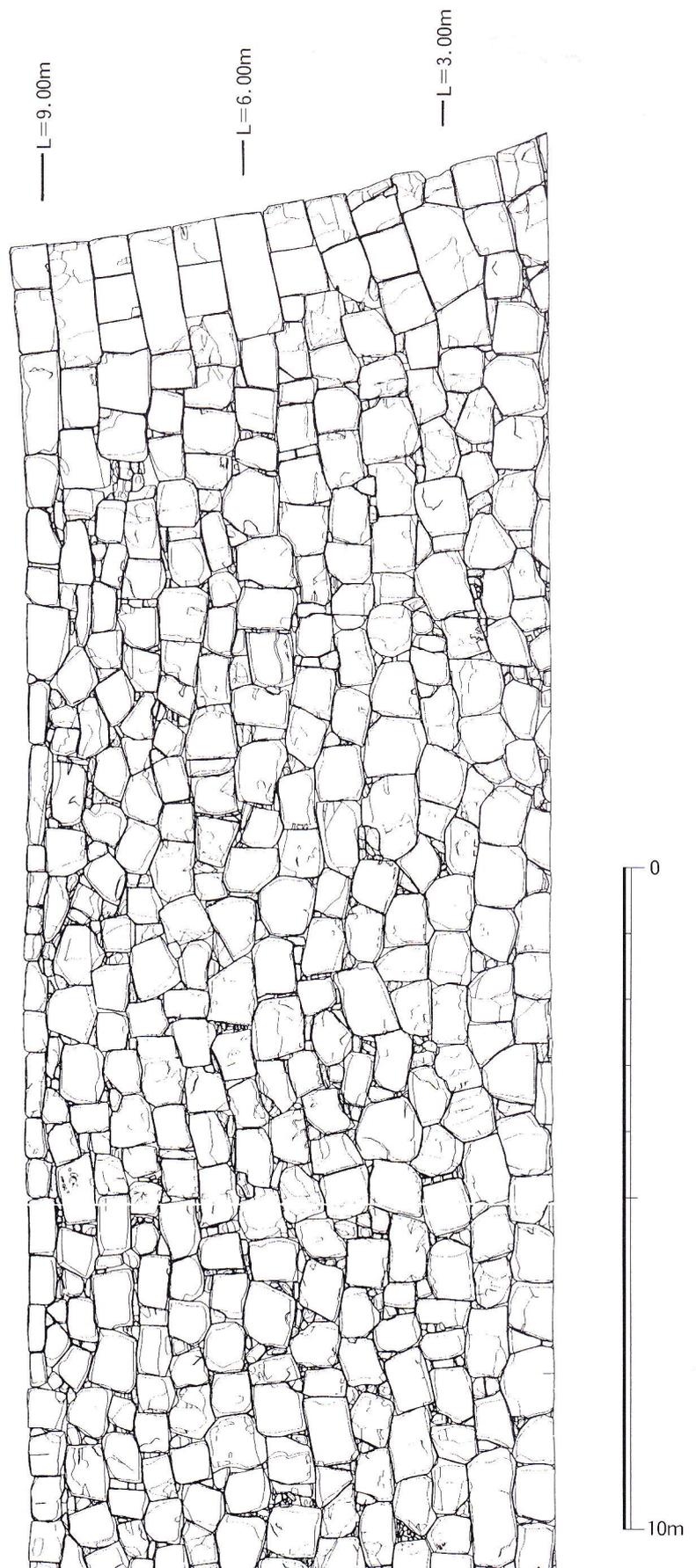
〔北面石垣〕（第 20・21 図）
北面石垣は、A 区同様に砂岩の石材を用いた「打ち込みハギ」・「布目積」の技法で築かれている。

「駿河櫓」櫓台北面石垣の M - M' 部分では、14 段積み、高さ約 8.8 m、水面標高約 1.6 m、現在の水深は約 1 m を測る。また、石垣は約 72 度の勾配をもち、天端の標高は約 9.4 m を測る。櫓の西角は 1 ~ 2 m の石材を用いて、「算木積」によって構築されていた。

また、石垣北面には直径約 7 cm を測る「◎」の刻印を 1 ヶ所確認したが、この周辺では他に刻印を確認できなかった。

「階段 2」櫓台北面石垣の I - I' 部分では、19 段積み、高さ 8.8 m 以上、水面標高約 1.6 m、現在の水深は約 90 cm を測る。また、石垣は約 65 度の勾配をもち、天端の標高は約 9.5 m を測る。この周辺では、刻印を確認できなかった。

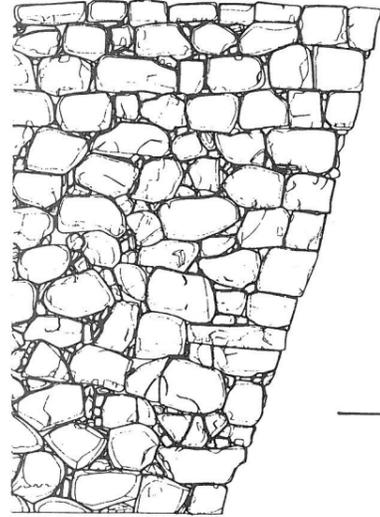
「物見櫓」櫓台北面石垣の H - H' 部分では、15 段積み、高さ約 8.65 m、水面標高約 1.6 m、現在の水深は約 80 cm を測る。また、石垣は約 65 度の勾配をもち、天端の標高は約 9.4 m を測る。櫓の東西両角は 1 ~ 1.5 m の石材を用いて、「算木積」によって構築



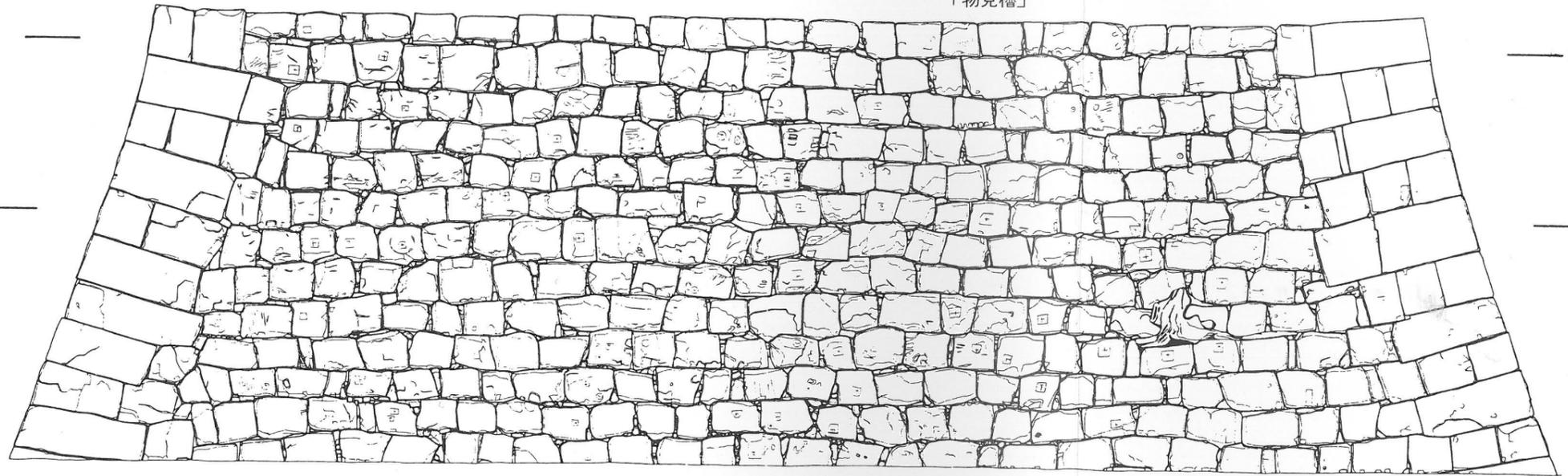
第 20 図 B - 1・2 区 北面石垣立面図

第4区

「御小納戸蔵」



「物見櫓」



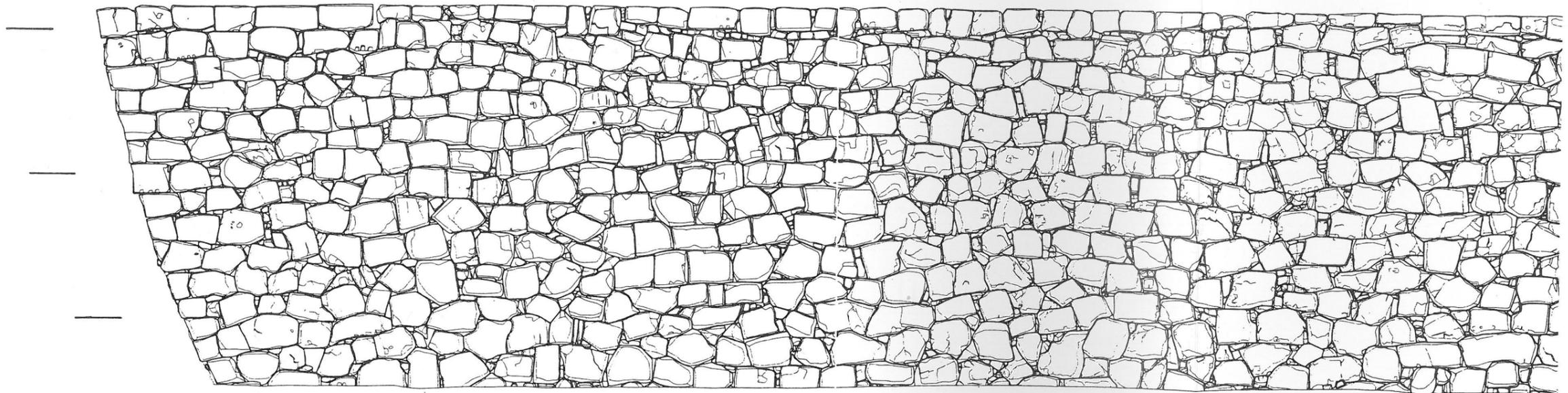
L=8.00m

L=5.00m

L=2.00m

第3区

「多聞櫓」



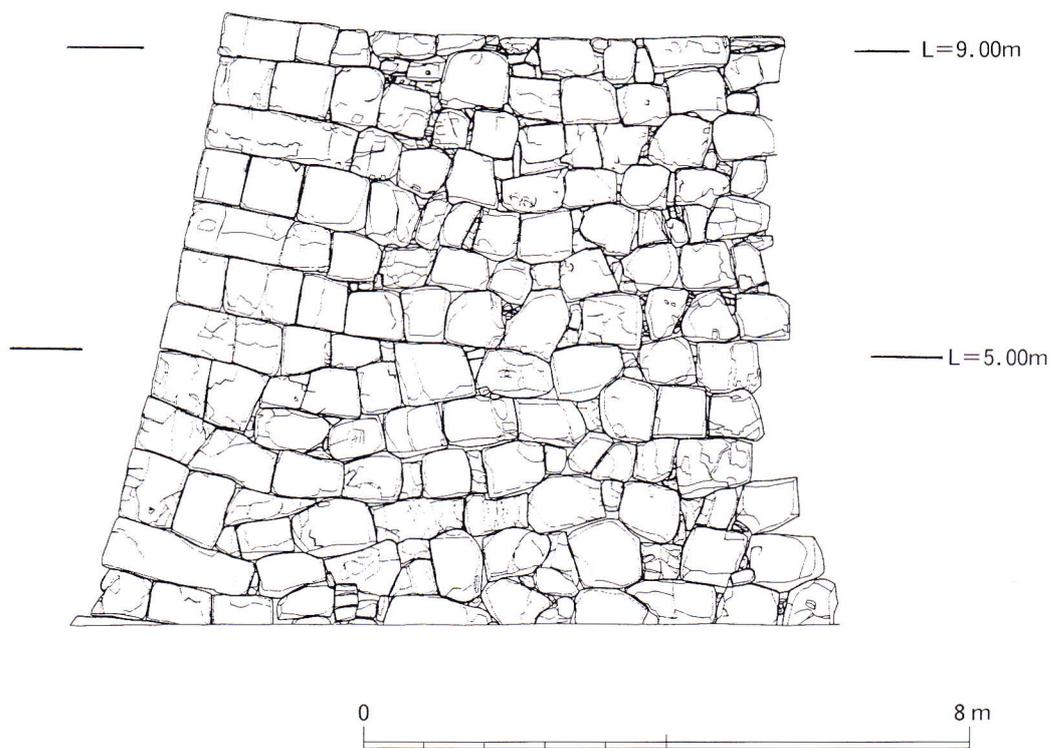
L=8.00m

L=5.00m

L=2.00m



第21图 B-3·4区 北面石垣立面图



第 22 図 B 区「駿河櫓」西面石垣立面図

されており、中には約 2.4 m を測る石材を用いていた部分もあった。

また、この石垣周辺には「⊖」、「⊕」の刻印が多くみられ、石垣面全体で無：有 = 3：1 程度の割合で確認している。

[西面石垣] (第 22 図)

「駿河櫓」櫓台東面石垣の C-C' 部分では、20 段積み、高さ 8.55 m 以上、水面標高約 1.6 m、現在の水深は約 80cm を測る。また、石垣は約 72 度の勾配をもち、天端の標高は約 9.3 m を測る。

このほか石垣側面には幅約 15cm を測る「⊗」の刻印を 1 ヶ所確認した。この周辺では他に刻印を確認できなかった。

[サブトレンチ調査]

下層調査のために深掘調査区を 11 ヶ所設け、A 区同様、整地礫層上面に赤変した部分や焼土など火災の痕跡を確認した。また、櫓台内面（二の丸側）の石垣基底部を検出し、A 区同様に石垣が砂層の上面に構築されている状況などを確認した。

[サブトレンチ 1]

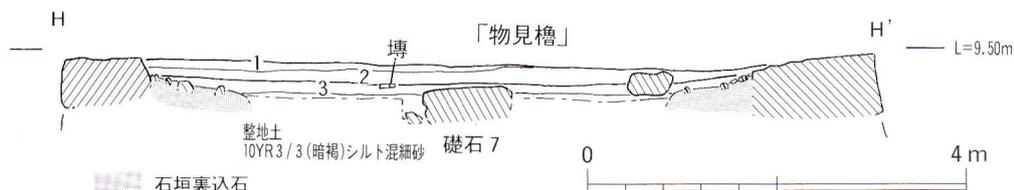
調査区東端の壁面南北方向に沿って幅約 50cm の調査区を設けた。第 3 層下面は径約 40cm を測る結晶片岩礫の整地層がみられた。また、第 2 層下面において、石垣北面の裏込石上部に約 50cm を測る砂岩河原石が使用されていた。これは石垣の改修に伴うものと考えられる。

[サブトレンチ 2]

「物見櫓」東側付属建物のほぼ中央部に南北方向に長さ約 8.5 m、幅約 50cm の調査区を設けた。石垣北・南面の石垣石材裏側から約 70cm の範囲で裏込石を検出した。

[サブトレンチ 3] (第 23 図)

「物見櫓」のほぼ中央部に南北方向に長さ約 8.5 m、幅約 50cm の調査区を設けた。櫓台第 3 層下面において、石垣北・南面の石材裏側から約 70cm の範囲で裏込石を検出し、櫓のほぼ中心部で約 90cm 四方、約 15cm の厚さを測る砂岩の礎石 (礎石 7) を 1 基検出した。



第 23 図 B 区 サブトレンチ 3 土層断面図

[サブトレンチ 4]

「物見櫓」西側の石列に沿って南北方向に長さ約 4.6 m、幅約 50cm の調査区を設けた。「物見櫓」から西側は、徳川頼宣の入城後に堀を埋めて増築されたと考えられる部分にあたり、浅野期の石垣が検出されることが推測されたが、厚さ約 3 cm の第 3 層下は、結晶片岩によって櫓内を整地しており、高さ約 60cm、幅約 80cm、奥行約 1 m の石材を「物見櫓」西側の石列として設置していた。また、石垣北面の石材端部から約 80cm 範囲で裏込石を検出した。第 3 層下面の整地 (礫) には、少量の遺物出土であるが 17 世紀前半よりも新しい時期の遺物を含まないことから、徳川頼宣による櫓台石垣の増築に関わるものである可能性が高い。

[サブトレンチ 5]

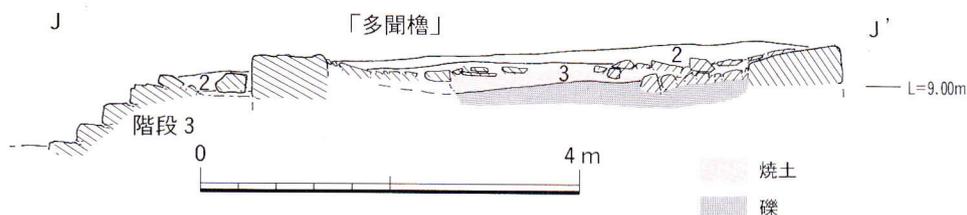
「階段 2」北側の櫓台に幅約 50cm の T 字状の調査区を設けた。第 3 層の下層は約 40cm 大の結晶片岩礫によって櫓内を整地していることを確認した。

[サブトレンチ 6] (第 24 図)

階段 3 北側の櫓台に南北方向に長さ約 4.2 m、幅約 50cm の調査区を設けた。このトレンチの中央部約 2.5 m の範囲で焼土が厚さ最大約 14cm 堆積していることを確認した。この焼土の下層の櫓内を整地した結晶片岩礫の上面に赤変した痕跡がみられ、さらに赤変し割れた砂岩の礎石 (礎石 8) を新たに検出した。石垣北面の裏込上部には 10 ~ 40cm を測る板状の結晶片岩が使用されており、石垣の改修に伴うものと考えられる。

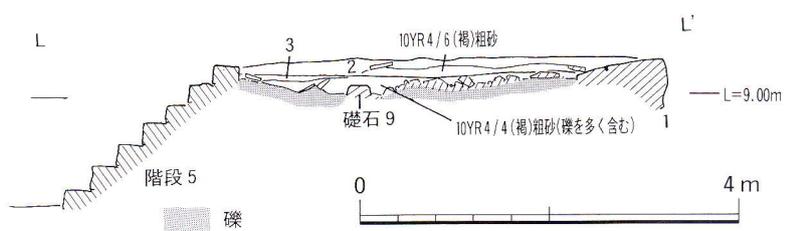
[サブトレンチ 7] (第 25 図)

階段 5 北側の櫓台に幅約 50cm の T 字状の調査区を設けた。第 3 層の下層は約 40cm の結晶片岩礫



第 24 図 B 区 サブトレンチ 6 土層断面図

によって櫓内を整地していることを確認した。さらに約70×60cmを測る砂岩の礎石9～11を検出した。また、礎石の北側に焼土面を部分的に確認した。第2層と第3層の間の堆積土から棧瓦が出



第25図 B区 サブトレンチ7 土層断面図

土していることから、この層は江戸時代後期頃と考えられ、「塼敷」も同様の時期に設置されたとみられる。
[サブトレンチ8]

「駿河櫓」東側の附属建物と階段5を区画する石垣に沿って南北方向に長さ約1.2m、幅約80cmの調査区を設けた。塼の下層の堆積土を掘削したところ、東西約60cm、南北約70cmを測る砂岩の石列の一部やトレンチ南壁面に漆喰の痕跡を確認した。この石列は、江戸時代後期頃と推測している面のさらに下面で検出されたことから、徳川頼宣による櫓台石垣増築時の石列である可能性が考えられる。

[サブトレンチ9]

「駿河櫓」の北寄りでは東西方向に長さ約10.5m、幅約60cmの調査区を設けた。第3層下には、約10cmを測る結晶片岩礫を用いた整地を確認した。この石材にも赤変した痕跡が認められた。

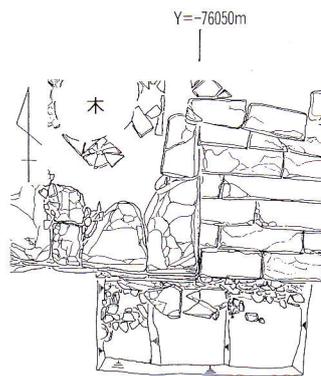
[サブトレンチ10]

調査区南端の壁面東西方向に沿って長さ約6m、幅約50cmの調査区を設けた。第3層下には、10～30cmの結晶片岩礫を用いた整地を確認した。

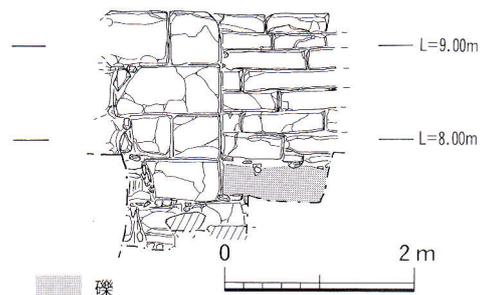
[サブトレンチ11] (第26・27図)

「物見櫓」東側の「多聞櫓」石垣と階段5の南面に沿って、石垣と階段の基底部の状況を確認するため東西約2.2m、南北約1mの調査区を設けた。この調査において明らかにすることができた石垣基底部の構造については、石垣沈下を防ぐために標高約7.0mの基底石直下に約10cm大の結晶片岩礫を敷いて地固めを行っていた。また、階段5の基底部についても標高約7.85mの基底石直下に、石段沈下を防ぐために周囲の石垣下と同様に約10cm大の結晶片岩礫を40cm以上の厚さで敷き、地固めを行っていた。

このトレンチにおける二の丸側の第1・2層は近代の整地による堆積であるが、階段5の構造からみて地表面の標高は現在とほぼ同じ標高約7.9mであったと考えられる。



第26図 B区 サブトレンチ11 実測図



- 1 10YR2/3 (黒褐)粗砂混シルト
- 2 10YR3/4 (暗褐)シルト混粗砂
- 3 10YR4/3 (Cに多い黄褐)シルト
- 4 3層に礫、粗砂混入
- 5 2.5Y4/4 (オリーブ褐)粗砂、礫を少量含む

第27図 B区 サブトレンチ11 西壁面土層断面図

6. 遺物

(1) 古墳～奈良時代の土器 (第 28 図)

1 は、土師器高杯の脚柱部である。端部を欠失するが、「ハ」の字形に開く脚部がつくもので、3 方向に穿孔がみられる。また、内面には絞り目痕が観察できる。色調は明褐色、胎土には長石・チャート・結晶片岩を含む。布留式併行期のものであろう。2 は須恵器杯蓋である。口径 10.8cm を測り、外面はヘラケズリとナデ調整によって仕上げられる。天井部には宝珠のつまみがつくものと考えられる。色調は灰白色を呈し、胎土には長石・石英・チャートを含む。時期については、8 世紀前半のものと考えられる。

(2) 江戸時代の土器・陶磁器

[土師器] (第 28 図、図版 50)

3・4 は土師器小皿である。3 は口径 6.5cm、器高 1.1cm、4 は口径 6.6cm、器高 1.5cm を測る。ともに手づくねによって成形され、外面はナデ及び指頭圧痕がみられ、内面にはナデ調整が施される。色調は乳褐色を呈し、胎土は精良であるが 4 には少量の赤色軟質粒が含まれる。焼成は良好である。これら 3・4 はともに A 区 SK-3 第 2 層から出土した。

5 は口径 11.9cm を測る。内外面はナデ調整によって仕上げられ、外面体部下半にはヘラケズリが施される。色調は淡褐色を呈する。6・7 は灯明皿として使用されたものである。6 は口径 11.0cm を測り、外面はナデ及び指おさえが施され、また内面にはタール状の付着物がみられる。色調は黒褐色を呈する。7 は口径 16.0cm を測る。調整技法については 6 と同様であるが、口縁端部内外面にタール状の付着物がみられる。色調は淡褐色を呈し、焼成は良好である。

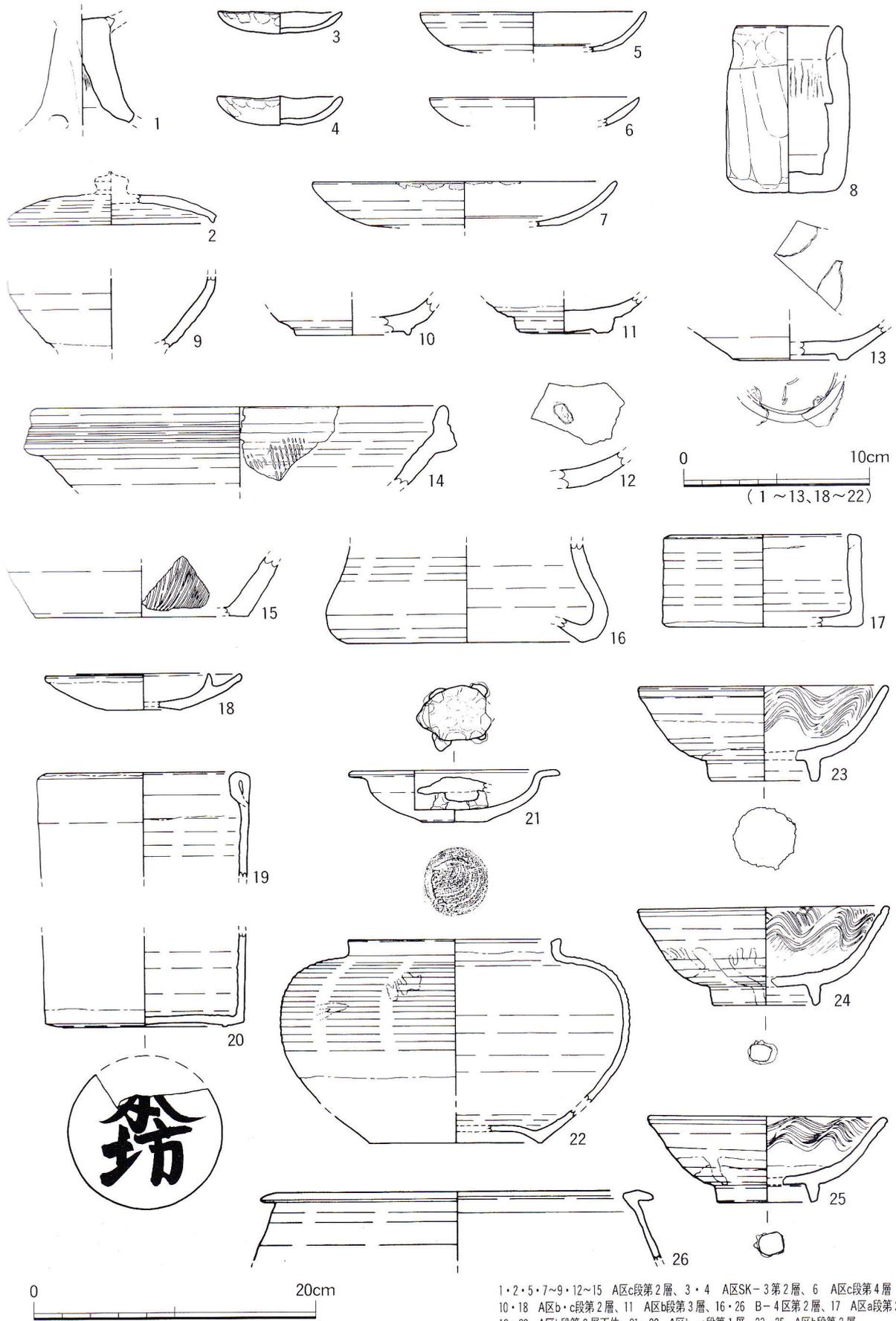
[焼塩壺] (第 28 図)

8 は焼塩壺である。口径 5.4cm、器高 8.8cm を測る。外面の調整は幅広のヘラケズリをタテ方向に施した後、口縁端部をヨコ方向に強くナデ、胴部にもナデ調整を施す。内面には布目痕や、頸部付近には絞り目痕がみられ、また強いナデ上げによる粘土のたるみが観察できた。色調は淡褐色から淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。17 世紀前半のものである。

[国産陶器] (第 28 図、図版 50)

国産陶器には、瀬戸・美濃系陶器 (9・10)、肥前系陶器 (11～13、23～25)、備前焼 (14～17)、近在窯系陶器 (18～22、26) などがある。

9 は天目茶碗である。残存体部径 11.0cm を測り、内外面に鉄釉を施すものである。10 は志野皿で、高台径 6.0cm を測り、全面に長石釉を施す。高台は低く削り出され、畳付けの釉は削り取られる。また内外面には細かな貫入がみられる。11～13 は唐津である。11 は碗であり、高台径 4.7cm を測る。内面及び外面体部に施釉されるが、2 次焼成をうけてやや白色に変色する。高台付近及び外面体部下半にはヘラケズリ痕を明瞭に残し、露胎である。12・13 は皿である。12 は内面に胎土目痕が残るもので、灰釉を施すが、外面体部下半はヘラケズリ痕を明瞭に残し露胎である。13 は高台径 6.0cm を測り、見込み部及び高台畳付けに砂目痕のみられるものである。高台内にはヘラ状工具による記号状の線刻が施される。14・15 は挿鉢の口縁部と底部である。14 は口径 28.6cm を測る。内面には幅 2.7cm、条線 9 本を単位とする挿目がみられ、口縁端部及び下端部には重ね焼きに



1·2·5·7~9·12~15 A区c段第2層、3·4 A区SK-3第2層、6 A区c段第4層
 10·18 A区b·c段第2層、11 A区b段第3層、16·26 B-4区第2層、17 A区a段第2層
 19·20 A区b段第2層下位、21·22 A区b·c段第1層、23~25 A区b段第2層

第28圖 遺物実測圖1

よる釉の溶着の痕跡が残る。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には長石・石英・黒色粒を含む。15は底径15.0cmを測り、内面には播目がみられる。16は水指で、やや上げ底状を呈し、底径16.8cmを測る。外面体部下半にはヘラケズリが施される。17は建水である。口径13.8cmを測る。内外面はロクロ成形によるナデ調整を施す。また口縁端部及び底面には釉の溶着の痕跡がみられる。色調は暗褐色を呈し、胎土には長石・石英・黒色粒を含む。これら9～17の時期については16世紀末～17世紀前半のものと考えられる。

18は灯明皿で、口径7.0cm、底径3.8cmを測る。口縁端部及び内面には灰釉が施される。19・20は同一個体と思われるもので灰落しである。19は口径10.0cmを測るもので、口縁部に銅緑釉を施し、端部は内側に折り返し丸みを帯びる。内外面にはロクロ成形によるナデ調整を施し、口縁端部にはキセルを打ちつけた痕跡がみられる。20は底径10.0cmを測り、内外面の調整は19と同様である。高台は削り出され、また底面には「本坊」の墨書がみられる。21・22は急須の蓋と身で、セット関係にある。21は口径11.2cmを測る。内面には白色の釉が施される。内外面の調整はロクロ成形によるナデ調整を施し、底面には糸切り痕が残る。つまみは、亀をモチーフにしたものである。22は口径11.2cmを測り、器高は10.7cmを測る。外面には体部下半を除き白色の釉が施され、肩部には部分的に銅緑色の釉を施すが、2次焼成を受けやや変色する。21・22を組み合わせた器高は11.0cmを測る。23～25は、植木鉢に転用された碗である。高台は高く削り出され、高台内が高台脇より深く削り込まれているところに特徴がある。内外面の調整は、ロクロ成形によるナデ調整が施され、さらに外面体部下半にはヘラケズリを施す。まず、23は口径17.4cmを測る。内面には乳褐色の釉でハケ目を施すが、見込み部分の釉は輪状に削り取る。また高台脇から畳付けにかけて淡黄白色の化粧土を塗る。これは窯積みの際、重ね焼きによる釉の溶着を防ぐ技法と考えられる。底面には焼成後、径4.4cmの孔が穿孔される。24は口径17.6cmを測る。23と同様の技法をもつもので、底面には長径1.5cmの孔が穿孔される。25は口径16.2cmを測る。内面には乳白色の釉でハケ目が施され、見込み部分にのみ淡黄白色の化粧土が輪状に塗られる。これは、23・24とは異なる手法であり、窯積み技法が異なるものとする。底面には焼成後、径約1.5cmの孔が穿孔される。これら23～25の胎土は均一で細かな砂粒を少量含み、焼成は良好である。また、産地は内野山北窯系のものとみられ18世紀後半～19世紀初頭のものと考えられる。26は甕である。口径23.5cmを測るもので、全面に褐色釉が施される。胎土にはごく細かな砂粒を含み、焼成は良好である。

〔国産磁器〕（第29図、図版51・52）

国産磁器には、肥前系青磁（27）・染付（28～36）、瀬戸・美濃系染付（37～39）、染付（40）、白磁（41）がある。

27は青磁の碗である。底径4.8cmを測るもので、高台畳付けには砂が付着する。28～32は丸碗である。28は口径11.4cmを測るもので、外面には濃青から淡青色の呉須で波・船・鳥が描かれる。29は口径10.8cm、器高5.9cmを測るもので、外面には草花文と高台脇には3条の圏線が描かれる。30は底径4.0cmを測り、外面には草花文と高台脇に3条の圏線が描かれる。高台内面には「大明年製」を簡略化したと思われる裏銘が呉須で描かれる。また高台畳付けには砂が付着する。31は底径4.8cmを測るもので、底面には五弁花及び見込みには2条の圏線が、また高台内には二

重方形枠内に「福」の文字を配した裏銘と圏線が描かれる。これら 28～31 の時期については、18 世紀前半～中頃のものと考えられる。

32 はやや腰の張る碗であり、口径 7.5cm、器高 5.9cm を測る。外面には淡青色の呉須で雨降り文及び岩状の文様が描かれる。全面に細かな貫入がみられ、色調はやや白濁色を呈する。33 はいわゆる広東形碗であり、口径 11.0cm を測る。外面には山・樹木などを描き、内面には 3 条の圏線が描かれる。これら 32・33 の時期については、18 世紀後半～19 世紀初頭のものと考えられる。

34 は端反り碗である。口径 11.2cm を測り、外面には草花文及び圏線が、また内面には 3 条の圏線を描く。時期については、19 世紀前半のものとする。



27 B-3区第3層、28・31・33 A区c段第2層、29・32・34・36 A区b・c段第2層
 30 B-3区第2層下位、35 A区b段第2層下位、37・38・41 B-4区第2層
 39 B-3区第2層、40 B区表土

第 29 図 遺物実測図 2

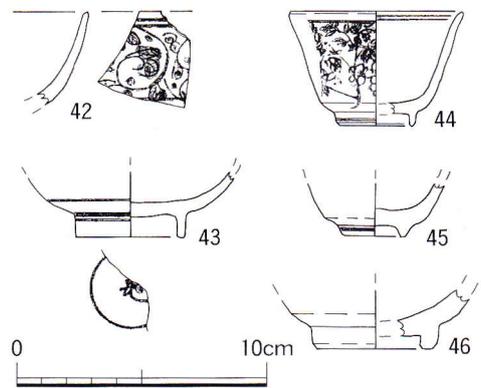
35・36は合子の蓋と身である。35は口径4.6cm、器高0.9cm、体部径5.4cmを測る。外面には砂浜と樹木を表現したと考えられる図柄が淡青色の呉須で描かれる。36は口径3.8cm、器高1.6cm、体部径4.7cmを測る。口縁端部、底面には赤色顔料が付着しており化粧道具と考えられる。

37～39は瀬戸・美濃系の端反り碗で、腰部が張り出し、直線的に伸びる体部から口縁端部にいたりやや外反するものである。37は口径8.6cmを測る。38・39は同じ文様構成と形態をもつものである。38は口径8.7cm、器高3.9cm、39は口径8.5cm、器高3.9cmを測る。ともに内外面には濃青色のオランダ呉須で蔓草が描かれ、38の底面には渦状の蔓から派生する蔓草文が描かれている。40は口縁部に4カ所の抉りこみをもつ碗である。口径12.6cmを測り、器高5.6cmを測る。全面に施釉されるが、高台畳付けは施釉後釉を削り取り、さらにナデ調整を施す。外面の高台脇には圈線が、また内底面には竜もしくは鳳凰を簡略化したと思われる文様が描かれ、さらに高台内には「古玉園梅花製」の裏銘と1条の圈線が描かれる。呉須は淡青色のものである。

41は、白磁の人形である。全高5.3cmを測る。表面と裏面は分割してつくられており、ともに型押し後接合されたもので「まねき猫」を表現したものである。接地面には焼成前に穿孔されたと思われる角釘による釘孔がある。

〔輸入陶磁器〕(第30図)

輸入陶磁器と考えられるものは、中国製の染付碗(42・43)小杯(44・45)と白磁碗(46)がある。42の染付碗は口縁端部を内湾させるもので、残存高3.6cmを測る。外面に唐草文を描くものであり、釉は薄くかかるものである。43は高台部で高台接地部分に砂の付着がみられる。残存高2.6cm、高台径4.2cmを測る。44は外面に草花を描く小杯で、高台端部の釉をケズり取るものである。口径6.8cm、器高4.5cm、高台径2.8cmを測る。45も染付の小杯であるが、染付文様等は不明である。これについても高台端部の釉をケズり取るものである。残存高2.1cm、高台径2.3cmを測る。白磁碗(46)は灰白色を呈し、残存高4.5cm、高台径2.3cmを測るものである。粗い貫入が施釉部全面にみられる。44はB区第2層から、他はA区第3層から出土したものである。



第30図 遺物実測図3

(3) 瓦

〔軒丸瓦〕(第31・32図、図版53)

軒丸瓦は、すべて三巴文軒丸瓦である。形態としては、玉縁をもつものともたないもの(51・72)があり、後者はいわゆる掛瓦である。巴文には、左巻のものと同右巻のもの(50・66～68)があり、瓦当径は最大17.9cm～最小14.1cmを測るが、明瞭な規格性を見いだすことはできなかった。瓦当の接合は、59のように丸瓦部の凹面端部と瓦当部上面を接合するものと、瓦当裏面と丸瓦部の木口部を接合するものと2種がある。ともに接合部には櫛歯状工具で条線を刻み接合し、接合部には粘土補充をおこない、強いナデ調整を施す。また瓦当の周縁端部は面取りによって仕上げるものが大半を占める。瓦当裏面の調整については、円周に沿って丁寧にナデ調整を施すものが大半

であるが、61のように不定方向のナデ調整をおこなうものもある。その他、釘穴のあるものはすべて丸瓦部の凸面側から穿孔される。色調・胎土及び焼成については、文中で特に触れないものについては黒灰色から暗灰色を呈し、胎土中には1～2mm大の長石・雲母及びごく細かな砂粒を含み、焼成はすべて良好である。

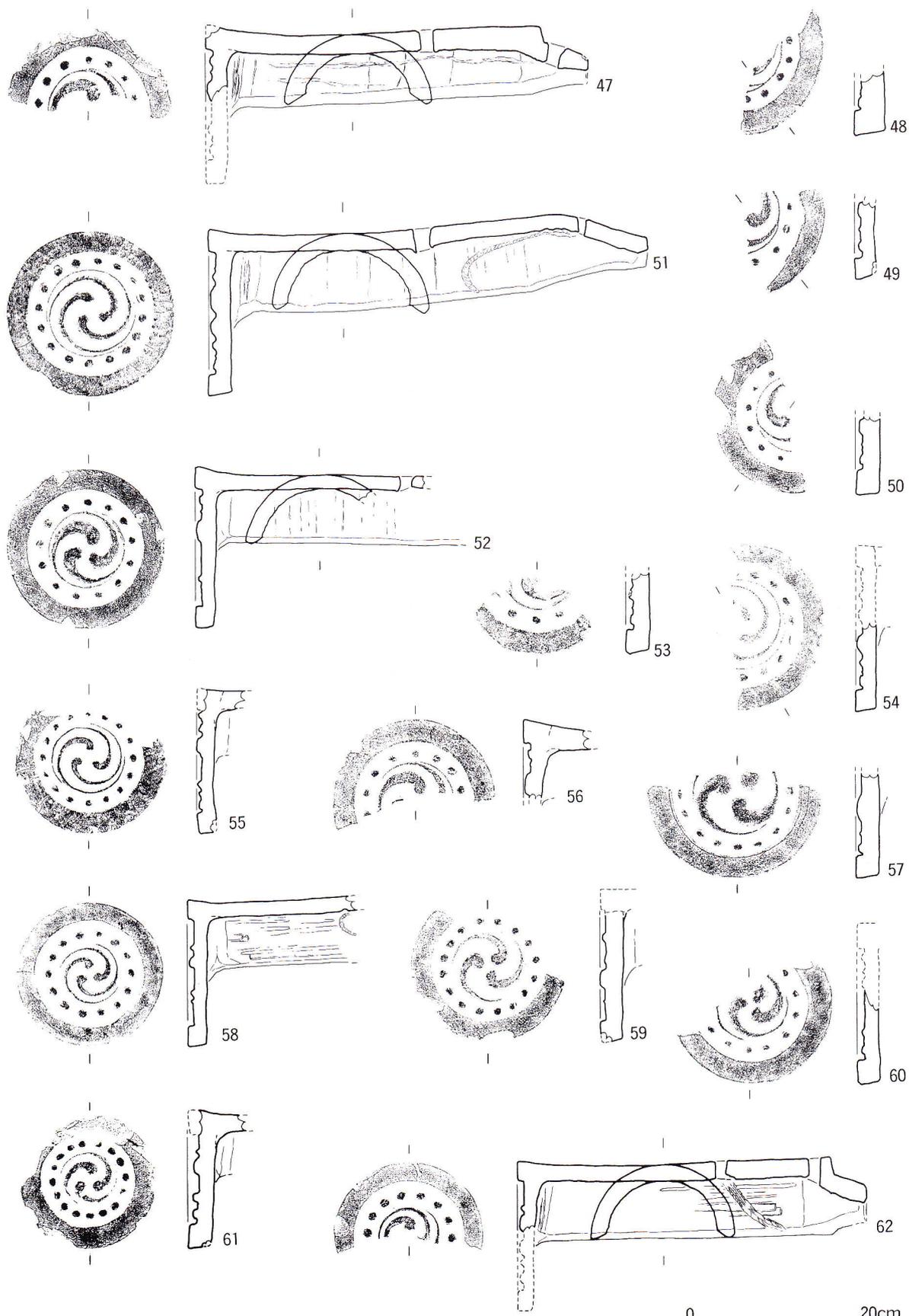
まず47～50は圏線をもつものである。巴の断面は台形及び三角形状を呈し、尾部は細長く伸び圏線に接する。47は瓦当の約2分の1を欠失するが、全長34.1cm、丸瓦部の幅14.9cmを測る。丸瓦部凸面の調整には縦方向のヘラミガキを施し、凹面には「コビキB」技法及び布目痕・吊り紐痕の他に、玉縁部分にゴザ状圧痕がみられる。48は瓦当厚3.1cmを測るもので、胎土中に約1cm大の結晶片岩を含む。49は瓦当部がやや湾曲するものである。

51～57は、巴の断面が台形から三角形及び半円状を呈し、尾部は隣の巴に接続するが圏線をもたないものである。51はほぼ完形のもので全長44.8cm、瓦当径17.1cm、瓦当厚2.4cmを測る。巴の形状はやや細長く、珠文は径1.2cmを測り、計16個を数える。丸瓦部凸面の調整は47と同様で、凹面には「コビキB」技法、布目痕及び吊り紐痕が顕著にみられる。胴部中央及び胴部から玉縁部への屈曲部には釘穴が穿たれる。また瓦当面には木目状の圧痕がみられる。色調は黒灰色を呈し、焼成は良好である。52は瓦当径16.3cm、瓦当厚1.8cm、周縁幅約2.0cmを測り、珠文は計13個を数える。また丸瓦部凹面には「コビキB」技法が観察できる。色調は黒灰色を呈し、胎土には、灰色粒・長石・ごく細かな砂粒を含む。54は瓦当表面に木目状圧痕がみられるものである。55は瓦当部がやや湾曲するもので、瓦当径14.8cm、瓦当厚約2.0cm、周縁幅約2.0cmを測る。巴の形状はやや細長く、珠文は16個を数える。この他、53・57は胎土に長石・雲母・砂粒を多量に含むもので、焼成はやや軟質である。これら47～57の時期については、江戸時代の前半から中頃におさまるものと考えられる。

58～68の巴文は、51～57と同様の断面形態をもち、尾部が互いに接しないものである。58は、瓦当径15.1cm、瓦当厚1.9cm、周縁幅約1.4cmを測る。また珠文は径1.1cmを測り、計14個を数える。丸瓦部凹・凸面の調整には縦方向のヘラミガキを施し、凹面はさらに布目痕及び吊り紐痕が顕著にみられる。色調は暗灰色を呈し、胎土中には黒灰色粒を比較的多く含む。59は、胎土中に赤色軟質粒を含む。61は瓦当径が14.1cmと最も小さいものである。62は瓦当の約2分の1を欠失するが玉縁部まで残存するもので、全長35.7cm、瓦当径15.2cm、周縁幅約2.0cmを測る。丸瓦部凹・凸面の調整には縦方向のヘラミガキを施し、凹面には布目痕及び吊り紐痕、さらに玉縁部分にはゴザ状圧痕が顕著にみられる。63は瓦当径15.7cmを測り、文様区中心部の厚さが約1.0cmと薄手ものである。色調は暗灰色を呈し、胎土中にはごく細かな褐色粒及び雲母を含む。

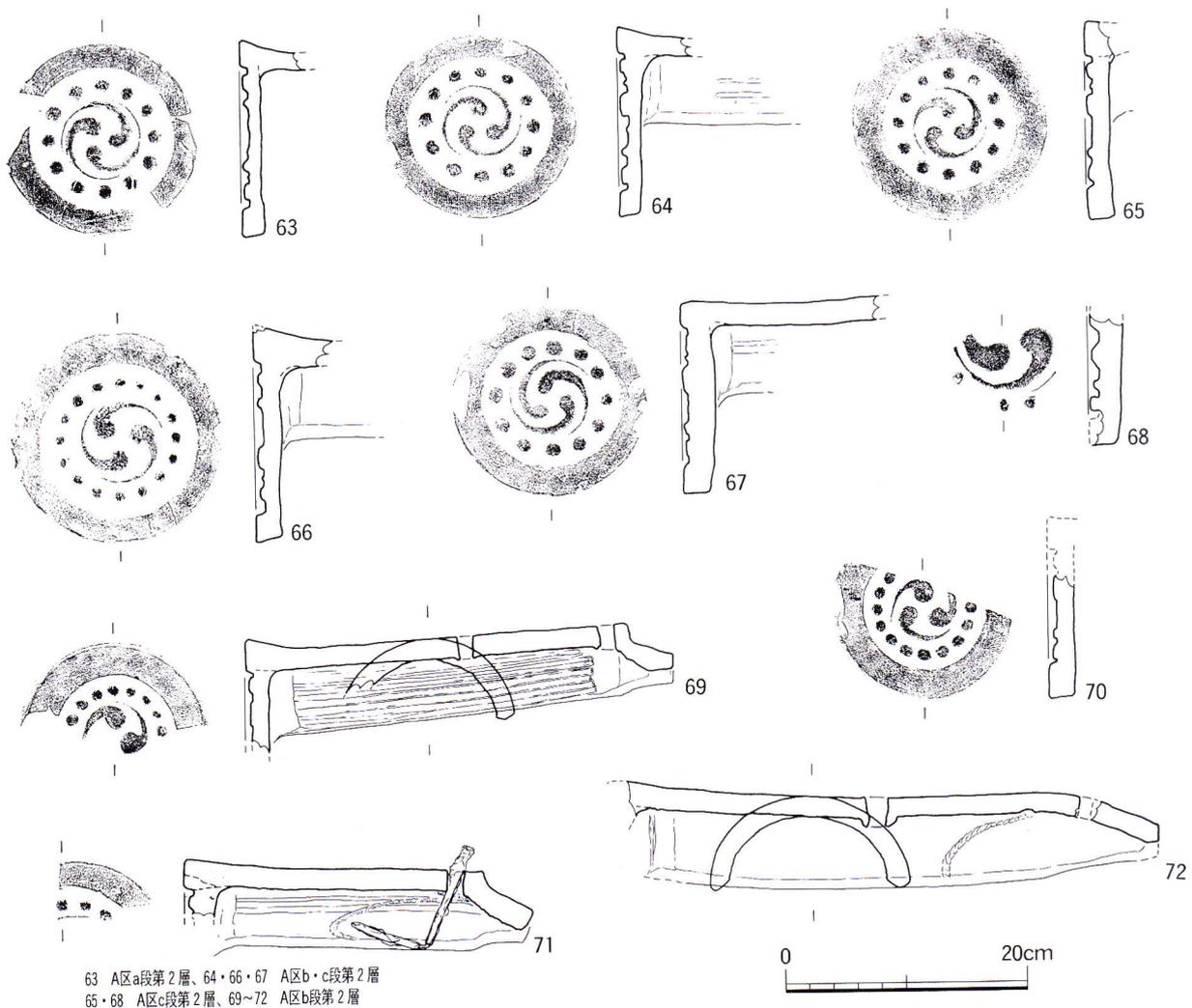
66～68は巴文が左巻きのものである。67は瓦当径15.4cm、周縁幅約2.0cmを測り、文様区中心部の厚さが最大2.1cmと厚手のものである。丸瓦部凸面の調整は、縦方向のヘラミガキ後ナデを施し、凹面には部分的にヘラミガキと布目痕がみられる。色調は黒灰色を呈し、胎土中には長石及びごく細かな砂粒を含む。焼成はやや軟質である。68は、巴文及び珠文が大きく、突出が約0.7cmと高いものである。巴は断面台形を呈し、珠文径1.1cm、高さ0.7cmを測る。これら58～68の時期については江戸時代のものと考えられる。

69・70は、巴文及び珠文が低く扁平な台形を呈し、巴頭部の発達が著しくくびれが明瞭にみられ



47・51・62 A区b・c段第2層、48~50・53・55~57・59・60 A区c段第2層
 52・58 A区b段第2層、54・61 A区a段第2層

第31圖 遺物実測図4



第32図 遺物実測図5

るもので、周縁幅はともに約2.3cmと広い。69は全長34.5cm、珠文径1.3cmを測る。丸瓦部凸面の調整は縦方向のヘラミガキ後ナデを施し、凹面には縦方向のヘラミガキを施す。また瓦当面には木目状圧痕が残り、胴部には釘穴が2ヶ所穿たれる。色調は光沢のある黒灰色を呈し、胎土中には灰色粒及び砂粒を比較的多く含む。これら69・70の時期については、江戸時代でも後半のものと考えられる。

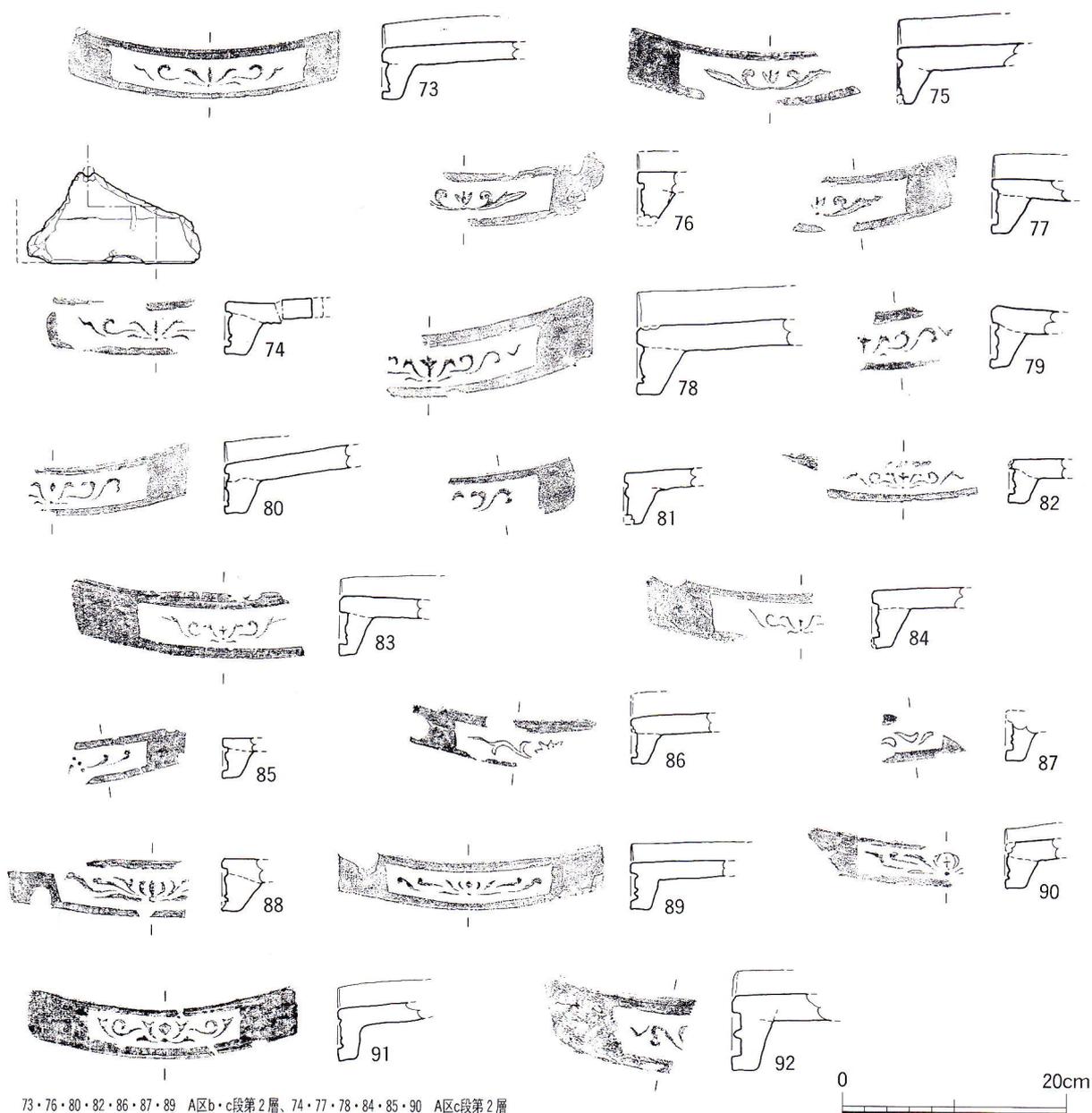
71は、釘穴に角釘が残存しているものである。全長28.0cm、周縁幅2.0cmを測る。丸瓦部凸面の調整は縦方向のナデ、凹面には縦方向のヘラミガキを施し、「コビキB」技法、吊り紐痕がみられる。時期については、江戸時代のものと考えられる。72は瓦当を欠失するものであるが、全長42.7cm、胴部幅16.0cmを測る。その形状及び調整は1と同様である。色調は黒灰色を呈する。時期については江戸時代前半から中頃のものと考えられる。

[軒平瓦] (第33図、図版54)

軒平瓦は、すべて均整唐草文軒平瓦であるがその文様構成にはバリエーションがある。そのうち、73・74、75～77、78・79、80・81、83・84は同じ文様構成をもつものである。瓦当部の接合は、平瓦広端部凸面及び瓦当部上面に櫛歯状工具で条線を刻み貼り付けるもので、接合部には粘土補充及び強いヨコナデを施す。瓦当部への笥押しは、その接合状況から瓦当部と平瓦部を接合した

後おこなわれたことが窺える。また瓦当部上・下周縁端にはほぼすべての個体に面取りが施される。また色調・胎土及び焼成については、文中で特に触れないものについては黒灰色から暗灰色を呈し、胎土中には1～2 mm 大の長石・灰色粒及びごく細かな砂粒を含む。焼成は良好である。

73は、瓦当上部幅 23.0cm、左周縁幅約 3.6cm、右周縁幅約 3.0cm、瓦当上部厚 3.0cm を測る。瓦当文様は、中心飾りに簡略化された蓮花文と、その左右には上方に巻く唐草文及び細く屈曲して伸びる子葉で構成される。瓦当表面、平瓦部凹・凸面には漆喰が付着する。色調は暗灰色を呈する。74は、平瓦部のやや側辺よりに凹面側から釘穴が穿たれたものである。75は、左周縁幅 4.5cm、瓦当上部厚 3.0cm を測る。花文状の中心飾りをもつもので、左右に伸びる幅広で扁平な子葉とそこから上方に巻きながら派生する唐草状の文様を配する。子葉には葉脈が表現される。瓦当部裏面下



73・76・80・82・86・87・89 A区b・c段第2層、74・77・78・84・85・90 A区c段第2層
75 B-4区第3層、79・88・92 A区b・c段第1層、81・91 A区b段第2層、83 A区a段第2層

第33図 遺物実測図6

半の調整には、横方向のヘラミガキを施す。77は胎土中に赤色軟質粒を含み、焼成はやや不良である。78は右周縁幅約4.5cm、瓦当上部厚4.4cmを測る。瓦当文様は、中心飾りの中央に橘文を配し、左右には2回反転する唐草文と屈曲して上方に伸びる子葉が配される。上周縁幅は約1.4cmと比較的広い。80は右周縁幅約3.7cm、瓦当上部厚3.0cmを測る。中心飾りは73のものに類似するがやや簡略化されたもので、左右には2回反転する唐草文を配する。また瓦当面には木目痕がみられる。色調は灰色を呈し、胎土には長石・灰色粒の他に、ごく細かな雲母を多く含む。これら78～81の唐草文は、唐草端部にくびれをもつことに特徴があり、時期については江戸時代でも前半の範疇におさまるものと考えられる。

82は瓦当上部厚2.7cmを測る。中心飾りについては78のものに、その他の文様構成については73のものに類似する。子葉は屈曲して下向きに伸びるものである。83は左周縁幅約5.5cm、瓦当上部厚3.0cm、上周縁幅約1.3cmを測る。瓦当の文様構成は82と類似するが、子葉は上向きに伸び先端が双葉に開く。85は右周縁幅約3.4cm、瓦当上部厚2.7cmを測る。中心飾りには、花卉とその周囲を半円状にめぐる点珠を配するものと思われ、簡略化された唐草文が2つみられる。また瓦当面には木目状の圧痕が観察できる。色調はやや光沢のある暗灰色を呈し、胎土中には灰色粒及び雲母を比較的多く含む。86・87は、細線によって文様を表現したもので、86は左周縁幅3.9cm、上周縁幅約1.2cmを測る。中心飾りには五弁花を配すると思われる。色調は暗灰色を呈し、胎土中には結晶片岩及び、赤色軟質粒を含む。焼成はやや軟質である。87は簡略化した唐草文を表現したものと考えられる。胎土中には結晶片岩及び赤色軟質粒を含み、焼成はやや軟質である。これら82～87は江戸時代のものと考えられる。

88は、点珠を中心とする3弁の三ツ葉状の文様を中心飾りの一部とするもので、左右には2回反転する唐草文が長く伸びる。89は瓦当上部幅約23.1cm、瓦当上部厚2.5cmを測る。文様構成は88の簡略化されたものと考えられる。色調は黒灰色を呈する。90は左周縁幅約4.3cm、瓦当上部厚2.9cmを測る。中心飾りの中央部に十字文を配し、左右にはやや簡略化された唐草文をおくもので、色調は黒灰色を呈し、胎土には結晶片岩を含む。焼成はやや軟質である。これら88～90は江戸時代後半のものであろう。

91は瓦当上部幅22.9cm、左右周縁幅5.1cm、瓦当上部厚2.2cmを測る。瓦当の文様構成は、中心飾りと左右に派生し上方に巻く唐草文及び、先端が双葉に開く子葉からなる。92は、左周縁幅約6.4cm、瓦当上部厚3.5cm、瓦当幅6.5cmを測るものである。瓦当文様は78・79のものに類似し、文様断面は約0.7cmと高い。

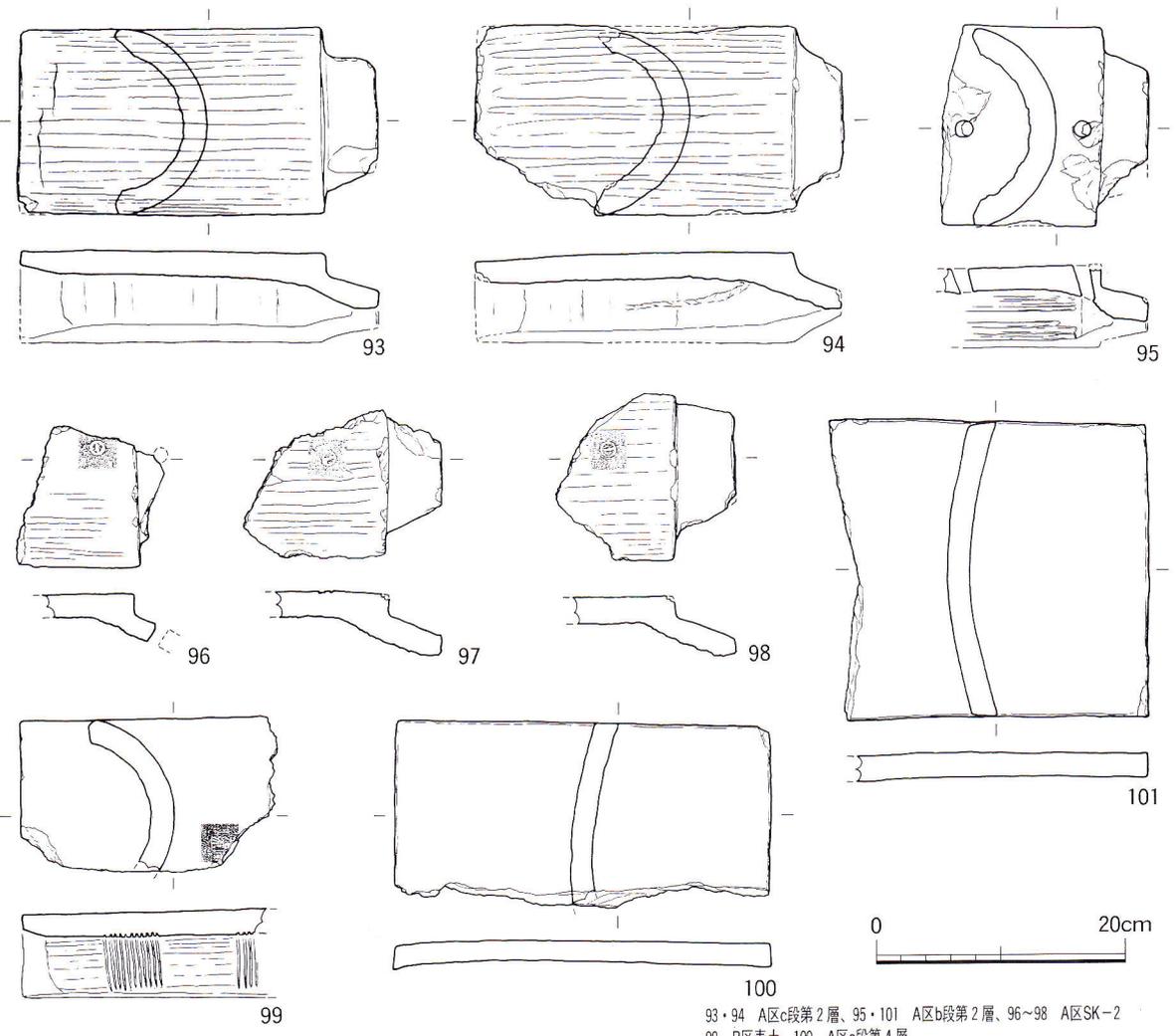
[丸瓦・平瓦] (第34図、図版55)

93～98は丸瓦である。93・94は残存状態の良いもので、93は全長約28.0cm、幅約14.5cmを測り、94は全長約28.7cm、幅約14.9cmを測り規格性を感じさせる。93は凸面に縦方向のヘラミガキを施し、凹面には「コビキB」技法がみられる。94は凸面に縦方向の板状工具によるナデ調整がみられ、凹面には吊り紐痕がみられる。色調は、93が黒灰色、94が灰色を呈する。95は幅約15.6cmを測る。凸面にはナデ調整を施し、凹面は縦方向のヘラミガキを施す。また胴部には凸面側から釘穴が2ヶ所穿たれる。胎土中には赤色軟質粒を含み、焼成はやや軟質である。96～98はともに「丸に一」の刻印をもつものである。それぞれ凸面の調整には縦方向のヘラミガキを施し、

比較的長く伸びる玉縁部の形状には類似性がみられる。さらに96には玉縁部分に釘穴が凸面側から穿たれる。色調については、96が明灰色、97・98が黒灰色を呈し、胎土はそれぞれ均一で、灰色粒を含む。99は全長19.0cm以上、高さ約6.5cmを測る。凹面には縦方向のヘラミガキと、条線11条からなる滑りどめを2列以上を施す。さらに凸面には「瓦源」の刻印がみとめられる。色調は光沢のある黒灰色で、焼成は良好である。

100・101は平瓦である。100は全長29.6cm、厚さ1.6～1.7cmを測り、101は狭端幅23.2cm、厚さ1.8～2.0cmを測る。凹面の調整はともにナデ調整を用いるが、100は横方向の板状工具によるナデ調整である。凸面はともに不定方向のナデ調整を施す。色調については、100が暗灰色、101が黒灰色を呈する。

以上、93～101の瓦の色調及び胎土は、文中で特に触れなかったものについては黒灰色から灰色を呈し、また3に赤色軟質粒が含まれる以外は1～2mm大の長石・灰色粒・ごく細かな雲母及び、砂粒を含む。焼成は良好である。



93・94 A区c段第2層、95・101 A区b段第2層、96～98 A区SK-2
99 B区表土、100 A区c段第4層

第34図 遺物実測図7

[道具瓦] (第35図、図版56・57・58)

道具瓦としては鬼瓦、棟込瓦、面戸瓦、鳥伏間瓦、隅瓦・掛瓦などの他、埴がある。

102・103は三葉葵紋をもつ鬼瓦である。102は型を用いて成形した後、ナデによって仕上げるものである。中央の葵紋は周縁まで含めると直径15.0cmを測り、周縁端部には丁寧な面取りが施される。裏面は成形時のナデ調整が顕著に残り、中央部は横方向のナデ調整により挿鉢状にくぼむ。吊り穴は、幅約4.7cm、厚さ約3.1cmを測る棒状の粘土を弧状に貼り付けるもので把手状を呈する。色調は暗灰色から黒灰色を呈する。103は102と同様の製作技法によって成形され、裏面には丁寧なナデ調整と横方向に貼り付けられたと考えられる吊り穴の剥離痕がみられる。色調は淡灰色から黒灰色を呈し、1～2mm大の黒灰色と砂粒を含む。

104・105は棟込瓦である。104は菊花文をもつもので、瓦当径9.1cm、瓦当厚2.1cmを測る。菊花は型押しによるもので、8葉の花弁に間弁をもつ。色調は淡灰色から黒灰色を呈し、胎土には白色粒・黒色粒を含む。105は輪違い瓦である。全長13.2cmを測る。調整は凸面は丁寧なナデ調整が施され、凹面には布目痕がみられる。色調は暗灰色を呈し、胎土には白色粒を含む。

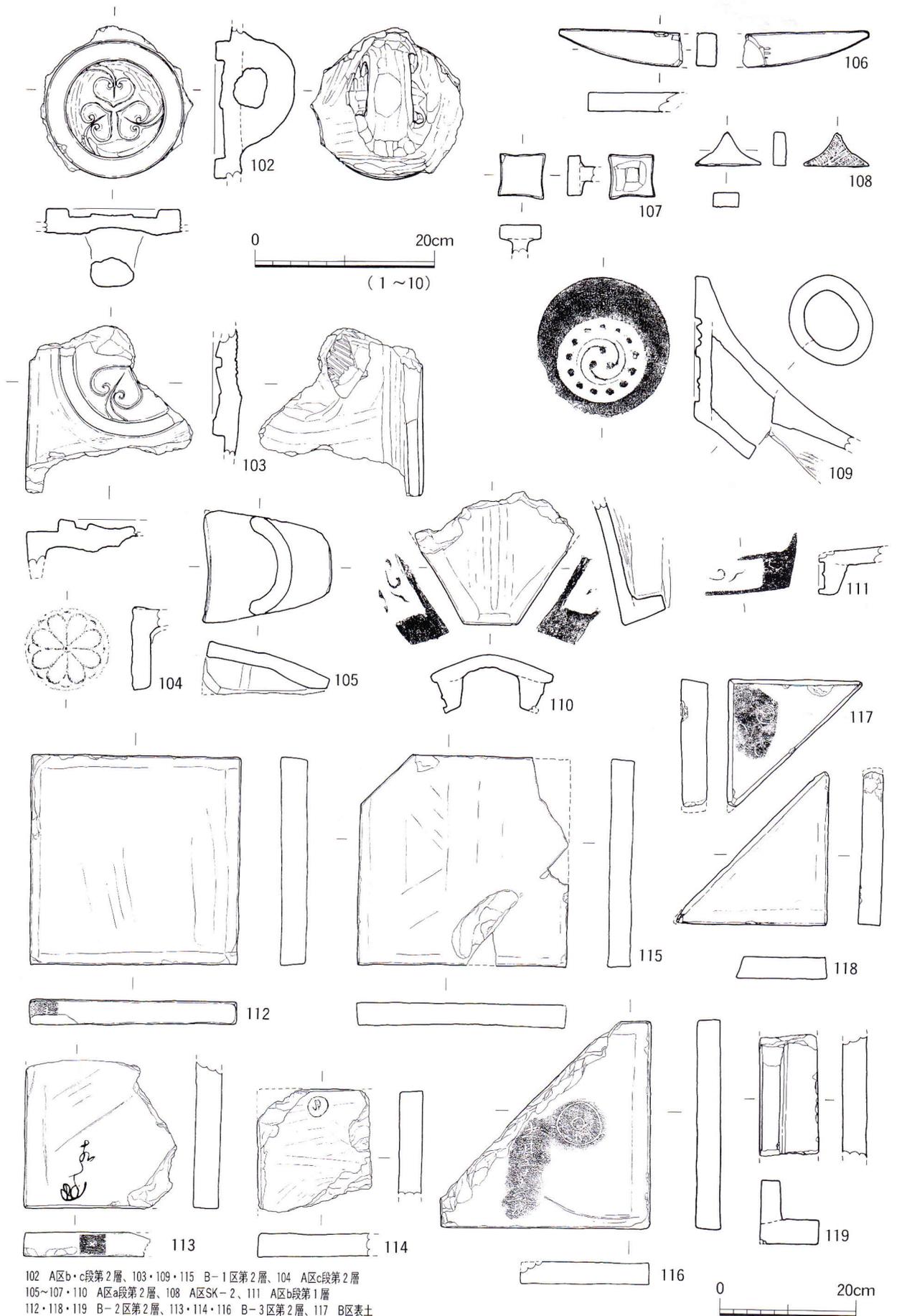
106～108は面戸瓦である。106はいわゆる「鯉面戸」または隅棟下に使われるため「隅面戸」と呼ばれるもので、残存長13.6cm、厚さ2.1cmを測る。裏面には3条の刻目がみられ差込部が貼り付けられていたと考えられる。色調は淡灰色を呈し、光沢をもつ。107は方形の各辺をヘラ条工具で弧状に削り取ったものである。表・裏面の調整にはナデ調整を用い、裏面には残存長1.7cmの差込部がみられる。胎土にはごく細かな雲母を含む。108は107を対角線で半裁した三角形状のものである。裏面には格子目状の刻目がみられ、これは差込部を貼り付けるためのものとする。色調は暗灰色を呈し、胎土には白色粒を含む。

109は鳥伏間瓦である。瓦当の長径15.5cm、瓦当厚1.9cm、周縁幅は最大4.5cm、最小1.8cmを測る。3分割して製作されたパーツをナデにより接合するもので、袋状の部分は厚さ約1.7～1.9cmを測る一枚の粘土板を用いて製作しており、内面には接合痕がみられる。瓦当裏面の調整にはナデ調整が用いられ、接合部付近には刻目がみられた。色調は灰褐色から黒灰色を呈し、胎土には黒色粒と砂粒を含む。110は隅軒平瓦である。残存長13.5cmを測る。左右の瓦当部はやや内傾し、ともに唐草文がみられる。凸面の調整には縦方向のヘラミガキ後、周縁に沿ってナデ調整が施され、凹面は縦方向のナデ調整がみられた。111は掛唐草と呼ばれるもので、瓦当幅4.3cm、瓦当上部厚3.3cmを測る。凹・凸面の調整はナデ調整が施される。色調は明灰色から黒灰色を呈する。

埴には平面形が方形のもの、方形の一部を切り取るもの、三角形状のもの3種類がある。

112～114は平面形が方形のものである。112は一辺30.2cm、厚さ3.4～3.8cmを測り、表・裏面の調整は不定方向のナデ後周縁に沿ってナデ調整が施される。また側面には丁寧なナデ調整を用い、「×」の刻印がみられる。色調は灰色から黒灰色を呈し、胎土には黒色粒・砂粒を含む。113は残存幅21.8cm、厚さ3.5～3.7cmを測る。側面には112と同じ刻印がみられ、表面には「敬□□」の墨書がみられる。114は残存幅16.5cm、厚さ3.3～3.5cmを測る。表面には「㊸」・「㊹」の墨書と文字状の線刻が2ヶ所みられる。胎土には褐色粒・砂粒が含まれる。

115・116は方形の一部を切り取るものである。115は一辺30.4cm、厚さ3.1～3.5cmを測り、焼成後左上の角部を切り取るものである。調整は112と同様で、色調は淡灰色から黒灰色を呈し、胎土には1～



102 A区b·c段第2層、103·109·115 B-1区第2層、104 A区c段第2層
 105~107·110 A区a段第2層、108 A区SK-2、111 A区b段第1層
 112·118·119 B-2区第2層、113·114·116 B-3区第2層、117 B区表土

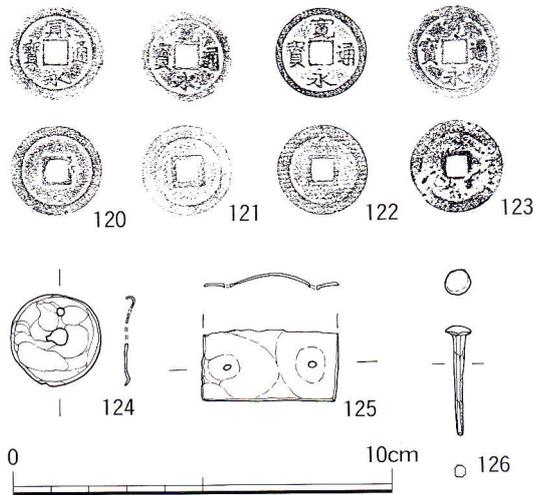
第35圖 遺物実測図8

2 mm 大の褐色粒・砂粒を含む。116 は一辺 30.3cm、厚さ 3.2 ~ 3.4cm を測る。115 と同じ手法により全体の約 2 分の 1 を切り取るもので、三角形状を呈する。表面には「◎」と「土臺はな」の文字がへら描きで表現される。色調は淡灰色から暗灰色を呈し、焼成はやや不良である。

117・118 は三角形のもので、117 は短辺約 19.5cm、長辺約 27.0cm の二等辺三角形を呈し、厚さ 3.5 ~ 3.7cm を測る。表面には「㊦」及び「北かわ」の文字がへら描きで表現される。色調は灰褐色から黒灰色を呈し、胎土には褐色粒・ごくこまかな砂粒を含む。118 は、117 よりやや大きいもので短辺約 22.5cm、長辺約 31.0cm、厚さ 3.1cm を測る。色調は淡灰色から灰色を呈し、胎土には 1 mm 大の黒色粒・砂粒を含む。これらの他に「すミ」、「年?」、と線刻されたものや「㊦?」、「㊧」または「㊨」、「はな?」といった墨書がみられる。119 は断面「L」字状の瓦である。残存長 17.0cm、厚さ 2.7 ~ 3.5cm を測り、屈曲部には粘土の接合痕がみられる。色調は淡灰色から黒灰色を呈し、胎土には 1 ~ 3 mm 大の褐色粒と砂粒を含むものである。

〔金属製品〕（第 36 図）

金属製品では銭貨（120 ~ 123）、模造銭（124）、板状金具（125）、釘（126）などが出土した。銭貨は全て「寛永通寶」で、直径 2.4cm を測る銅銭である。厚さについては 120、122、123 は 1.0mm、121 は 1.5mm を測る。重量は 120 は 2.5 g、121 は 4.0 g、122 は 2.9 g、123 は 3.2 g を測るものである。また、120・121 はいわゆる「古寛永」、122・123 は「新寛永」に相当するものであると考えられる。銅銭については全て A 区の第 1 ~ 3 層から出土したものである。



第 36 図 遺物実測図 9

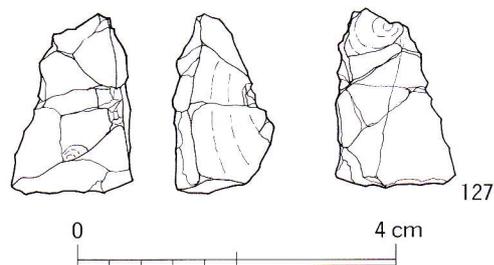
模造銭（124）については、いわゆる「雁首銭」であり、キセルの銅製の雁首部を叩き、扁平にしたものである。直径 2.4cm、厚さ 0.5mm、重量 1.2 g を測るものである。A 区 c 段第 2 層から出土した。

板状金具（125）は銅板を薄板状に加工したものであり、幅 3.6cm、厚さ 1.0mm、残存長 1.9cm、重量 3.7 g を測る。直径 2.0mm の釘留めによる穿孔が 2 ケ所にみられ、釘孔に平行する一辺に切断面がみられる。A 区 b・c 段第 2 層から出土した。

釘（126）は銅製であるが錆化のため黒色に変色している。頭部を半球状にしたもので、身部は断面形 8 角形であり、頭部から先へ細くなるものである。頭部径 0.7cm、全長 2.9cm、重量 1.6 g を測る。A 区 c 段第 3 層から出土した。

〔石製品〕（第 37 図）

石製品は、チャート製火打石が 1 点（127）出土した。127 は灰白色を帯びた透明感のある青色に発色する。側縁部の角 2/3 の部分に火打金との打撃による潰れた状況がみられるが、稜線は打撃を受けていない。長さ 2.2cm、幅 1.5cm、厚さ 1.2cm、重量 3.5 g を測るものである。A 区 c 段第 2 層から出土した。



第 37 図 遺物実測図 10

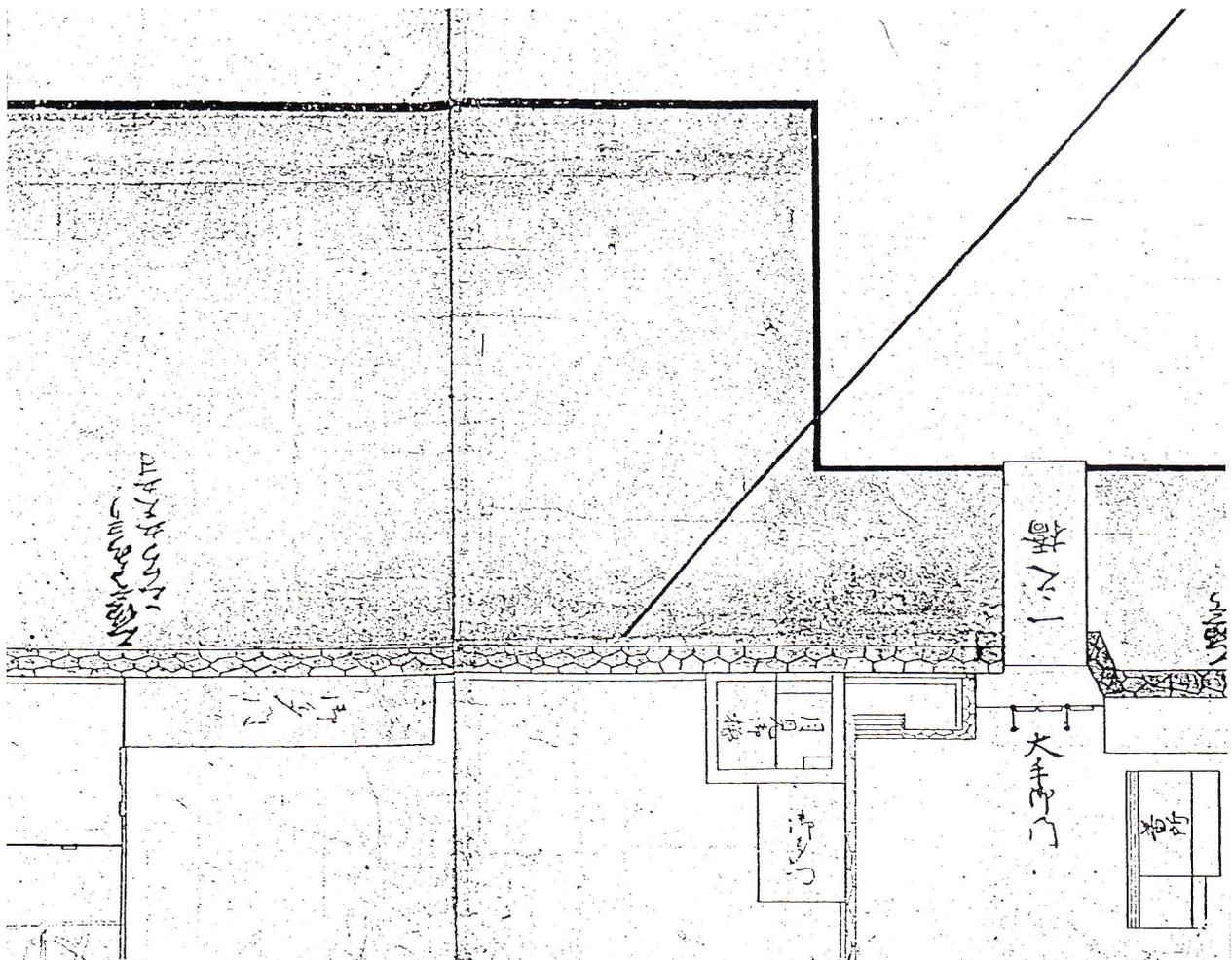
7. まとめ

(1) 檣台上面遺構について

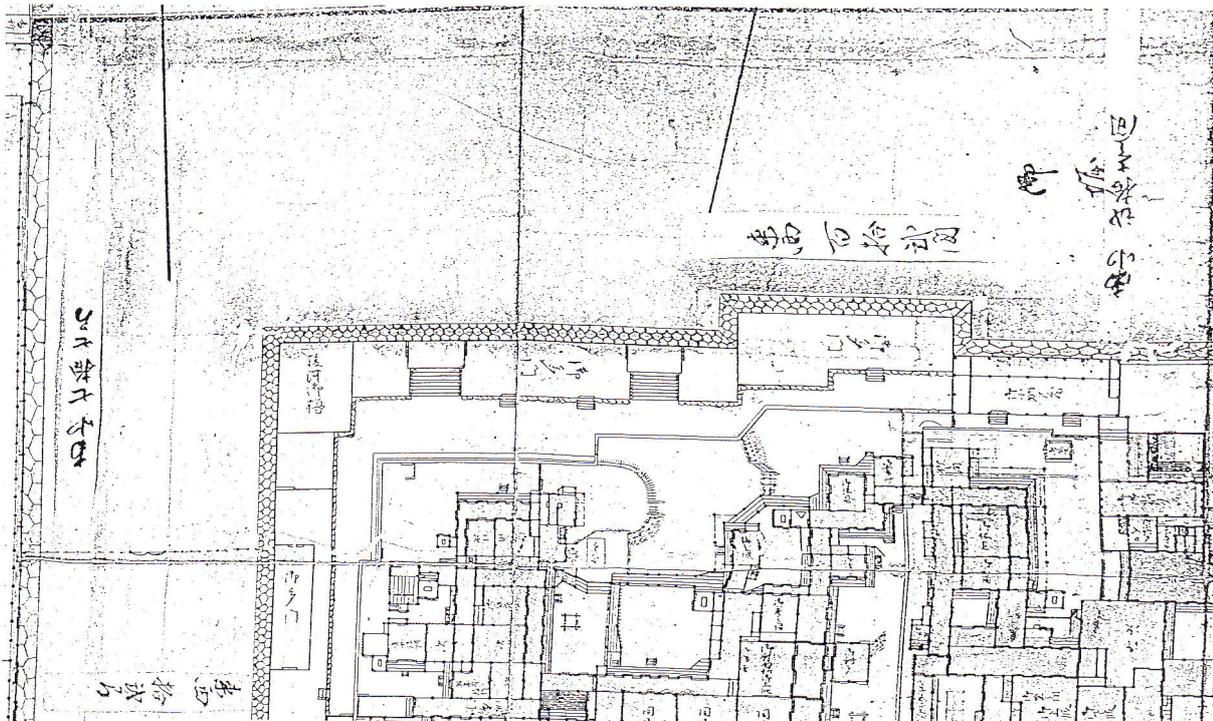
A区「月見檣」において、第3層上面で礎石1を検出した。この礎石1は、北側と東側は石垣、南側と西側は石列によって区画された檣敷地の中央に据えられた状態で検出した。なお、第3層下の整地礫層上面において、礎石1の南西に隣接して礎石2・3を検出した。これらの礎石の位置は北側・東側については石垣、西側は石垣SV-2、南側は石垣SV-3に囲まれた範囲のほぼ中央部分にあたる。これらの建物中央部で検出される礎石は一辺60～100cmを測り、他の礎石と比べて規模の大きい点で共通するものである。また、以上の中心礎石は「月見檣」の他、「物見檣」・「駿河檣」においても検出したことから、隅檣などの建物に必要な基礎構造であったものと考えられる。

以上のことから、「月見檣」は当初、中央の礎石に礎石2・3を用いて、西面はSV-2石垣面まで、南面はSV-3石垣面までの範囲に建てられたものと考えられる。この当初とみられる「月見檣」は礎石2・3の上面周辺に赤変部分がみられることや第3層下層に部分的に焼土層が存在することなどから、火災を受け失われた可能性が高いものである。これを第1期の「月見檣」(梁行10.40m、桁行12.10m)とする。

また、再建されたとみられる建物の礎石1を中心礎石と考えた場合、西面と南面を石列で区画される範囲は梁行8.40m、桁行10.40mを測るもので「物見檣」(梁行8.40m、桁行10.60m)・「駿河檣」(梁行8.40m、桁行10.20m)の規模に近似するものである。おそらくは、徳川頼宣の治世に拡張したとされる二



第38図 「和歌山御城内惣御絵図」(「月見檣」周辺部分)



第 39 図 「和歌山御城内惣御絵図」(「物見櫓」～「駿河櫓」周辺部分)

の丸北西隅部に建つ「駿河櫓」などが頼宣の隅櫓規格であり、火災後の再建時に「月見櫓」の規模を「駿河櫓」などに準じて縮小・建設されたものと考えられる。これを第 2 期の「月見櫓」とする。その結果、「月見櫓」の西側と南側の一部に櫓台石垣天端に西側幅 1.70 m、南側幅 1.95 mの通路状の空閑地が生じたものであろう。

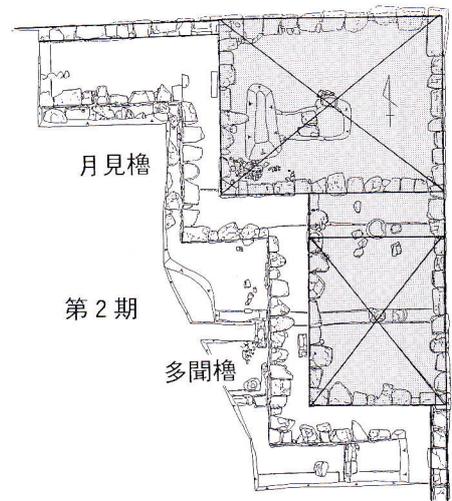
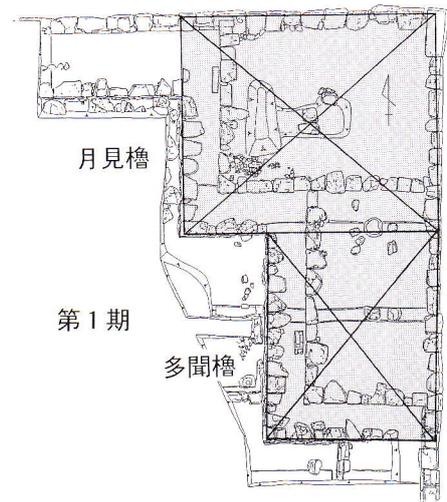
次に、「月見櫓」の南側に付属する建物(多聞櫓)について考える。サブトレンチ 3 の調査により、礎石 4 は整地礫層上面に据えられていることを確認した。また、礎石 4 を建物の中心と考えた場合、建物の北面は S V - 3 石垣面の延長線上ライン、東面は石垣、西と南面は石列で区画された範囲を考察することができる。この規模は梁行 6.45 m、桁行 9.90 m を測り、梁の規格が「物見櫓」東側「多聞櫓」(梁行 6.50 m)、「駿河櫓」東側一連の「多聞櫓」(梁行平均約 6.30 m) 及び南側「多聞櫓」(梁行 6.30 m) などと近似する。これらのことから、再建された第 2 期「月見櫓」に付属する南側建物は石列 3・4 で区画された範囲にあったものと考えられ、北側の桁を約 1.95 m 延ばして「月見櫓」と接続されていた可能性が考えられる。この時に、「月見櫓」と同様、西側と南側の二の丸側に幅 1.8 m の通路状の空閑地が生じた可能性が高い。これを第 2 期の「月見櫓」南側「多聞櫓」と呼ぶ。「月見櫓」櫓台の北面石垣天端上に「月見櫓」に接続して西側に、また、「月見櫓」南側「多聞櫓」の櫓台南側、東面石垣天端上に建物に接続して南側に土塀が築かれていたものとみられる。また、第 1 期「月見櫓」に付属する「多聞櫓」について、この期の櫓台の状況は、「月見櫓」が櫓台敷地全体に占地していたものと考えられることから、「月見櫓」南側「多聞櫓」についても同様に考えると梁行 8.15 m、桁行 9.70 m を測る規模となる。この第 1 期の「多聞櫓」については、推定される中心礎石の該当場所の調査は行っていないので、中心礎石の有無は明らかではない。しかし、第 1 期についても第 2 期同様「月見櫓」の南側に「多聞櫓」が存在したものと考えられ、この第 1 期「月見櫓」南側「多聞櫓」は、西面については S V - 4、南面は S V - 5 の石垣面までの平面規模であったものと考えられる。

次に、第1期・第2期の具体的な時期について検討する。

A区及びB区において、下層調査のためのサブトレンチを合わせて16ヶ所設定したが、櫓台築造時の整地礫層上面が火を受けたとみられる赤変部分と焼土層を5ヶ所において検出した。これは、大規模な火災を受けた痕跡であると考えられ、おそらくは調査区内に存在した建造物の多くは被災したものとみられる。江戸時代の当地での火災記録によると、明暦元年(1655)11月13日のものが状況的に良く一致し、出土遺物についてもそれを否定するものではなく、火災は明暦のものである可能性が高い。明治初年撮影の写真に写っている「月見櫓」、「駿河櫓」及び「物見櫓」とそれと一連の「多聞櫓」・土塀等はこの火災後に再建されたものと考えられる。

以上のことから、明暦の可能性の高い火災を画期として、ここでいう第1期は二の丸櫓台建設～火災までの期間、第2期は火災から明治時代までの期間と考えることができる(第40図、第1表)。

なお、二の丸外縁部北面石垣上面での「月見櫓」から「駿河櫓」までの平面的な石垣天端での角度について、「月見櫓」周辺は真北方向に一致した方向性がみられる。しかし、「物見櫓」から東へ約30mの距離から西側部分、すなわち「物見櫓」、「駿河櫓」、二の丸櫓台西面石垣などを含む範囲は、真北から東に約1度偏した方向性をとる。このことは、「物見櫓」周辺から西側が徳川頼宣によって増築された部分であるといわれることと関係があると思われる。



第40図 A区「月見櫓」周辺変遷推定模式図

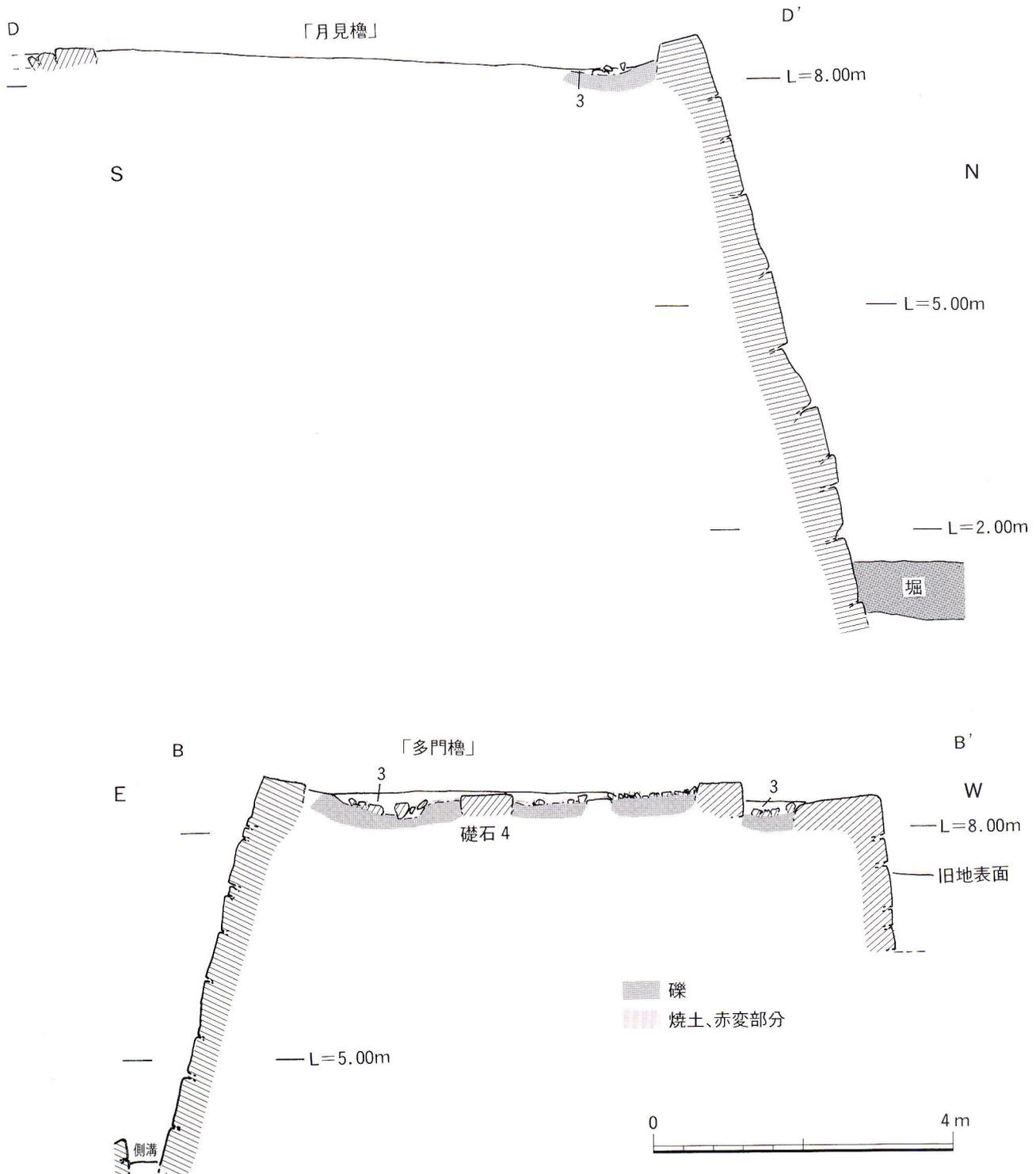
第1表 二の丸北面櫓台上建物規模の推定一覧表

	第1期	第2期
月見櫓	梁行 10.4 m × 桁行 12.1 m	梁行 8.4 m × 桁行 10.4 m
月見櫓南側多聞櫓	梁行 8.15 m × 桁行 9.7 m	梁行 6.45 m × 桁行 9.9 m (更に月見櫓側へ延長 1.95 m)
物見櫓	梁行 8.4 m × 桁行 10.6 m	
駿河櫓	梁行 8.4 m × 桁行 10.2 m	
物見櫓～駿河櫓周辺の多聞櫓	櫓台幅(梁行) 6.3 m	

(2) 二の丸櫓台石垣構築の特徴

二の丸櫓台石垣構築の特徴について、堀側の各石垣構築角度を、断面実測を行った箇所での測定値から検討する。

「月見櫓」北面石垣(第41図、写真1)及び東面石垣(第41図)は共に75度の構築角度を測る。「物見櫓」北面石垣(第42図、写真2)については、石垣下部の2~3m間は67度、それより上部は74度を測る。「物見櫓」から「駿河櫓」までの間の北面石垣(第43図)について、構築角度は石垣下部の約1m



第41図 A区石垣断面図

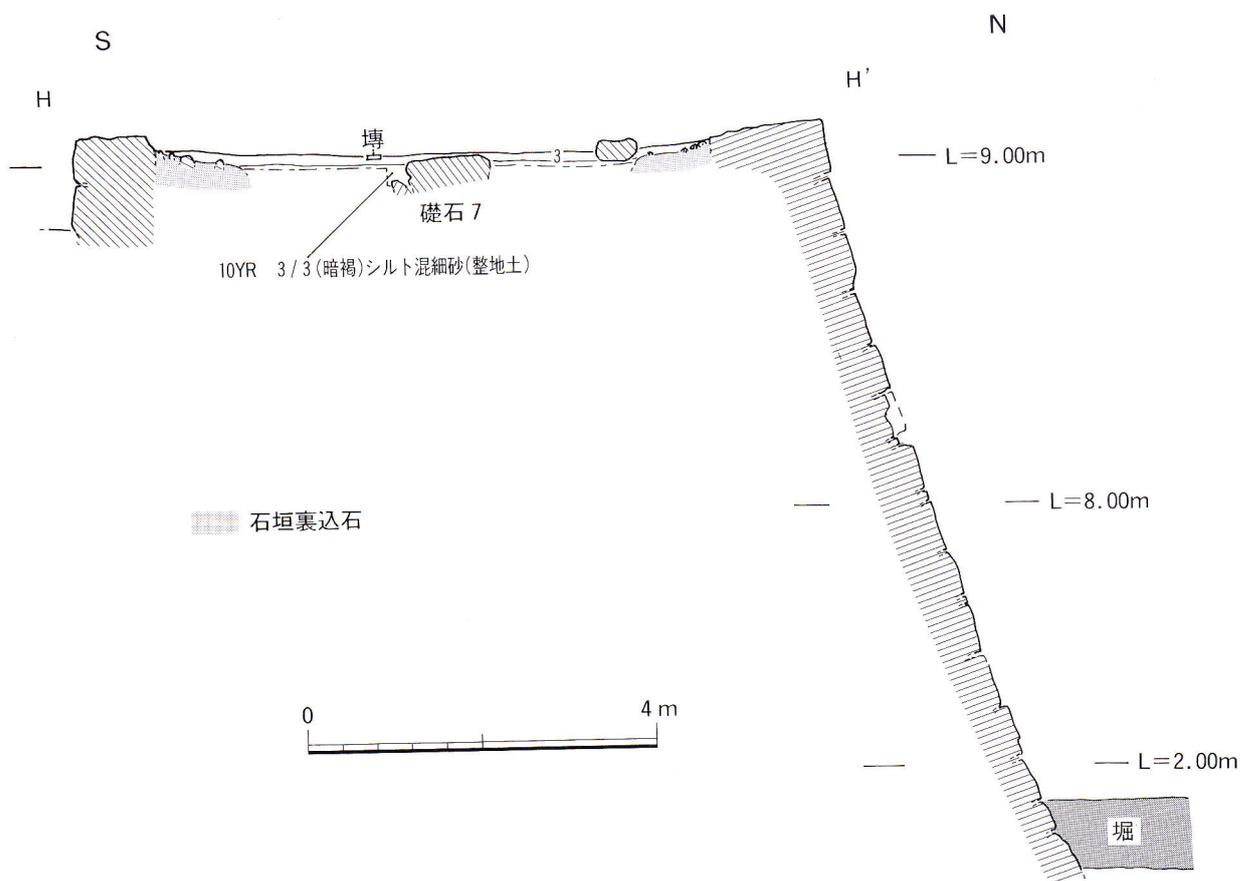
間は 55 度、それ以上の位置では 75 度を測る。次に、「駿河櫓」北面石垣(第 44 図上)について、石垣下部から 2~3m 間は 70 度、それより上部は 77 度を測る。最後に、「駿河櫓」西面石垣(第 44 図下)について、構築角度は石垣下部から約 1m 間は 57 度、それより上部は 77 度を測るものである。まとめるならば、「月見櫓」は石垣の構築角度について、石垣下部近くから石垣天端まで、ほぼ同様の角度約 75 度を測り、この角度の範囲は「物見櫓」から「駿河櫓」



写真1 A区「月見櫓」北面石垣(北西から)

間櫓台北面石垣までの上部にみられる。また、石垣下部の 2~3m 間を約 70 度と緩やかに積む状況がみられるのは、「物見櫓」北面石垣と「駿河櫓」北面石垣である。更に、石垣下部の約 1m 間を約 55 度と非常に緩やかに積む場所は「物見櫓」から「駿河櫓」までの間の櫓台北面石垣と「駿河櫓」西面石垣にみられる。

以上、二の丸櫓台堀側石垣の平均的な構築角度は約 75 度であるといえる。また、「月見櫓」周囲の石垣が下部から石垣天端まで、ほぼ同様の角度で築かれていることに対して、「物見櫓」から「駿河櫓」周辺(写真 3)については石垣下部の一部を緩やかな角度に積む工夫がなされている。こういった点も、石垣築造が浅野氏であるか徳川氏であるかの相異点である可能性があるといえよう。



第 42 図 B区「物見櫓」石垣断面図

なお、「埋設石積」を櫓台二の丸側 A 区石垣 SV-4 の前面で検出した(第 16 図)。この遺構は江戸時代の遺構面下であり、SV-4 石垣面に直交して設置され、北側に面をもつものである。長さ 1.7 m を検出したが、SV-4 石垣面に接するところは 3 段積みであり、他は 2 段積みであった。この埋設石積は、石垣の歪みを防止するための地下構造物と考えられ、SV-4 に伴い構築されたものとみられる。また、石積は面を北側に持っていることから、石積の裏側に当たる南側部分を先に盛土整地したものと考えられ、二の丸郭内部の盛土整地過程の途中で設置されたものであったと考えられる。

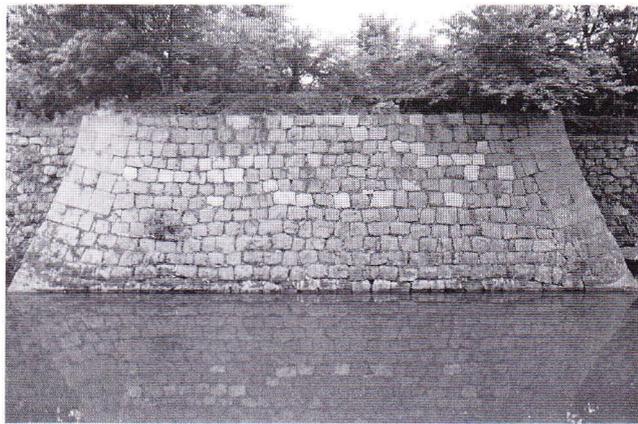
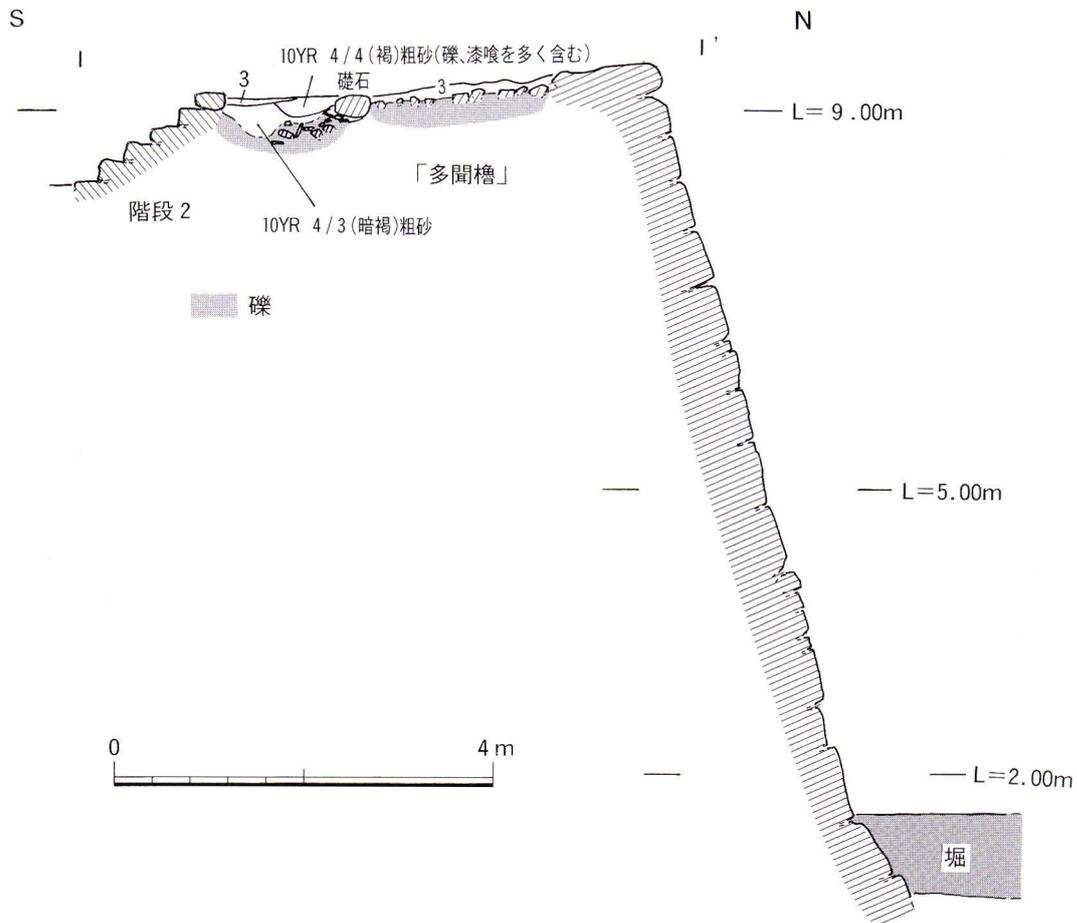
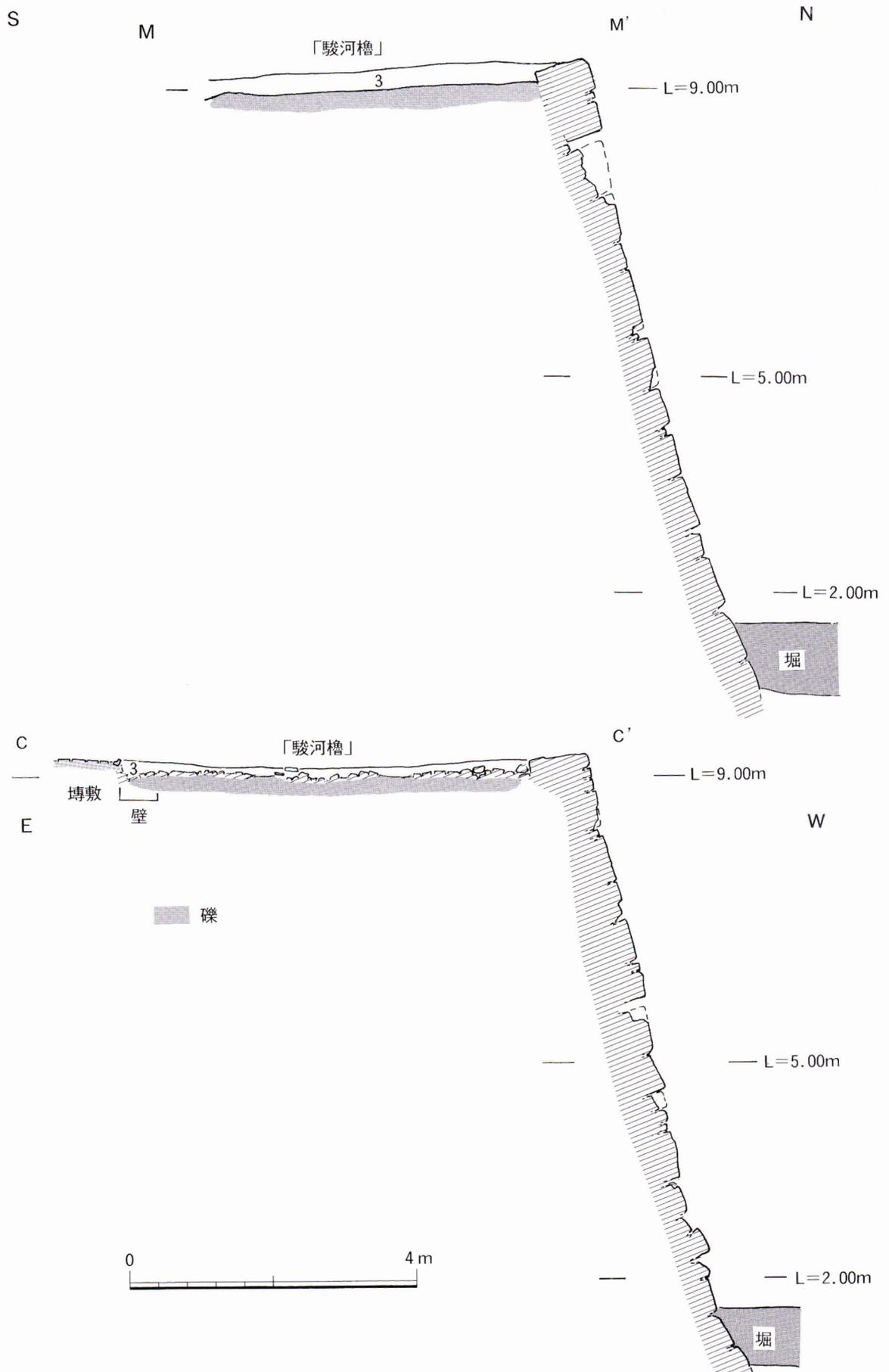


写真2 B区「物見櫓」北面石垣(北から)

櫓台のサブトレンチ調査から、二の丸櫓台上面において堀側及び櫓台内側石垣の裏込石の厚さは石垣の石材裏側から約 1 m であることを一部確認した。また、石垣裏込石について、A 区の「月見櫓」周辺は石垣裏込石に結晶片岩の礫を用いているが、B 区については「物見櫓」周辺は裏込石上部に砂岩の円礫が用いられ、「物見櫓」から「駿河櫓」周辺については結晶片岩礫と砂岩礫の 2 種類がみられた。



第 43 図 サブトレンチ 5 石垣断面図



第44図 B区「駿河櫓」石垣断面图

以上、二の丸櫓台石垣構築の特徴について、堀側石垣の構築角度などを検討した。次に、下層確認のためのサブトレンチ調査の成果などから二の丸櫓台の構築過程を推定する。

まず、周辺の自然地形として、天守閣の立地する岩山を中心として、砂堆が周囲に丘陵状に広がっていたものと考えられており、縄張りを行った後、堀の掘削とその排土処理を兼ねた二の丸の造成を同時平行して行ったものとみられる。堀と郭の境界と



写真3 B区「物見櫓」～「駿河櫓」にかけての北面石垣（北西から）

して櫓台石垣を積み上げる場合、裏込石を伴う石垣をある程度積み上げ、郭内側についてはその段階での盛土整地を可能な限り行い、交互にその作業を続けて二の丸郭を構築したものとみられる。作業の最終段階として、櫓台二の丸側石垣の積み上げを行い、現在みられる高さ程度まで櫓台内部を盛土整地したものと考えられる。この櫓台内部においては、盛土整地の厚さは単位厚約40cm程度であることを一部で確認しており、礫層と砂層を交互に版築状に整地した状況がみられた。また、二の丸郭内部の整地状況であるが、A区において盛土整地を櫓台二の丸側石垣基底石から1m程度の高さまで行った状況を確認した（第14図）。二の丸郭内部の整地についても櫓台内部同様、盛土整地の単位厚は40cm程度であることを一部確認し、以上のことから二の丸郭内部の下層整地土についても同様に、盛土整地単位厚が40cm程度であることを推定することができた。なお、この盛土整地によって櫓台二の丸側石垣面はその下半分を埋められたものであるが、石垣隅角部の仕上げ状況などからみて、この整地も石垣構築当初から計画的に行われたものであったと考えられる。

以上、二の丸櫓台の石垣構築角度及び整地の状況などの検討から、二の丸櫓台の構築過程を推定した。しかし、今回の調査は江戸時代の生活面までの調査であり、深掘（サブトレンチ）調査については調査区の一部、石垣を壊さない配慮により下層整地層は深さ50cm程度までの調査に留まったことから二の丸構築時の下層状況などは不明であり、今後の調査に期待したい。

（3）「駿河櫓」付属建物跡検出の「埴敷」遺構について（第45図）

「駿河櫓」東側付属建物跡の床面において、「埴敷」を検出した。「埴敷」は、櫓台石垣に対し約45度の角度で埴を敷き詰めた四半敷であった。

「埴敷」は、後世の攪乱を受け不明確な部分もあるが、東西約5.4m、南北約2.6mの範囲を確認し、櫓台のほぼ中央部に1辺約20cm四方の埴を直線に並べ端部を整えている。使用された埴は、1辺約30cm四方、厚さ3～4cmの方形のものや短辺19.5～22.5cm、長辺3.1～3.5cm、厚さ3～4cmの二等辺三角形のものが多数を占めるが、なかには方形の埴を用途に合わせて部分的に切り込みを入れ、組み合わせて敷いているものもある。

このほか、埴の東西両端において長さ20～25cm、厚さ約3cmの「L字状」の瓦を検出している。この瓦と並行に漆喰の痕跡がみられることや建物の区画部分であることから、ここに西側で

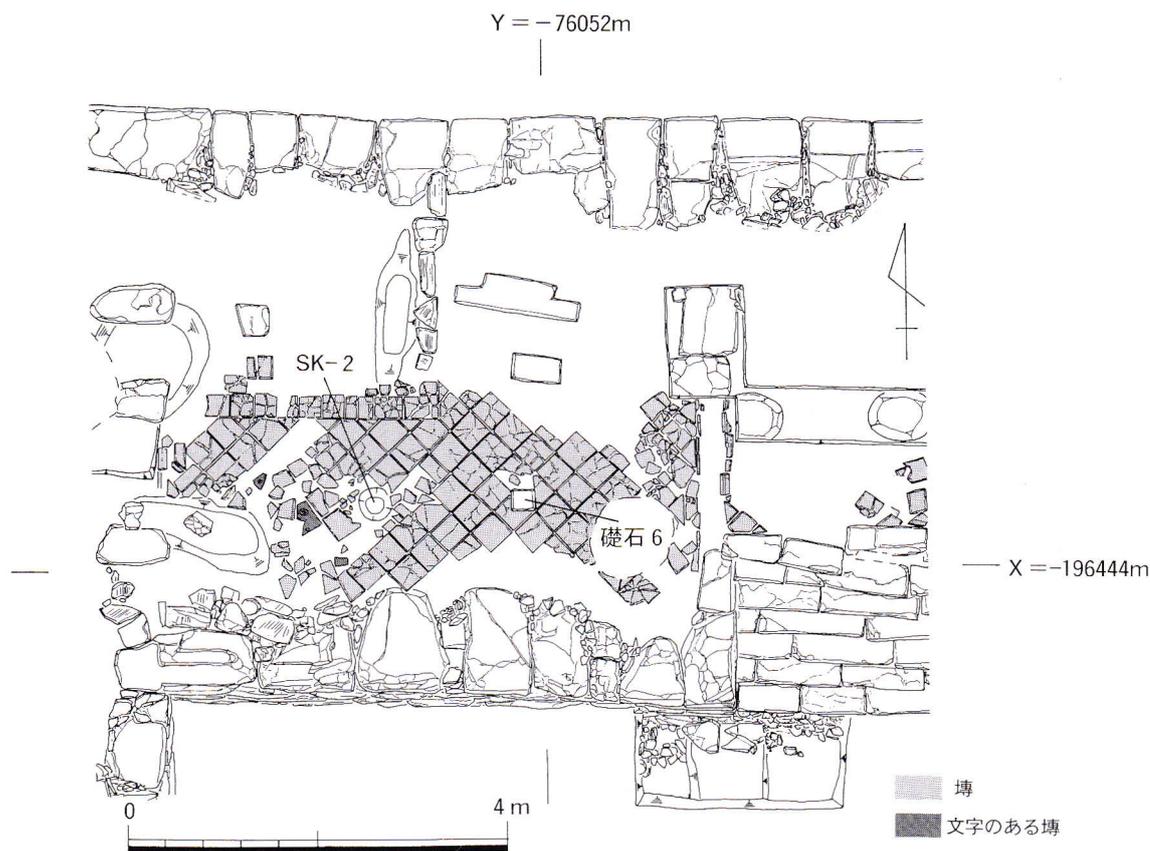
幅約50cm、東側で幅約20cmの厚みを持った壁が立ち上がり、2～6mmの厚さの漆喰で表面を仕上げていたものと考えられ、「L字状」瓦は壁の基礎を保護したものとみられる。

また、「塼敷」の範囲内には1辺約25cm、厚さ約10.5cmを測る方柱状の砂岩の礎石（礎石6）が1基組み込まれており、これと同規模の礎石が据えられていたとみられるSK-2を検出している。礎石は方柱状に加工されていたが、下部は粗割のままであり、これによって、当初から下半分を埋め込んで設置したものであると考えられる。

「塼敷」は塼の出土位置からみて、「駿河櫓」への入口部分にあたる床面を整備したものであるとみられ、東側付属建物及び階段2の櫓台床面に敷かれていたものと考えられる。「塼敷」の構築時期は、下層から棧瓦などが出土していることから江戸時代後期頃であると考えられる。また、塼の出土地点の広がりなどから、「駿河櫓」東側付属建物から「物見櫓」周辺建物の床面を、「塼敷」で整えていた可能性が考えられる。

塼を使用した建物の基礎構造については、江戸時代において、姫路城、岡山城、掛川城（静岡県）などに「塼敷」の類例がみられ、それぞれの塼は一辺24～25cm四方、厚さ4～4.5cmを測ると報告されている。また、江戸時代末期頃の和歌山城内の状況を描いた「和歌山御城内惣御絵図」には、二の丸「表」の入り口部分に当たる場所に「塼敷」とみられる斜格子の表現を確認することができる。これらの事例から、寺院の床面において多くみられる「塼敷」は、少なくとも江戸時代後期頃には城内の床面を整える手法として普及していたものと考えられる。

また、検出した塼の表面や出土した塼のなかに、墨書やへら描きで文字や記号が記されたものを



第45図 B区「塼敷」遺構平面図

確認した。原位置を保っている埴のうち、「㊦」、「㊧」・「㊨」、「㊩」の文字や記号がヘラ描きで記しているものを3枚確認した。

出土した埴には、「敬□□」、「㊦」、「㊧」、「㊨?」、「㊩」または「㊪」、「はな?」が墨書で、「㊫」・「土臺はな」、「㊬」・「北かわ」、「すみ (隅)」、「年?」などヘラ描きで記されている。これらの文字の中には、「西南」、「土臺はな (土台端)」、「北かわ (北側)」、「すみ (隅)」など、方位や位置を記しているものがある。

近世城郭のうち、「埴敷」が使用された姫路城、岡山城、掛川城 (静岡県) の報告においては、埴に文字などを記した例を確認することはできなかったが、こうした建築に関わるものに文字や記号を使用した例を姫路城にみるができる。これは、昭和31 (1956) ~ 39 (1964) 年に行われた姫路城解体修理の際に確認されたものである。文字や記号などは「番付」と呼ばれ、建物の土台や柱、梁や継手などに墨書やノミであらゆる木材に記されている。これらは、動・植物、日用雑器類、大工道具などの「絵合番付」のほか、「△」、「□」、「#」などの記号や「一中め」、「中のかわー」、「まー」など数字や文字を組み合わせたものが、何万通りもの種類のあることが確認されている。これらを目印にして同じ番付同士の木材を組み合わせ、作業を行ったものである。「番付」は、建物を早く正確に建てるための方法の一つとして、近世城郭の作事 (建築工事) の際に取り入れられたもののようである。また、「番付」に使用された共通する記号などは施工者を示すものと考えられている。

このような報告や、検出した埴に記されたヘラ描きは焼成前に刻まれていることなどから、「埴敷」には姫路城の建築部材同様、設計図のようなものがあつたことが考えられる。しかし、確認した文字の多くは出土した遺物によるものであり、実際にどの位置のものに記されていたのかを確認することはできない。

また、使用された埴の内、「×」の刻印 (スタンプ) が側面に記されたものも出土している。刻印 (スタンプ) は、屋根に葺く瓦にもみられ、窯・工人を示すものが多い。この例についても、同様のものであると考えられる。

以上、和歌山城における江戸時代後期頃の城郭作事 (建築工事) にみられる、建物の「床」構造の一部を明らかにすることができた。

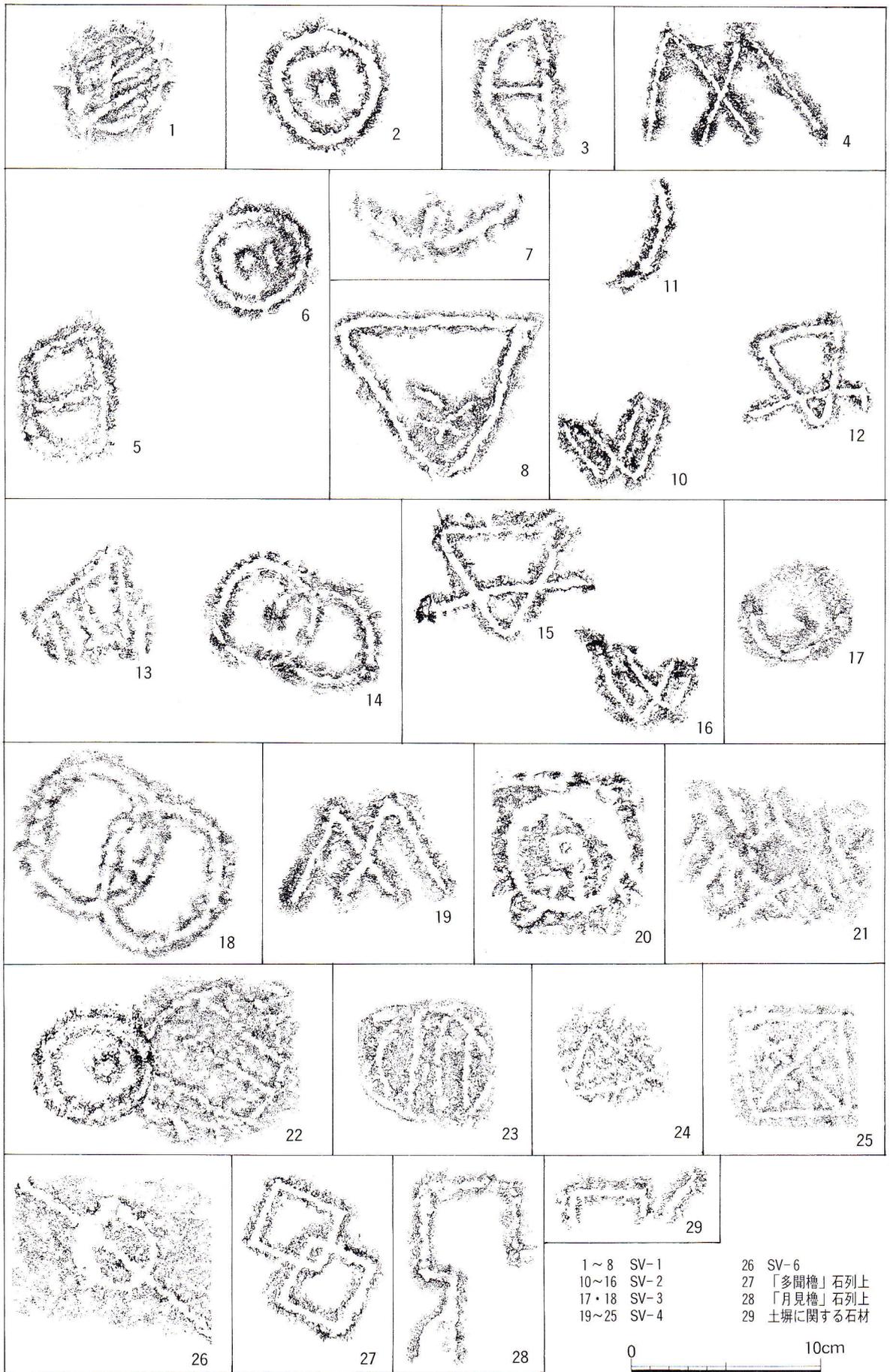
(4) 石垣面にみられる刻印について

A区では、新たに検出した二の丸側の櫓台内面 (SV-1~6) 石垣側面に26ヶ所、石垣上面に2ヶ所、北側土塀基礎部分に置かれた石材側面に1ヶ所の合計19種類30ヶ所に「刻印」が施刻されていることを確認することができた (第46図)。

またB区二の丸側、櫓台内面石垣石垣側面上にも刻印を確認した。「駿河櫓」櫓台南側の付属建物の櫓台石垣東面には、櫓台から南に約10mの間に刻印を「㊰」、「㊱」、「㊲」、「㊳」、「㊴」の5種類9ヶ所確認した。

「駿河櫓」櫓台石垣東面には「㊲」の1種類1ヶ所確認した。

階段3から階段4の間の櫓台石垣南面には「㊲」、「㊳」の2種類3ヶ所、階段3の東側に「㊲」の1種類1ヶ所確認した。



第 46 図 A 区石垣刻印 (拓本)

「物見櫓」東側櫓台石垣南面には「△」、「∧」の2種類2ヶ所、東面に「◁」の1種類1ヶ所を確認した。

二の丸北側の堀に面した石垣においては、石垣断面実測時の限られた範囲の調査の際に、A区やB区の「駿河櫓」櫓台北面石垣に「◎」、西面石垣に「∞」の刻印を各1種類1ヶ所、「物見櫓」北面櫓台石垣に「⊖」、「⊕」の刻印が多くみられ、「御小納戸蔵」北面櫓台石垣に「◁」の刻印を各1種類1ヶ所確認した。

刻印の大きさは長さ10～20cmの範囲であるが、そのほとんどは10cm前後におさまるものである。刻印は1石に1ヶ所とは限らず2～3ヶ所の記号が刻まれているものもある。その場合、同種の記号または2～3種類の記号が刻まれている。刻印のうち5・6、10・11・12、15・16は、それぞれ同じ石材に異なったものを2～3種類施刻していた。また、刻印の彫刻方法は、全て点彫りであることを確認した。

和歌山城の石垣については、石材の種類・積み方の違い、刻印の有無などから石垣築造時期の調査・研究が行われている。その結果、刻印を多く確認することができる石垣は浅野氏の時期のものとなっている。今回確認することができた石垣刻印の種類は、既に報告されている範囲のものであるが、名古屋城において浅野家の普請（分担区域）と記録された石垣に、今回検出したものと共通する「⊖（丸に三引）」、「∞（違い輪）」、「∞（違い山形）」、「∞（雁結の省略?）」、「∞」、「◁」、「※」の刻印が施刻されていることが知られる。

これらのことから、同様の刻印のある石材が使用された石垣は、浅野氏の時期の普請であった可能性が高いといえる。このほか、徳川氏普請とされた石垣や徳川時代に修築されたとみられるA区「月見櫓」櫓台石列、「土塀」基礎石材にも刻印を確認した。石垣の表面観察の結果、浅野家のものと比較して刻印の数量や種類の違いなどから、修築時に伴って石材が再利用されていたこと、あるいは徳川氏のある時期までは石垣に刻印を施す慣習が継続していた可能性を指摘することができる。

石垣刻印の目的については諸説あるが、今回これらの諸説を解明するには至らなかった。しかし、今回の埋蔵文化財の発掘調査において、新たに検出した石垣に刻印を確認したことは、和歌山城の実態解明における貴重な資料提供であるといえる。

【参考文献】

- 『和歌山御城内惣御絵図』 和歌山県立図書館蔵
- 『姫路市史』第14巻 別編姫路城 姫路市 1988年
- 『史跡和歌山城保存管理計画書』 和歌山城管理事務所 1993年
- 『近世都市和歌山の研究』 三尾功 1994年
- 「和歌山城石垣刻印調査概報」『城郭史研究』14号 日本城郭史学会 1994年
- 『甲府城跡Ⅳ』 山梨県教育委員会 1994年
- 『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』 和歌山市文化体育振興事業団調査報告書 第7集（財）和歌山市文化体育振興事業団 1994年
- 『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告書』 岡山市教育委員会 1997年
- 『掛川城復元調査報告書』 掛川市教育委員会 1998年

報 告 書 抄 録

ふ り が な	しせきわかやまじょう だい19じはくつちようさがいほう							
書 名	史跡和歌山城 第19次発掘調査概報							
副 書 名								
卷 次								
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編 著 者 名	北野隆亮・奥村薫・藤藪勝則・前田敬彦							
編 集 機 関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団							
所 在 地	〒640-8227 和歌山県和歌山市西汀丁29 TEL073-435-1195							
発行年月日	西暦 1999年 3月31日							
ふ り が な 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
しせきわかやまじょう 史跡和歌山城	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 いちばんちよう 一番丁	3020150	指 1	34° 13′ 33″	135° 10′ 31″	19990714 19991225	1000	史跡整備
所 収 遺 跡 名	種 別	主な時代	主な 遺 構	主な 遺 物		特 記 事 項		
和歌山城	城 跡	江戸時代	石垣、礎石 塼敷	陶磁器・瓦 銭貨・火打石		櫓、土塀などの 規模を確認した		

版 圖



調査地周辺航空写真（北から）



調査地近景（北西から）



A区 調査前の状況（南から）



A区 調査前の状況（南東から）



A区 全景 (南から)



A区 全景 (西から)



A区「月見櫓」(南から)



A区「多聞櫓」(北から)



A区 調査区西端部 (東から)



A区 調査区南端部 (北から)



A区 「月見櫓」礎石1・2・3 (東から)



A区 「多聞櫓」礎石4 (北から)



A区 石垣沈下状況 (西から)



A区 集石 (南から)



A区 檣台石垣 (北西から)



A区 SV-3 立面 (南から)



A区 SV-4 立面 (南から)



A区 SV-5・6 立面 (南西から)



A区 サブトレンチ1全景 (東から)



A区 サブトレンチ2全景 (西から)



A区 サブトレンチ2 全景 (東から)



A区 「月見櫓」石列立面 (南から)



A区 サブトレンチ3全景 (西から)



A区 サブトレンチ3全景 (東から)



A区 サブトレンチ3 土層堆積状況 (北から)



A区 サブトレンチ3 SV-4 石垣基底部 (西から)



A区 サブトレンチ4 全景 (西から)



A区 サブトレンチ4 全景 (東から)



A区 サブトレンチ4 東側土層堆積状況（北西から）



A区 サブトレンチ4 西側土層堆積状況（北から）



A区 埋設石積（北から）



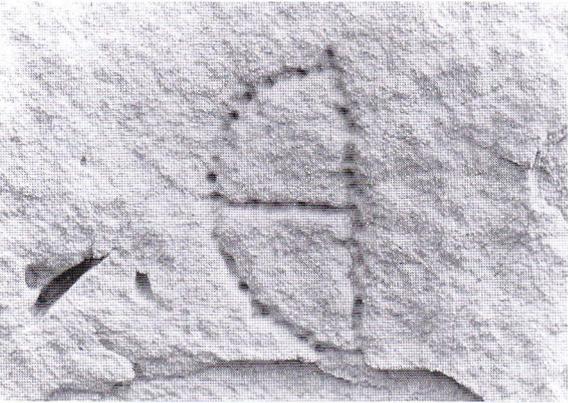
A区 サブトレンチ5 SV-4石垣底部（西から）



刻印 1



刻印 2



刻印 3



刻印 5



刻印 6



刻印 8



刻印 9



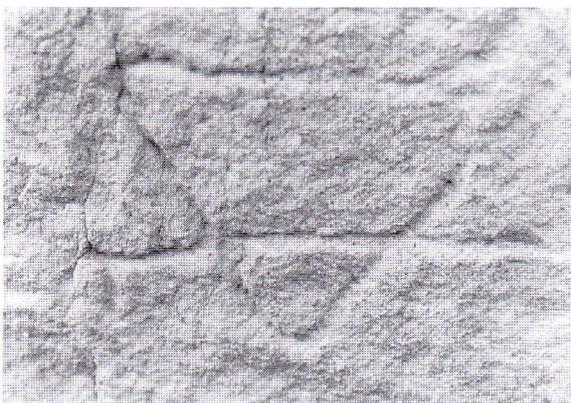
刻印 10 · 11 · 12



刻印 13



刻印 14



刻印 15



刻印 17



刻印 18



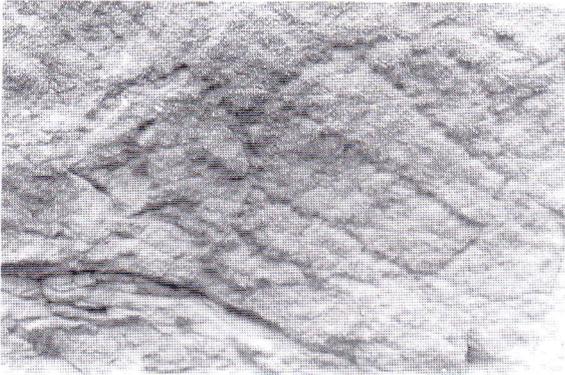
刻印 19



刻印 20



刻印 21



刻印 22



刻印 23



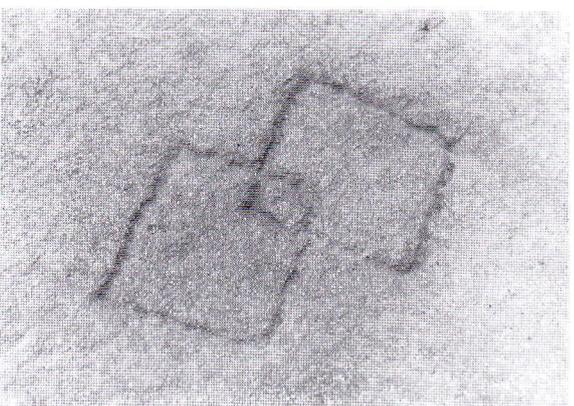
刻印 24



刻印 25



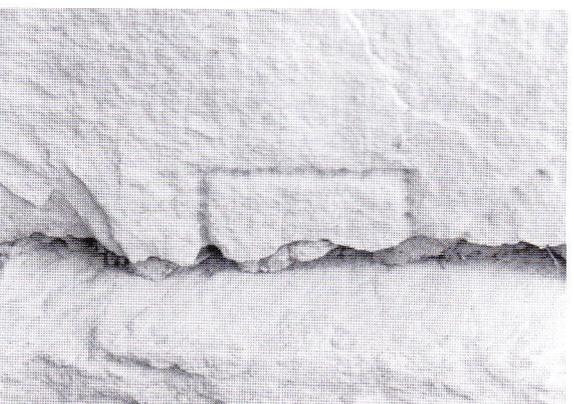
刻印 26



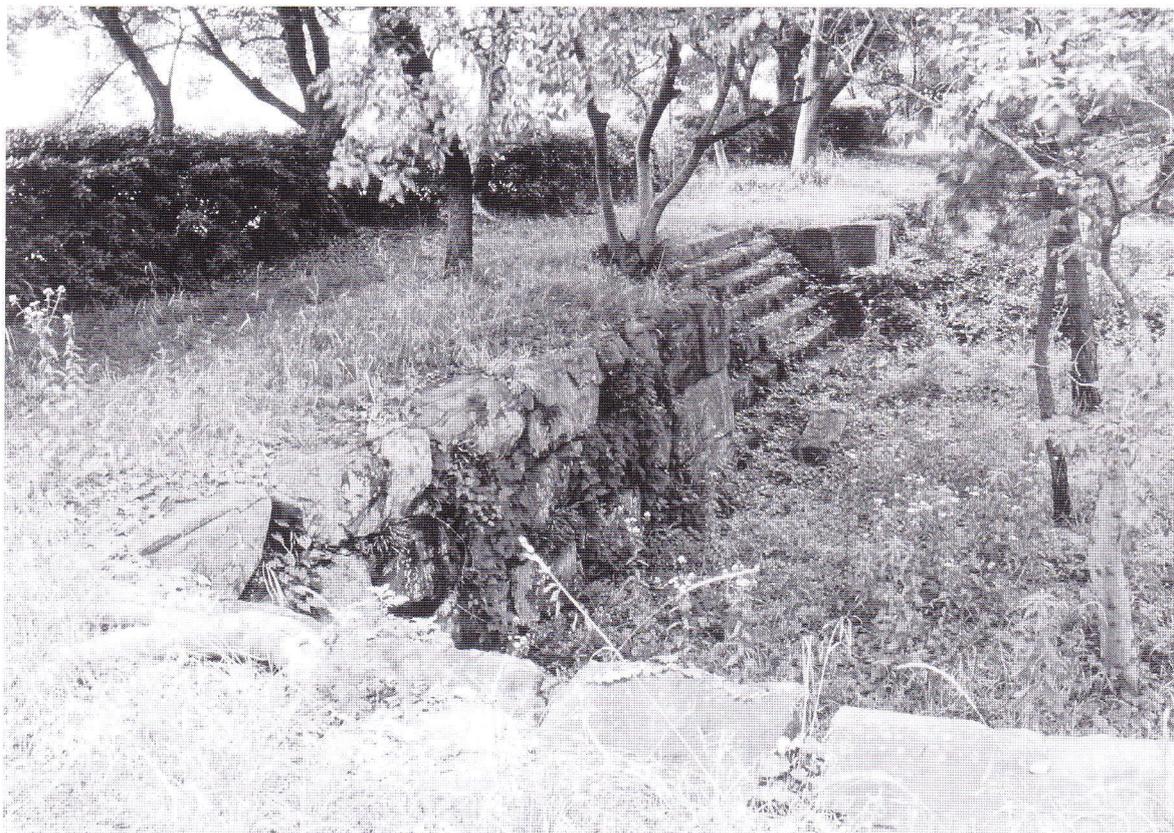
刻印 27



刻印 28



刻印 29



B区 調査前の状況（南西から）



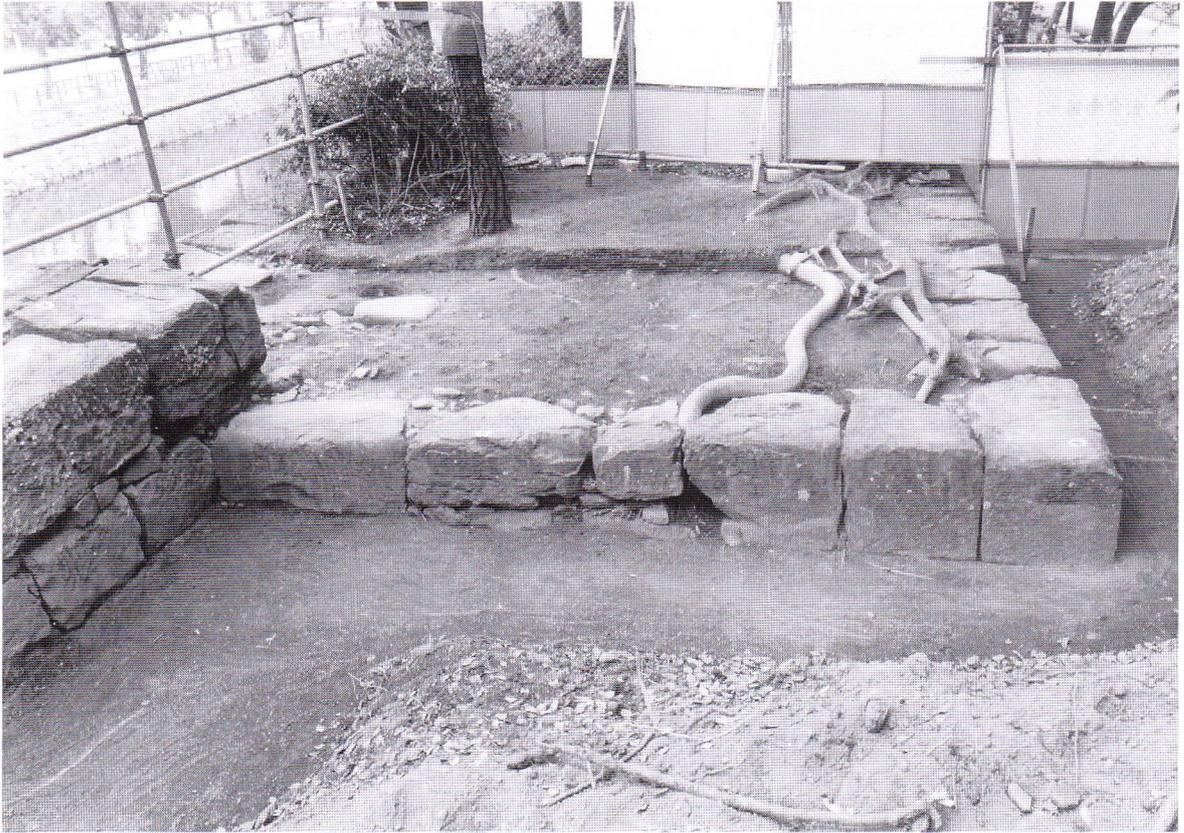
B区 調査前の状況（東から）



B区 全景 (東から)



B区 全景 (西から)



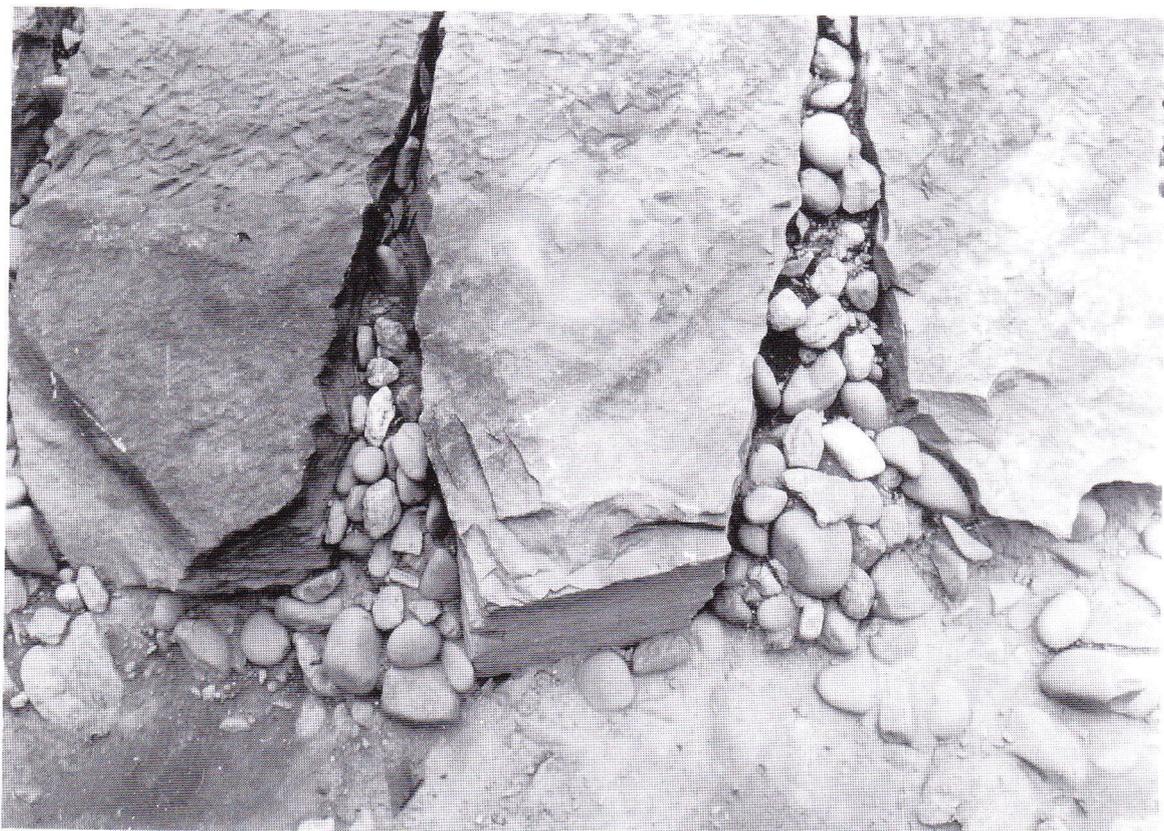
B区 「御小納戸蔵」 全景（西から）



B区 「御小納戸蔵」 南面石垣（南から）



B-4区 全景 (西から)



B-4区 北面石垣上面裏込状況 (南から)



B - 4区 「物見櫓」西側石列（北から）



B - 4区 「物見櫓」西側石列（南から）



B-3区 南面石垣 (南から)



B-3区 南面石垣 (南から)



B-3区 全景 (東から)



B-3区 全景 (西から)



B-3区 階段2 東側石列 (南から)



B-3区 階段2 西側石列 (南から)



B - 3区 階段5 東側石列 (南から)



B - 3区 土層堆積状況 (北から)



B-3区 礎石列 (東から)



B-3区 礎石列 (西から)



B-3区 北面石垣上面裏込状況（南から）



B-3区 南面石垣上面裏込状況（北から）



B-3区 階段3 (南から)



B-3区 階段3 (東から)



B-3区 階段4 (南から)



B-3区 階段4 (東から)



B-3区 南面石垣 (南から)



B-3区 南面石垣 (南から)



B-1.2区 全景 (東から)



B-1.2区 全景 (西から)



B-1区 全景 (北から)



B-1区 全景 (南から)



B-2区 「埴敷」全景（西から）



B-2区 「L字状」瓦列（南から）



B-2区 土層堆積状況 (北から)



B-2区 南面石垣 (南から)



B - 2区 「埴敷」下層「駿河櫓」東側礎石列（南西から）



B - 1区 東面石垣（東から）



B区 サブトレンチ1全景 (南から)



B区 サブトレンチ2全景 (南から)



B区 サブトレンチ3 全景 (南から)



B区 サブトレンチ3 「物見槽」 礎石7 (東から)



B区 サブトレンチ4 全景 (南から)



B区 サブトレンチ4 「物見櫓」西側石列立面 (西から)



B区 サブトレンチ5 全景 (南から)



B区 サブトレンチ5 全景 (西から)



B区 サブトレンチ6 全景 (南から)



B区 サブトレンチ6 礎石8 (東から)



B区 サブトレンチ6 焼土検出状況（東から）



B区 サブトレンチ6 礫層検出状況（東から）



B区 サブトレンチ7全景 (南から)



B区 サブトレンチ7全景 (西から)



B区 サブトレンチ8全景 (西から)



B区 サブトレンチ8土層堆積状況 (北から)



B区 サブトレンチ9全景 (東から)



B区 「駿河櫓」東側礎石列 (北から)



B区 サブトレンチ II 全景 (南から)



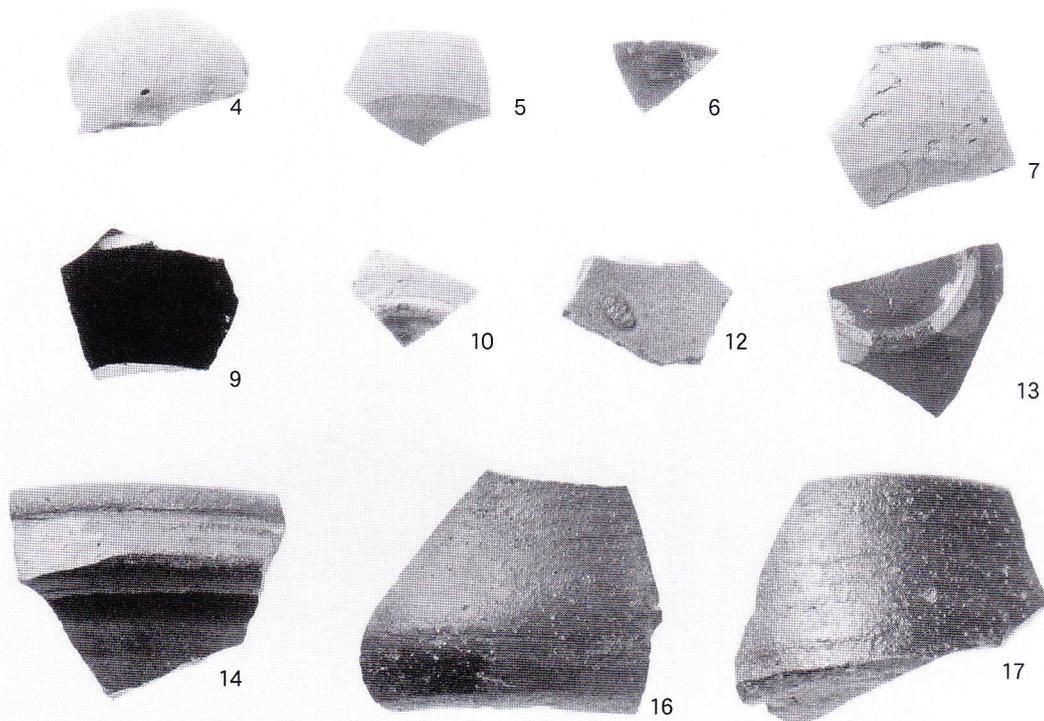
B区 サブトレンチ II 石垣・階段 5 基底部 (南から)



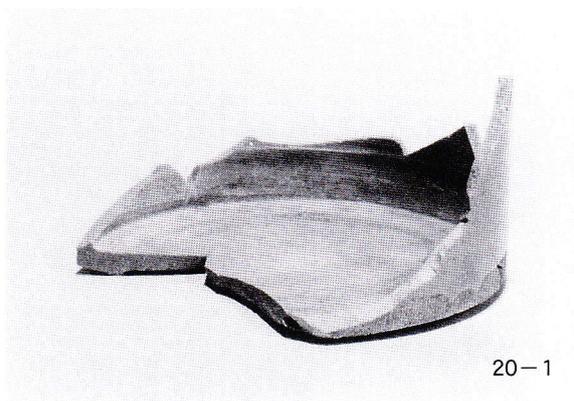
B区 サブトレンチ 11 西壁土層堆積状況 (東から)



B区 サブトレンチ 11 東壁土層堆積状況 (西から)



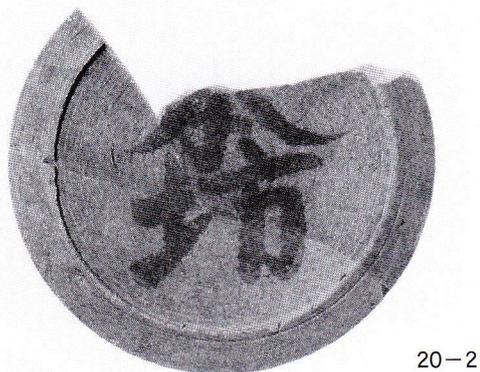
土師器 4～7 皿、瀬戸・美濃系陶器 9 天目茶碗、志野 10 皿、肥前系陶器 12・13 皿、
備前焼 14 播鉢 16 水指 17 建水



近在窯系陶器 20 灰落し (立面)



近在窯系陶器 21 急須蓋



同上 (底面)



同上 22 急須身



23-1

肥前系陶器 23碗 (立面)



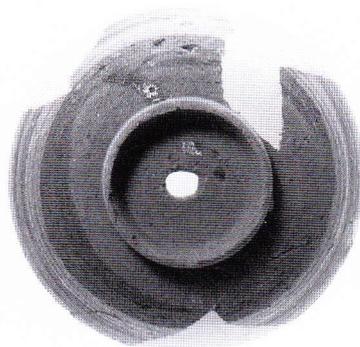
24-1

肥前系陶器 24碗 (立面)



23-2

同上 (底面)



24-2

同上 (底面)



29

肥前系磁器染付 29碗



30

肥前系磁器染付 30碗

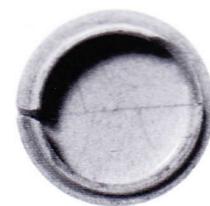


31

肥前系磁器染付 31碗

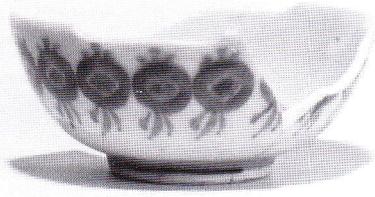


35



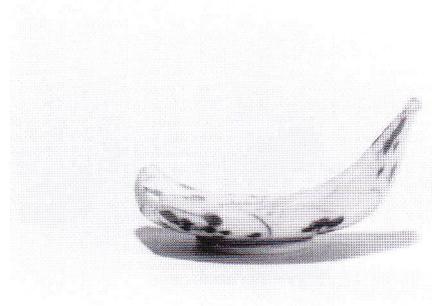
36

肥前系磁器染付合子 35盖 36身



40-1

染付 40 碗



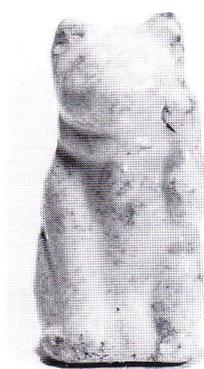
38

瀬戸・美濃系磁器染付 38 端反り碗

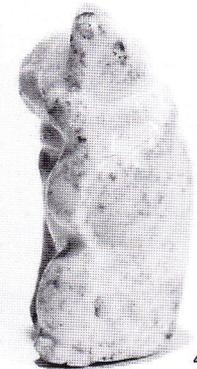


40-2

同上 (底面裏銘)

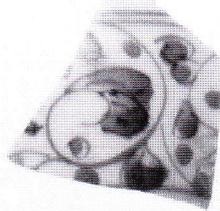


41-1

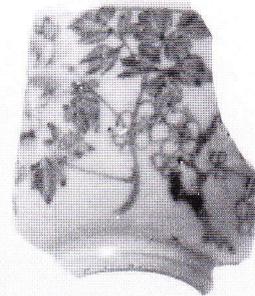


41-2

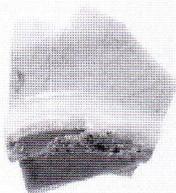
白磁 41 人形 (左 正面、右 側面)



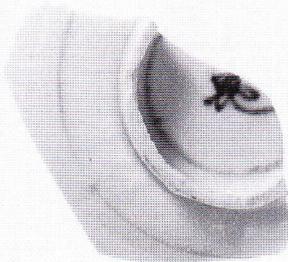
42



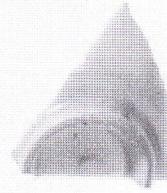
44



46

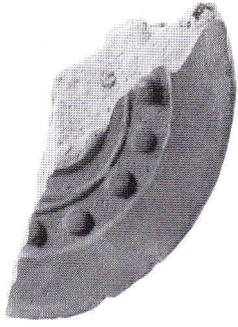


43



45

中国製染付 42 ~ 46



48

48 軒丸瓦



50

50 軒丸瓦



51

51 軒丸瓦



55

55 軒丸瓦



58

58 軒丸瓦



63

63 軒丸瓦



68

68 軒丸瓦



70

70 軒丸瓦



73

73 軒平瓦



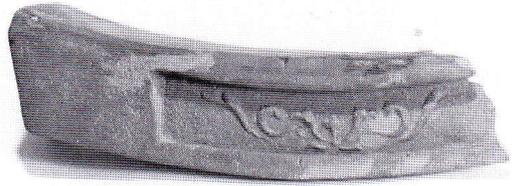
75

75 軒平瓦



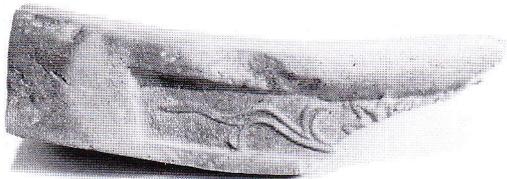
78

78 軒平瓦



83

83 軒平瓦



86

86 軒平瓦



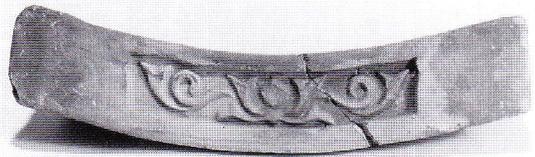
89

89 軒平瓦



90

90 軒平瓦

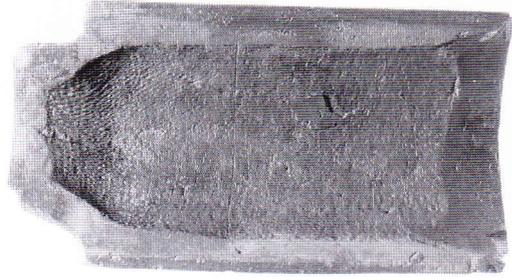


91

91 軒平瓦



93-1

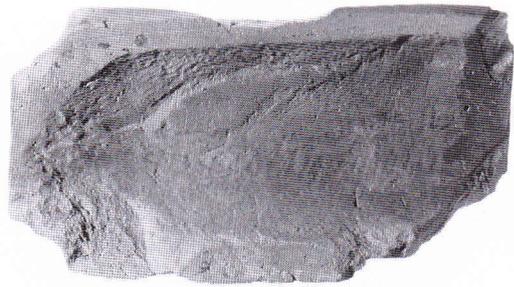


93-2

93 丸瓦 (左凸面、右凹面)



94-1



94-2

94 丸瓦 (左凸面、右凹面)

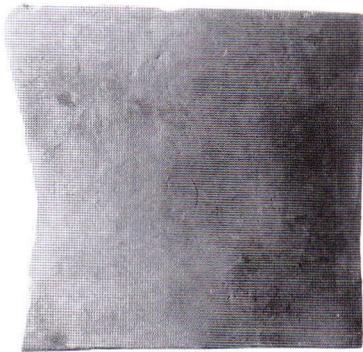


100-1

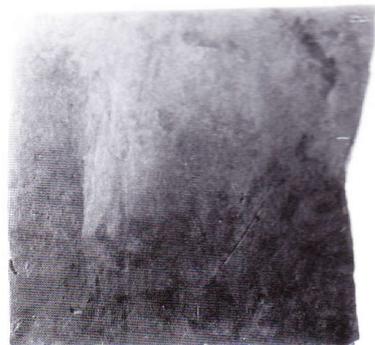


100-2

100 平瓦 (左凹面、右凸面)



101-1



101-2

101 平瓦 (左凹面、右凸面)



102-1



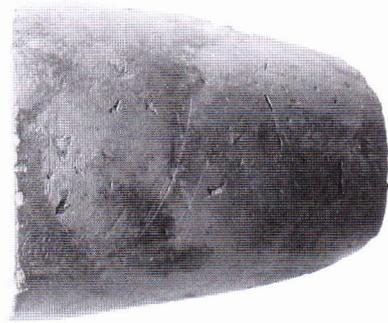
102-2

102 三葉葵紋鬼瓦 (左表、右裏)



104

104 棟込瓦 (菊丸)



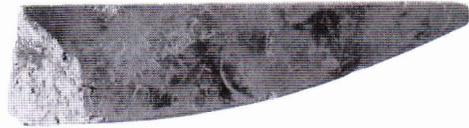
105

105 棟込瓦 (輪違い)



106-1

106 面戸瓦 (左表、右裏)



106-2



107

107 面戸瓦 (裏)



108

108 面戸瓦 (裏)

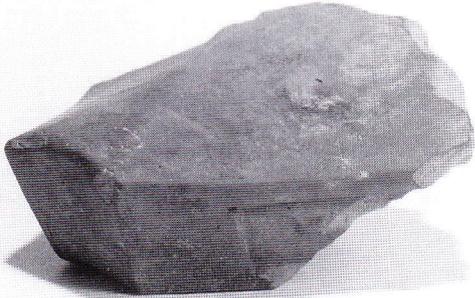


109-1



109-2

109 鳥伏間瓦 (左正面、右側面)



110

110 隅軒平瓦

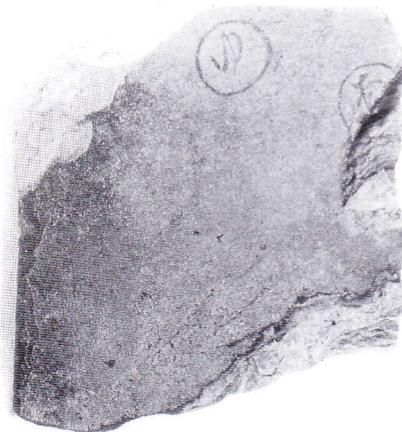


111

111 掛瓦

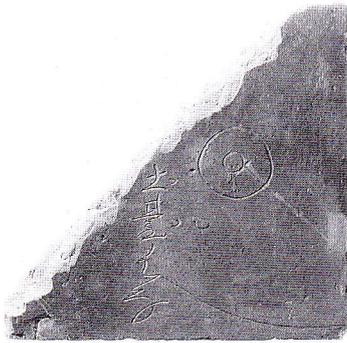


113



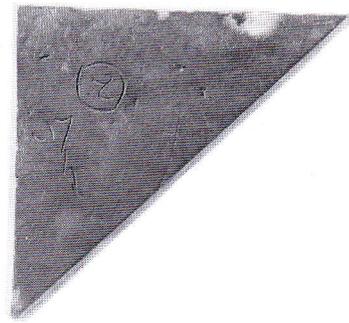
114

113·114 磚 (墨書)



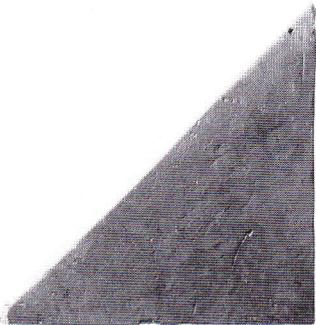
116

116 埴 (ヘラ描き)



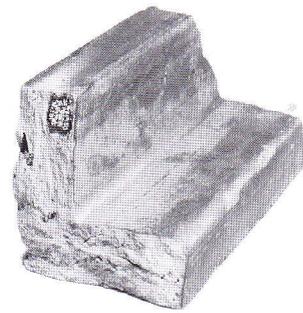
117

117 埴 (ヘラ描き)



118

118 埴



119

119 L字状瓦



120



121



122



123



124



125



126



127

金属製品 120～123 寛永通寶、124 模造銭、125 不明金具、126 鉄釘、石製品 127 火打石



平成11年3月31日発行

史跡和歌山城 第19次発掘調査概報

編集・発行 (財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印刷 中央印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 1999